

「京城日報」における日本語文学：文芸欄・連載小説の変遷に関する実証的研究

巖, 基権

<https://doi.org/10.15017/1543916>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

「京城日報」における日本語文学

— 文芸欄・連載小説の変遷に関する実証的研究 —

巖基権

《目次》

凡例

序章

序章	1
第一節 本論文の問題設定	1
第二節 本論文の目的と構成	3

第一部 「京城日報」における文芸欄と連載小説・講談の変遷

第1章 「京城日報」における文芸欄の形成——その成立と役割を中心に	9
第一節 創刊と初期の編集人たち	9
第二節 編集人の変遷と初期の文芸欄	10
第三節 昭和初期から日中戦争前後まで	15
第四節 日中戦争から廃刊まで——「文芸」欄から「文化」欄へ	17

第2章 「京城日報」における連載小説と講談

第一節 「京城日報」収録の連載小説と講談をめぐって	23
第二節 連載物の書誌情報と転載の問題	36
第三節 事例一——「林芙美子」の資料をめぐって	41
第四節 事例二——「久生十蘭」の資料をめぐって	44

第二部 「京城日報」をめぐる文学者と作品の移動

第3章 脚色・挿入される関東大震災——上司小剣「災後の恋」論……………48

第一節 「京城日報」と「災後の恋」、二つの震災描写……………48

第二節 震災後の上司小剣の発言をめぐって……………51

第三節 「東京」から「災後の恋」へ……………53

第四節 「暗転」ダーク・エピソード後の震災の描き方と作者の戦略……………57

第4章 「京城日報」における芥川龍之介の「提灯文」をめぐって——宮崎光男との親交を中心に……………64

第一節 芥川に「紹介文」を書かせた男……………64

第二節 宮崎光男という人物とその創作活動……………65

第三節 創作と金銭をめぐった交流……………68

第四節 戦後に人脈を点す「提灯文」……………69

第5章 菊池寛たちの昭和五年の朝鮮訪問をめぐって——講演会で愚痴をこぼす文学者……………72

第一節 「スピード飛行講演の旅」に出る菊池寛たち……………72

第二節 税金滞納と小説のモデル問題……………74

第三節 多様なバージョンの「文芸の鑑賞と創作」……………76

第四節 菊池寛たちの「京城日報」の連載小説……………77

第6章 「京城日報」における検閲の問題——佐藤春夫の「律儀者」を中心に……………81

第一節 新聞紙法と「内地」の検閲システム……………81

第二節 佐藤春夫の「律儀者」を事例として……………82

第三節 「外地」朝鮮の検閲制度	87
第四節 「京城日報」における検閲の実態	86
第7章 「京城日報」における大衆小説の成立と変遷——朝鮮文人協会の改革と『国民文学』をめぐって	90
第一節 「内地」における「大衆小説」をめぐる議論	90
第二節 「京城日報」における「大衆小説」の変遷	91
第三節 朝鮮文人協会の改革と「大衆小説」	95
第四節 「国民文学」の実践としての「大衆文学」	96
終章	103
参考文献	111
初出一覧	107
付録—「京城日報」における文芸関連記事データベース	

凡例

○新聞名・論文などは「」で示し、雑誌やその他の研究書名は『』を用いた。

○引用文中で文字がつぶれて、判別が出来ない字は「□」で示した。

○なお、引用文の漢字はすべて新字体に改め、その他の表記は原文通りに表記した。

序章

第一節 本論文の問題設定

本論文は日本の植民地時代に「外地」の朝鮮で発行された「京城日報」という日本語新聞における文芸活動について実証的に考察するものである。

「京城日報」は一九〇六（明39）年に当時の初代統監である伊藤博文によって朝鮮で創刊された。熊本の国権党が中心となって一八九五（明28）年に安達謙蔵によって朝鮮で創刊された「漢城新報」と、一九〇四（明37）年四月に菊池謙讓によって創刊された「大東新報」を統合したものである。「京城日報」は最初、日本語とハングルで発行されたが、創刊から約一年後の一九〇七（明40）年九月二日にはハングル版の発行が中止となり、日本語版だけが見られるようになる〔注1〕。こうした「京城日報」に関する研究は少なく、本格的な研究書としては、鄭晉錫の『言論朝鮮総督府』（コミュニケーション・ブックス、二〇〇五年五月六日、ソウル）や李相哲の『朝鮮における日本人経営新聞の歴史』（角川学芸出版、二〇〇九年二月二十八日）を見るのみである〔注2〕。これらは主に経営者たちや朝鮮総督府との関係などの京城日报社の社史に関する研究にその重点が置かれている。

論者はこのような「京城日報」に関する先行研究を踏まえた上

で、これまでほとんど注目されてこなかった「京城日報」における文芸活動に焦点を当てる。戦後ほぼ七〇年を迎えようとする現在まで「京城日報」における文芸活動については日韓双方の文学研究において顧みられることがなかった。「京城日報」が発行された植民地時代から現在までに編まれた日韓双方の種々の文学全集などに「京城日報」の多くの作品が反映されることはなかった。そもそも「外地」で発行されていた「京城日報」においてどのような人たちが、どのような文芸活動をしていたのか、そうした基本的なデータすら整理されていないのが従来の現状である。

本論の意義の一端は、「京城日報」における文学・文芸活動の基本的なデータを調査、整理した点にある。その具体的な紹介に入る前に、本論の背景となる日本と韓国ひいては東アジアにおける「日本語文学」研究と、日本語新聞の文芸に関する研究の現状を概観してみよう。

日本における旧植民地地域の文芸に関する研究は一九九〇年代に入ってから本格的に行われた〔注3〕。そうした中、一九九六（平8）年に発行された黒川創編『〈外地〉の日本語文学選』（全三巻、新宿書房、一九九六年一月〜三月）を起点として、「〈外地〉日本語文学」という研究が方向付けられた。特に、その「〈外地〉日本語文学」の集大成として神谷忠孝・木村一信編『〈外地〉日本語文学論』（世界思想社、二〇〇七年）と、その続編の『〈外地〉日本語文学への射程』（双文社出版、二〇一四年三月二十八日）が発行され、「〈外地〉日本語文学」研究が活発に行われている。

一方、韓国でも二〇〇〇年代に入ってから今までの「親日文学」として見られてきた「日本文学」を、「二重言語文学」という観点から捉え直す傾向から「日本文学」研究が盛んに行われてきた。特に、高麗大学の日本研究センターでは「植民地日本文学・文化シリーズ」として、いくつかの成果を出している。韓国人研究者同士の研究だけではなく、日本や中国、台湾などの研究者たちとの共同研究も行い、その成果を次々と出しているのである。その代表的なものとして『帝国日本の移動と東アジア植民地文学』1・2（図書出版ムン、二〇一一年一月一日、ソウル）を挙げることができる。1巻は「総論及び朝鮮」を、2巻は「台湾、満洲・中国、そして環太平洋」をその研究の舞台として設定している。このような東アジアを舞台とする植民地文学の研究者同士の共同研究のさらなる活性化のため、二〇一三（平25）年一〇月にソウルの高麗大学で「東アジアと同時代日本文学フォーラム」が開催された。これは「日本の近代文学を東アジアの観点から再構築」し、「開かれた連帯としての東アジアにおける疎通を促す」ことを目的として開かれたものである〔注4〕。

本論文の研究対象である「京城日報」も含めて、植民地時代に朝鮮で発行されていた数多くの日本文学新聞や雑誌に関する研究は、その一次資料の収集や整理などの混乱さから、未だにその研究が充分に行われたとは言えない〔注5〕。が、前述したように近年韓国では高麗大学の日本研究センターを中心に、植民地日本文学に関する資料収集や論考の両面で活発に研究活動が行われて

いる。資料の面では『韓半島・満洲日本文献（1868—1945）目録集』（全一三巻、図書出版ムン、二〇一一年二月、ソウル）と『韓半島・満洲日本文献（1868—1945）目次集』（全二七巻、図書出版ムン、二〇一一年、ソウル）が目立つ。しかし、その調査の対象の範囲が韓国・満洲地域で発行された雑誌や単行本などに限定されており、新聞やその文芸欄に関する調査は漏れている。

また、代表的な論文集として、一九〇八（明41）年から一九一一年（明44）年まで朝鮮で発行された総合雑誌『朝鮮』を研究対象とした『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人たち』（図書出版ムン、二〇一〇年一〇月三日、ソウル）が見受けられる。他にも一九〇〇年代に朝鮮で発行された多様な雑誌の文芸に関する研究が盛んに行われており、その文芸活動の詳細を明らかにすると共に、文芸欄の役割についても論じている。しかし、このように朝鮮で発行された雑誌の文芸に関する研究は活発に行われている反面、日本文学新聞における文芸に関する研究は未だにほぼ未開拓の状態とも言えよう〔注6〕。

一方、日本でも「外地」で発行された新聞や「内地」で発行された新聞の文芸欄に関する研究はいくつかその研究の蓄積はあるが、充分に行われたとは言えない。「外地」の新聞に関しては、近年出された研究成果報告書の「昭和戦前新聞文芸記事に関する総合的調査及び研究」（二〇〇七年三月）が目立つ。「外地」の新聞と「内地」の地方紙などを視野に入れて詳細に作成された報告書である。その目次は以下のように、奥出健「昭和戦中新聞文芸・

資料と解題」、神谷忠孝「戦時下新聞文芸の研究「樺太日日新聞」」、池内輝雄「爪哇日報」文学関係記事の調査および考察」、木村一信「爪哇日報」を創った人たち―佃光治の事跡」、竹松良明「ジャワ軍政下の新聞活動」、十重田裕一「大阪毎日新聞社刊行雑誌「芝居とキネマ」にみる文学関係記事をめぐる」、安藤宏「「文芸年鑑」記載の雑誌発行データ（大正十三年―昭和二十三年）の調査」の七つの章となっている。この中で特にインドネシアで発行されていた「爪哇日報」に注目し、調査を行った池内輝雄は「〈外地〉新聞の文芸欄―『爪哇日報』をめぐる」（前記の『〈外地〉日本語文学論』所収）でも、その文芸欄の変遷と共に、文芸欄が政府の移民政策とも無関係ではなかったと論じている。

次に、「内地」の地方紙の方を目を向けると、代表的な研究として森英一の一連の資料調査がある。石川県で発行されていた「北国新聞」や「北陸毎日新聞」と、秋田県の「秋田魁新報」における文芸欄を整理した「「北国新聞」文芸関係記事年表稿」〔注7〕、「「秋田魁新報」文芸関係記事年表稿」〔注8〕、「『北陸毎日新聞』文芸関係記事年表稿」〔注9〕でその文芸欄を詳細に紹介している。また、群馬県の地方紙である「上毛新聞」の文芸記事を調査した市川祥子「「上毛新聞」文芸関係記事リスト」〔注10〕も見受けられる。

このように「内地」新聞の文芸（欄）に関してはこれまでいくつかの研究調査が行われたが、「外地」の新聞の文芸欄に関して漸く着手され始めた感がある。こうした状況について、鄭炳浩

は朝鮮半島の日本語文学は日本では一九九〇年代から、韓国では二〇〇〇年代から活発に研究が行われ、「一国中心的な国文学研究の慣習のせい」で「これまで余り研究されてこなかった分野が漸く注目されるようになった」と評価をしている〔注11〕。

しかし、このような問題意識にもかかわらず、日本では朝鮮を経験した日本人作家たちや渡日作家たちに関する研究が主に行われており、韓国でも著名な作家の日本語文学の研究に偏っているとし、未だに「一国中心的な国文学研究」から脱していないと指摘もしている。植民地朝鮮で発行されていた「京城日報」における文芸活動も、それが「日本文学」なのか「韓国文学」なのかという一国中心的な観点からとらわれ過ぎたあまり、これまで日韓両国の文学研究から除外されてきたのである。鄭炳浩が述べているように、現在の植民地日本語文学の限界を乗り越え、「韓半島植民地〈日本語文学〉の全体像」を明らかにするためにも、「京城日報」という「研究の空白」を埋める必要性が問われていると思われる。このような「研究の空白」を埋めることで、「韓半島植民地〈日本語文学〉の全体像」を更に立体的に鳥瞰することができると思われる。

第二節 本論文の目的と構成

本論文はこのような問題を確認した上で、植民地時代に「外地」の朝鮮で発行された日本語新聞「京城日報」における文芸活動に

ついで考察する。

特に文芸欄と小説などの連載物に注目し、日本語文学が「京城日報」というメディアを通して植民地朝鮮でどのように展開されてきたのかを見取り図を描いてみる。その基本的な作業としては近年出版された復刻版『京城日報』（全一九一巻、韓国図書センター、二〇〇三～二〇〇七年、以下『京城日報』と略す）〔注12〕の一卷から一九一巻までに掲載された文芸関連記事をデータベース化し、連載されていた作品の目次を作成する。その調査の結果になるが、「京城日報」の文芸記事や連載物の執筆者は主に「内地」の日本人が担当しており、その中には著名な作家も作品を寄せている。特に毎日紙面を飾っていた長編連載物の場合、一九四二（昭17）年に漸く朝鮮出身作家が作品を寄せるまで、日本人作家が作品の執筆を受け持っていた。ところが、文芸記事の方に目を向けると、長編連載物の場合とは少し様子が違ってくる。既に一九一七（大6）年七月六日の紙面には朝鮮人作家の名前が見受けられるのである。その作家の名前は「五道踏破旅行記者 李光洙」で、旅行記を連載している。同じ朝鮮総督府の御用紙のハンゲル新聞の「毎日申報」に「無情」（一九一七年一月一日～同年六月四日）の連載が終わってから一ヶ月後に、「京城日報」に日本語で文章を寄せているのである。この資料はこれまでの李光洙の文学研究においてもあまり知られていないようである〔注13〕。その後、「京城日報」の紙面には暫く朝鮮人執筆者の名前が見当たらなくなるが、李光洙の旅行記の掲載から一〇年後の一九二七（昭2）年六月一八日の

紙面に李寿昌「青年の日記」が二八日まで全七回にわたって連載されている。また、これに続いて「京城日報」には朝鮮人執筆者の名前が散見される〔注14〕。

このように「京城日報」の文芸記事の場合、数少ない例ではあるが、かなり早い時期から朝鮮人作家の執筆が行われたケースもあった。それは前述したように韓国の「二重言語文学」研究が著名な作家の作品、その中でも主に日中戦争以後の作品研究に偏っていることに対して、改めて一九一〇年・一九二〇年代の日本語新聞や雑誌における文芸の「研究の空白」の存在を想起させる。

このように「京城日報」の紙面は、早い時期から日本人執筆者にだけではなく、珍しい例ではあったが朝鮮人にもその文芸活動の場を提供する場合もあった。では、「内地」日本人、在朝日本人、朝鮮人執筆者の作品が混合されていた「京城日報」の文芸欄はどのような役割を果たしてきたのだろうか。また、総督府の御用紙としての新聞の性格とはどのように作用するのだろうか。

本論文はこのような課題に答えるため、構成は大きく二部に分かれている。第一部「京城日報」における文芸欄と連載小説・講談の変遷」では、復刻版『京城日報』を主なテキストとし、敗戦による廃刊までの文芸欄の変遷について概観する。また、連載小説や講談のような連載物の目録を作成し、作品の転載の問題について考察を行う。第一章では復刻版『京城日報』収録の一九一五（大4）年から廃刊の一九四五（昭20）年までの文芸欄を担当していた編集人やその変遷について概観する。紙面の構成や作品を寄せ

た作者などを表でまとめながら、最終的には文芸欄の役割について考える。第2章では、毎日紙面を飾っていた連載小説と講談の目録を作成し、今までの「日本文学史」から漏れている新資料の紹介と共に、その事例として林芙美子と久生十蘭の作品を取り上げ、作品の転載について解説を行う。

第二部「京城日報」をめぐる文学者と作品の移動」では、作品が「京城日報」の紙面に、脚色、人脈、移動、検閲、大衆小説といった多様な視点から、掲載される過程を探ってみる。第3章では、「京城日報」に連載された上司小剣の「災後の恋」を取り上げ、内地の新聞に連載されていた「東京」という長編小説と比較しながら、同じ内容が外地の朝鮮のメディアではどのように脚色されたのかについて考察する。第4章では「京城日報」に友人の宮崎光男のために、作品の推薦文を書いた芥川龍之介や菊池寛などあまり注目されてこなかった宮崎光男と芥川龍之介や菊池寛などの文壇人たちとの親交を明らかにする。第5章では、一九三〇（昭和5）年満洲に行く途中一泊二日で京城に滞在しながら講演会などを開いた菊池寛たちの動きに注目する。「京城日報」がどのようにそれを報道し、また他の朝鮮のメディアがどのようにそれを見ていたのかを探りながら、京城日报社と「内地」の文壇人たちの招待の狙いや、その後の関係についても視野に入れる。第6章では佐藤春夫の「律儀者」という短編小説を取り上げ、内地で検閲を受けた作品が外地ではそのまま掲載されることになる一連のプロセスについて考える。最後の第7章では朝鮮出身としては初めて

「京城日報」に連載小説を掲載することになる李石薫の「永遠の女」に焦点を当てる。その際のキャッチフレーズの「大衆小説」に注目し、「京城日報」における大衆小説の動きを概観しながら、戦時中にその概念がどのように変容していくのかを探る。

このような考察により、これまでの内地中心の「日本文学史」の偏重を明るみに出すと共に、その際の内地と外地の上下関係が未だに働いていることがわかるだろう。また、このことを通して単純に内地／外地という枠組みには収めることのできない「帝国」編成のズレを垣間見ることができると思われる。

注

〔1〕ハングル版と日本語版の「京城日報」と共に、英語版の御用紙もあった。「京城日報」の創刊の同じ年の一九〇六年二月五日に当時の統監府の御用紙として再発行された「The Seoul Press」がそれである。一九〇五年六月三日に創刊された「The Seoul Press Weekly」を統監府が買収したものである。伊藤博文の広報秘書であった頭本元貞を初代社長として創刊された「The Seoul Press」は一九三七年五月まで続いた。

〔2〕研究書以外に、論文としては柴崎力栄「徳富蘇峰と京城日報」（『日本歴史 第426号』吉川弘文館、一九八三年一〇月）、森山茂徳「現地新聞と総督政治―『京城日報』について―」（『近代日本と植民地7、文化のなかの植民地』、岩波書店、一九九三年一月八日）、李鍊「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割につ

いて」（「メディア史研究 第22号」ゆまに書房、二〇〇六年一月）などがある。特に、李鍊は「『京城日報』は総督府時代には朝鮮における中央紙であると同時に成立から総督府の広報紙の役割を果たし」と述べながら、「『京城日報』の社長と経営方針についての研究は総督政治或いは植民地言論統制研究には不可欠なものである」と主張している。

[3] 代表的な研究書としては川村湊『異郷の昭和文学』（岩波書店、一九九〇年一〇月一九日）、荻谷信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験』（世界思想社、一九九二年七月三〇日）、川村湊『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、一九九四年二月一日）、垂水千恵『台湾の日本語文学』（五柳書院、一九九五年一月二四日）など。

[4] 今後も半年または一年ごとに、東アジア各国・地域を巡回しながら開催される予定で、今回のフォーラムで行われた論文をまとめて、『跨境 日本語文学研究』（二〇一四年六月三〇日）が出版された。

[5] もちろんその試みが全くなかったわけではない。まず、新聞小説研究では、一八七五年から一九五五年までの新聞小説の目録を作成した高木健夫『新聞小説史年表』（図書刊行会、一九八七年五月二〇日）がある。内地の新聞だけではなく、外地の新聞も視野に入れて整理した労作である。また、朝鮮との関連からは一八八二年から一九四五年まで主に朝鮮人が日本語で書いた文献の総目録を作成した大村益夫・布袋敏博『朝鮮文学関係日本語文献目録』（緑陰書房、一九九七年一月三十一日）がある。新聞だけではなく、雑誌などを幅

広く調査しているが、タイトルからもわかるようにその内容は「朝鮮文学にかかわる日本語文献」となっている。

[6] ホン・ソンヨン「日本語新聞『朝鮮時報』と『釜山日報』の文芸欄研究—1914~1916—」（『日本学報』第57輯2巻、二〇〇三年一〇月）と許錫「明治時代の韓国移住日本文学における内地物語と国民的アイデンティティ形成過程に関する研究—朝鮮新聞の連載小説「誰の物か」を中心に—」を見るのみである。

[7] 「北国新聞」文芸関係記事年表稿（明治・大正篇）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編28、一九八一年一月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇1）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編33、一九八四年二月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇2）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編33、一九八四年二月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇3）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編37、一九八八年二月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇4）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編37、一九八八年二月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇5）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編51、二〇〇二年二月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇6）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編33、二〇〇四年二月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇7）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編54、二〇〇五年二月）、「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇8）」（『金

沢大学教育学部紀要」人文科学・社会科学編25、二〇〇六年二月）、
「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇9、完）」（「金沢大
学教育学部紀要」人文科学・社会科学編26、二〇〇七年二月）。

〔8〕「『秋田魁新報』文芸関係記事年表稿（大正篇・上）」（「金沢
大学教育学部紀要」人文科学・社会科学編28、一九八一年九月）、
「『秋田魁新報』文芸関係記事年表稿（大正篇・下）」（「金沢大
学教育学部紀要」人文科学・社会科学編30、一九八一年九月）、
「『秋田魁新報』文芸関係記事年表稿（昭和篇1）」（「金沢大学教育学
部紀要」人文科学・社会科学編46、一九九七年二月）、
「『秋田魁
新報』文芸関係記事年表稿（昭和篇2）」（「金沢大学教育学部紀
要」人文科学・社会科学編47、一九九八年二月）。

〔9〕「『北陸毎日新聞』文芸関係記事年表稿：昭和篇1」（「金沢大
学教育学部紀要」教育科学編44、一九九二年二月）、
「『北陸毎日
新聞』文芸関係記事年表稿：昭和篇2」（「金沢大学教育学部紀要」
人文科学・社会科学編44、一九九五年二月）、
「『北陸毎日新聞』
文芸関係記事年表稿：昭和篇3」（「金沢大学教育学部紀要」人文
科学・社会科学編44、一九九五年二月）、
「『北陸毎日新聞』文芸
関係記事年表稿：昭和篇4」（「金沢大学教育学部紀要」人文科学・
社会科学編45、一九九六年二月）。

〔10〕「『上毛新聞』文芸関連記事リスト（1）大正10年（1921）8月
～大正12年（1923）3月」（「群馬県立女子大学紀要」26、二〇〇
五年二月）、
「『上毛新聞』文芸関連記事リスト（2）大正12年（1923）
4月～大正13年（1924）3月」（「群馬県立女子大学紀要」27、二

〇〇六年二月）、
「『上毛新聞』文芸関連記事リスト（3）大正13
年（1924）4月～大正15年（1926）3月」（「群馬県立女子大学紀
要」28、二〇〇七年二月）、
「『上毛新聞』文芸関連記事リスト（4）
大正15年（1926）4月～昭和2年（1927）3月」（「群馬県立女子
大学紀要」29、二〇〇八年 平成二〇年二月）、
「『上毛新聞』文芸
関連記事リスト（5）昭和2年（1927）4月～昭和3年（1928）3月」
（「群馬県立女子大学紀要」30、二〇〇九年 平成二二年二月）、
「『上
毛新聞』文芸関連記事リスト（6）昭和3年（1928）4月～昭和4年
（1929）3月」（「群馬県立女子大学紀要」31、二〇一〇年二月）、
「『上毛新聞』文芸関連記事リスト（7）昭和4年（1929）4月～昭
和5年（1930）3月」（「群馬県立女子大学紀要」32、二〇一一年二
月）、
「『上毛新聞』文芸関連記事リスト（8）昭和5年（1930）4
月～昭和6年（1931）3月」（「群馬県立女子大学紀要」33、二〇一
二年二月）。

〔11〕「韓半島の植民地（日本語文学）の研究と課題」（「日本学報」
第25輯、二〇一〇年十一月）

〔12〕復刻版『京城日報』（全一九一巻、韓国図書センター、二〇〇三
～二〇〇七年）の他にも韓国学術情報発行の復刻版（全二〇一巻、
二〇一〇年一月）も存在するが、本論文は九州大学所蔵の韓国図書
センター発行の復刻版を主に参照した。

〔13〕旅行記は次のような題目で連載された。「湖西より」（一九一七
年六月三〇日、七月一日、七月二日）、
「湖南より」（同年七月六
日、七日、八日、九日、一〇日、一四日、一七日、二五日）、
「嶺

南より」(八月一日、一二日、一三日)、「統営より」(八月一六日、一七日)、「新羅の旧都に遊ぶ」(八月二二日、二三日、二四日、二五日、二六日、二九日、三〇日、三一日、九月二日、三日、五日、六日、七日)、「二寸永興まで」(九月一四日、一五日、一七日、二〇日、二六日、二七日、二八日)。このような旅行記は前記の『帝国日本の移動と東アジア植民地文学』1収録の李承信「李光洙の二重語文学の考察」には〈李光洙―日本語文学目録〉表には見当たらない。

〔14〕一九二〇年代の「京城日報」の紙面には、李光洙と李寿昌の文章の他にも、次のような執筆陣とそのタイトルが見受けられる。韓再熙「狂想片々」(一九二七年九月二日～一五日、全一一回)、李寿昌「創作 図書館にて」(一九二八年三月二〇日～二七日、全五回)、崔充秀「廢邑の人々」(一九二八年五月二二日～六月二七日、全三〇回)、李光天「秋風随言」(一九二八年一〇月?日～五日?、全四回?)、李光天「『街頭風景』読後感」(一九二九年二月一六日)、カン・サンホ「童話 ドロブ」(一九二九年八月九日～一三日、全四回)など。

第一部 「京城日報」における文芸欄と連載小説・講談の変遷

第1章 「京城日報」における文芸欄の形成

——その成立と役割を中心に

第一節 創刊と初期の編集人たち

朝鮮での最初の日本語新聞は一八八一（明14）年二月一日、釜山で創刊された「朝鮮新報」である。一八七六（明9）年二月に締結された日朝修好条規により、釜山が開港した結果、増加した日本人居留民のためにできた新聞であった。釜山商法会議所によって創刊された新聞で、主に商業に関する記事が多かった。引き続き、仁川でも「仁京城隔週商報」という新聞が済物商報社から一八九〇（明23）年一月二十八日に創刊される〔注1〕。その他にも一八九七（明30）年に創刊された元山の「元山時事」や木浦で一八九九（明32）年に創刊された「木浦新報」があった。ちなみに、仁川は一八八三（明16）年に、元山は一八八〇（明13）年にそれぞれ開港した。こうした日本語新聞が本格的に増え始めたのは日露戦

争がきっかけにしていたことだった。

李相哲は新聞が増えた原因として在朝日本人の増加と共に、外務省が新聞に補助金を提供したことを挙げている〔注2〕。つまり、「新聞が在外公館に代わって在留日本人の生活を「指導」していたという」ことになったのである。こうした雰囲気の中で、京城で朝鮮統監府により「京城日報」が創刊されたのである。

「京城日報」創刊時のメンバーである丸山幹治が書いた「創刊当時の思出」（「京城日報」一九二六年九月一日〜九日、全八回）と「創刊当時の想ひ出」（「京城日報」一九三三年四月二七日）によると、丸山が京城日報社の編集長として京城に赴任したのは一九〇六（明39）年八月中旬のことであった。すでに京城には初代社長として朝日新聞編集局長であった伊東祐侃と、東京朝日新聞の論説記者出身だった主筆の服部暢が来ていた。続けて、早稲田大学を卒業したばかりの牧山耕蔵と、日本新聞にいた薄田斬雲が入社しそれぞれ韓国政府側と社会部を担当した。また、校正兼挿絵係は漫画家の鳥越静岐が担当し、統監府担当記者の武田卓爾や営業の松本雅太郎が加わったと言う。一方、東京に支局はなく、後に「東京朝日新聞」の主幹兼経済部長になる牧野輝智が通信事務を務めた。通信員としては釜山に山口諫男が派遣された。その他にも、奥田直毅、長野直彦、それから丸山の回想文には登場していないが漫画家の細木原青起も創刊を前後にして入社した。そして、新聞「日本」で働いていた丸山幹治がいたのであった。丸山も早稲田大学出身で号は侃堂である。前記の「創刊当時の想ひ出」で、丸山が

「或る日、電話で、今の早大総長田中穂積君から招かれ」と書いているように創刊時から早稲田大学出身の人物が多かった。

この中で文芸欄を担当したのは、社会部を担当した伝記作家として知られている薄田斬雲と鳥越静岐、細木原青起であったと思われる〔注3〕。当時の東京専門学校（現早稲田大学）出身の薄田は著書として鳥越静岐と共著の『朝鮮漫画』（朝鮮総督府編、一九〇八年一月）や『ヨボ記』（日韓書房、一九〇八年六月）、『暗黒なる朝鮮』（日韓書房、一九〇八年一〇月）などを書いている。一方、細木原は後の「京城日報」創刊二〇周年の「朝鮮の印象と批判（四）」（「京城日報」一九二六年九月四日朝刊）の中で「明治三十九年から四年の三年間、御社に在社中に深く印象づけられた」と回想している。こうした細木原の挿絵が「京城日報」紙面に載せられたのは一九二六（大15）年四月一日から連載された山中峯太郎の「愛別の十字路」の挿絵が最初で最後であった。

このように「京城日報」の創刊時のメンバーでは、「内地」の他の新聞社で経験を積んだ者が多数であった。しかし、文芸欄を担当した薄田と細木原は、朝鮮での経験をきっかけに活発な創作活動を行うようになる。京城日報社の退社後、薄田は早稲田大学出版部編集委員になり、小説家として創作活動をつづける。細木原もわずか三年間の朝鮮での滞在を終えたのち、『早稲田文学』に朝鮮風物の絵を書くなど、徐々に漫画家としての名声を得るようになる。

第二節 編集人の変遷と初期の文芸欄

この節では、創刊から廃刊までの間の「京城日報」の編集人の中で、文芸欄に携わっていた人々に焦点をあてる。その際、前述したように創刊当時から文芸欄に携わっていたと思われる社会部と後に設けられることになる学芸部の編集人を中心に一覧表を作成した。参考資料としては、『新聞総覧』（大空社、一九九一年）を基にした。創刊から廃刊までの社長や文芸欄に携わっていた編集人については表1の通りである。



図1 初期の「京城日報」の文芸欄

表1「京城日報」の社長と編集人たち

年	社長	編集人
大正三年版	吉野左衛門（社長兼主筆）	高山覚威（編集局長件軟派主任）
大正四年版	阿部充家（社長兼主筆）	高山覚威（編集局長理事兼社会部長）
大正五年版	同上	松尾茂吉（編集局長）高賀貞雄（社会部長）
大正六年版	同上	松尾茂吉（編集局長理事兼社会部長）
大正七年版	徳富蘇峰監督辞退、加藤房蔵	松尾茂吉（編集局長兼社会部長）
大正八年版	同上	松尾茂吉（編集局長）西村満蔵（社会部長）
大正九年版	同上	松尾茂吉（編集局長兼政治部長）石井真一（社会部長）
大正一〇年版	同上	西村満蔵（編集部長）高賀貞雄（調査部長）寺田寿夫（社会部長）
大正一一年版	秋月左都夫	泥谷良次郎（編集局長兼調査部長）秋山忠三郎（編集部長兼通信部長） 西村満蔵（社会部長）高賀貞雄（東京支局長）
大正一二年版	同上	泥谷良次郎（編集局長）泥谷良次郎（政治兼調査部長）秋山忠三郎（通信部長）西村満蔵（社会部長）高賀貞雄（東京支局長）
大正一三年版	同上	角田広司（編集局長兼政治部長）秋山忠三郎（調査部長兼通信部長） 西村満蔵（編集部長兼社会部長）※編集部記者に多田毅三
大正一四年版	副島道正	丸山幹治（主筆）西村満蔵（編集部長）寺田寿夫（社会部長）
大正一五年版	同上	角田広司（編集局長）西村満蔵（編集部長）山田勇雄（社会部長兼編集部長）寺田寿夫（学芸部長）
昭和二年版	同上	笠神志都延（編集局長兼編集部長）寺田寿夫（社会部長兼学芸部長）
昭和三年版	松岡正男	寺田寿夫（整理部副部長）多田毅三（調査部記者）
昭和八年版	時実秋穂	寺田寿夫（社会部長）三井実雄（政治部長兼学芸部主任）
昭和九年版	同上	三井実雄（調査部長）秋田藤太郎（整理部長兼学芸部長）
昭和一〇年版	同上	秋田藤太郎（整理部長兼学芸部長）
昭和一一年版	同上	高田知一郎（理事主筆兼編集局長兼学芸部長）
昭和一二年版	高田知一郎	高橋猛（学芸部長）
昭和一三年版	田口弼一	寺田瑛（学芸部長）
昭和一四年版	同上	寺田瑛（学芸部長）
昭和一五年版	御手洗辰雄	寺田瑛（学芸部長兼調査係長）
昭和一六年版	同上	寺田瑛（学芸部長兼調査係長）
昭和一七年版	高宮太平	寺田瑛（学芸部長兼調査係長）
昭和一九年版	同上	寺田瑛（学芸部長）

表1からわかるように、初めて「学芸部長」という肩書が見えるのは一九二六(大15)年版の『新聞総覧』においてのことで、それ以前には学芸部は見当たらない。しかし、創刊して早い時期からすでに俳句や講談のような文芸物は「京城日報」の紙面を飾っていた。図1は一九一〇(明43)年二月一七日の紙面で、一面には作者不明の「俳句」と橋本牛人(注4)を選者とする「俳句懸賞募集」の広告が載せられている。他にも同じ紙面に「西湖子爵誕辰賀詞集(6)」、「新刊紹介」、「過去之今日」、それから作者不明の「美代子」という小説が掲載されている。また「読者文芸」(一九一一年五月一日付)や「日報俳壇」(一九一二年二月一七日付)などが見受けられ、初期の「京城日報」の文芸欄は俳句が中心であったと思われる。それには、正岡子規に師事し、国民新聞の俳壇の選者も務めていた社長の吉野左衛門の影響があったと思われる。実際、吉野が京城日報社に在職していた期間中の一九二二(明45)年二月に、前述のように「日報俳壇」が紙面に掲載されたことから裏付けられる。

一九一三(大2)年に合資会社になった京城日报社は、紙面を一日で朝刊と夕刊の二回分を発行するなどの改革を行う。復刻版『京城日報』一巻の収録期間である一九一五(大4)年一〇月の紙面を見ると、朝刊一面に石島雉子郎(注5)を選者とする「日報俳壇」と共に、「日報歌壇」、「日報詩壇」が設けられている。また、朝刊四面には番衆浪人の「瓢の旗風」が連載されている一方、夕刊四面には講談が掲載されている。更に、一九一九(大8)年の二

月には井上剣花坊(注6)を選者とする「日報柳壇」も「京城日報」の紙面に載せられ、基礎的な文芸欄の体裁が整えられたように見える。

また、一九一七(大6)年六月三〇日の夕刊一面には、同じ総督府の御用紙の毎日申報に勤めていた李光洙の旅行記が掲載され始める。同年九月二八日まで約二ヶ月に渡って掲載された旅行記の社告(「京城日報」一九一七年六月二六日夕刊)には、「新政府の情勢を察し経済産業教育交通の發達人情風俗の変遷を觀察し併せて隠没せる名所旧跡を探り」、「之を天下に紹介すること」を目的とした。これは主な執筆者として日本人が名を連ねている「京城日報」紙面に、朝鮮出身の文人が初めて日本語で文章を寄せた珍しい例であった。

このような「京城日報」の一九二二(大10)年四月二六日の紙面には「文芸欄刷新」というタイトルの記事が掲載されている。その内容は次の通りである。

文芸欄の沈衰と云ふことが可成読者諸賢の不満であると云ふ
投書が毎日のやうに二三通は参ります、そこで此際同好者の
意に沿ふことは勿論、他の読者諸賢に対しても相当歓迎され
んことを期して本日以後文芸欄の刷新を決行して愈左の選者
と投稿種目を定めて一般の投書を歓迎し文芸に対しては広義
な出来るだけ多くの解釈に基いて採用を行ひ半島文芸發達の
一助にも資すことに致します

前年度の一九二〇（大9）年から「京城日報」の紙面は朝・夕刊の区分がなくなり、「日報詞苑」というセクションが新たに設けられ、「川柳」、「俳句」、「短歌」などが掲載されていた。しかし、「京城日報」の読者たちはそれに満足できず新たな文芸欄の更新を要求したのである。実際、右記の「文芸欄刷新」の記事が記載される一ヶ月前の一九二一（大10）年三月から四月にかけて、「読者らん」の文芸関連の投書をいくつか挙げてみる。

① 貴社募集文芸の各選者の名を知らして下さい（白蜂生） ▲短

歌は尾上柴舟先生、川柳は井上剣花坊先生、俳句は松尾目池先生、情歌は社内編集同人です（係）（三月三日）

② 朝新と京日との川柳欄は問題にならない程朝新はから駄目だ選者自ら厳選するとあるあれで厳選とは驚くの外はない自ら狂句と断言しながら天位に押し立てる選者が古い文言だか池中の蛙たる事をまぬかれない最少し内地の川柳界に刮目して見たら驚く事だらうたより無い選者を戴いて得意に天位を誇つてゐる柳子こそ気の毒だ矢張り川柳は剣花坊師に限る（新□柳）（三月八日）

③ 朝新社川柳選者に就いての新川柳子は厳選を口にしながら其発表選を見るに実に噴飯を禁じ得ないものを佳句として並べ立てゝいる余りに自己の子分のみに偏せず公平な選を望みたいものである此の点に至ると実に剣花坊氏等は実に厳選公平



図2 「京日文芸」欄

である京日川柳も今少し引続き募集発表の多からん事を望んでいる（一柳子）（三月二二日）

④ 近頃は俳句を御掲載になりませんが御中止で御座いますか御尋ね申します（牡丹台の人）（四月二二日）

①は「京城日報」の文芸欄の選者に対する問合せに対して文芸係

が答えているものである。そして募集する文芸のジャンルが「短歌」「川柳」「俳句」「情歌」などであったことがわかる。②と③では「朝新社」つまり、朝鮮新聞社の川柳の選者を批判しながら、京城日報社の選者である井上剣花坊の公平な発表選が讃えられている。最後の④は京城日報社の文芸に対する読者の不満を

垣間見せている。「読者らん」には掲載されていないが、恐らく④のような投書が「毎日のやうに二三通」届いていたと思われる。



図 3 「学芸だより」(または「学芸界」)

このような読者からの投書、および前掲の「文芸欄刷新」の具体的な内容からは、①の文芸系の返事のように「俳句」は松尾目池を選者とし、「川柳」も井上剣花坊が担当しているということがわかる。ただ「短歌」の選者は尾上柴舟(注7)に、矢橋小葩を加えた陣営になった。また、募集文芸の種類を多くして、「其他文芸に関する雑感、小品、短編小説、等」も投稿できるようになった。

更に、九月には本格的に「京日文芸」欄が設けられ、中村星湖「二元的観方」、篠崎潮二「流離」、光永紫潮「金剛前夜」などが掲載されている。しかし、このような「京日文芸」欄は定着せずに間欠的に掲載されている。その他にも

同年一〇月には京城日報社の第五千号記念事業として島崎藤村を選者とする懸賞小説を募集するなど、一九二二(大10)年に「京城

日報」における文芸欄が本格的に成立する様子が伺える。

一九二〇(大9)年以後、朝・夕刊の区分がなかった紙面が再び朝刊と夕刊に分けられる一九二二(大11)年には、俳句の選者を内藤鳴雪(注8)に交代する程度で、暫く文芸欄には動きが見えない。このような文芸欄が再び新たな紙面構成を見せるのは一九二五(大14)年のことである(注9)。この時期に文芸に関して目立つのは四コマ漫画の連載であろう。前年の一九二四(大13)年一月五日の夕刊二面には「本社特約漫画」というキャッチフレーズでマックグーフスを主人公とする四コマ漫画が連載され始めた(一日から朝刊三面に移動)。それと共に一九二五(大14)年一月八日から「文芸」コーナーが度々掲載されていた夕刊四面に京城日報社の社員である多田毅三作の四コマ漫画「半作の新生活」も掲載され、一日に二編の四コマ漫画を楽しめるようになる。また、朝刊四面には連載小説と共に「学芸だより」(または「学芸界」という文芸に関する通知が掲載されることになる。「京城日報」創刊二〇周年を迎えた一九二六(大15)年には、前述したように正式的に「学芸部」が設置され、俳句の選者を高浜虚子にし「京日俳句」が設けられる。他にも「京日短歌」、「京日川柳」、「京日童話」のような文芸コーナーの改名が行われるなど、大正末ごろになって漸く「京城日報」の学芸欄が体系化される様子が見られる。

このような文芸欄の形成には、文芸欄刷新を行った一九二二年と、新たに文芸欄が活発な動きを見せる一九二五年に社会部長を

勤めていた寺田寿夫が重要な役割を果たしたと思われる。寺田は、一九二六年には学芸部長となり、一九三三（昭八）年に京城日报社の社会部長として名前が記載されているのみで、京城日报社在職前後の活動については未だに詳細は定かではない。著書としては「朝鮮在住の内鮮人及び朝鮮との特殊関係者」が執筆した随筆を集めた『随筆朝鮮』上下（京城雑筆社、一九三五年一〇月一日）がある。そこで寺田の肩書きは「京城雑筆社長」と書かれてあり、一九三四（昭九）年に京城雑筆社長の森悟一が亡くなり、京城雑筆社長を引き受けたとあるのみである。

また、大正には童話の掲載も目立つ。一九一五（大四）年一〇月一日に家庭博で久留島の公演会の広告が掲載されている。タイトルは「乃木大将の幼年時代」と「乃木大将の膂火鉢」であった。一九一八（大七）年五月五日から一月一六日まで龍山涙光「京日紙上お囃講演」が週一回掲載され、一月一〇日からは八島柳堂「お伽話」が翌年の七月一日まで続いた。ただ、一九一九年四月二〇日と二一日の二回にわたって「少女小説 哀れ犬の死」も連載している。

一九二〇（大九）年二月二五日の小川春彦「小山の散歩」を皮切りに再び「オトギバナシ」コーナーが設けられる。翌年の一九二一（大十）年四月三〇日からは新たに設けられた「こども新聞」コーナーに「オトギバナシ」が掲載されているが、その作者のうちでは、八月三日と一四日の二日間連載された「お日様とお月様」の作者として宋全璇という朝鮮人作家の名が見えるのは特記すべ

きことであろう。また、一九二二年四月二五日には秋田雨雀「永遠の子供 童話の成因に就て」、五月に楠山正雄「新シキウシオ童話のこと」（六日）、「アンデルセンの生ひ立ち」（一五日）という評論も見受けられる。

このような「オトギバナシ」は一九二二（大十）年一月からはその名を言い換えた「少年小説」、「怪傑物語」、「少女小説」、「童話」、「少女哀話」、「少年哀話」、「朝鮮童話」、「武勇奇談」、「怪奇小説」、「冒険物語」、「少年小説」、「探偵物語」、「伝説物語」などと共に掲載されている。一九二四（大十三）年五月一〇日の巖谷小波「新童話 黄金塚 下」を最後に紙面から見られなくなっていた童話は翌年の一九二五（大十四）年七月一五日の濱口良光「童話 馬鹿な伶俐者（一）」を皮切りに再び盛んに掲載され始める。特に、一九二六（大十五）年五月一日からは「京日童話」とし、一九二七（昭二）年二月二日まではほぼ毎日のように童話が掲載されており、この時期は「京城日報」における童話の全盛期だったと言っても過言ではない。

第三節 昭和初期から日中戦争前後まで

一九二七（昭二）年から紙面としては朝刊八面、夕刊四面の組み合わせが定着し、朝刊の六面に文芸関連記事やコーナーが掲載される。特に一九二八（昭三）年一月に「京日俳壇」の選者は臼田亜浪となり、五月の京城訪問と時期を同じくして、各吟社の名前と



図4 「各地会報」(のちに「会報欄」)

作品などが掲載された「各地会報」(後に「会報欄」)が朝刊六面に新設されるなど、「京城日報」文芸欄において俳句が活発な動きを見せている。「京日詩編」と「京日童謡」の選者を務めていた京城帝国大学の教授佐藤清も、一九二九(昭4)年二月から「京城詩壇」の選者となる。

文芸欄にはこのような韻文だけではなく、翻訳小説の掲載も目を引く。一九二七年九月六日からはジョゼフ・コンラッド作「ギヤスパ!ルイズ」が久間学訳で掲載されている(注9)。一方、夕刊の三面には講談と映画やラジオなどの記事が見受けられる。

現状を維持していた紙面が変化を見せ始めるのは満洲事変の翌年の一九三二(昭7)年からである。一九三二年一月から「北部版」、「南部版」(または「地方版」)に分けられるようになる。朝刊六面には依然

として文芸関連記事が掲載される一方、夕刊三面には「水曜映画」、「家庭趣味」と共に新たに「月曜スポーツ」コーナーが新設され頻繁に掲載される。

また、この時期は漫画の連載が目立つ。暫く掲載されていなかった四コマ漫画は、一九三一(昭6)年三月一日から、岩本善併文・岩本正二画の作品が夕刊三面に「映画と演芸」と共に連載され始め、一九三三(昭8)年には春海浩一郎文・岩本正二画に変更となる。一九三四(昭9)年一月一日から七月二日まで朝刊三面にも吉本三平の「グルグル太郎」が連載開始されるなど、四コマ漫画が紙面に頻繁に掲載されるようになる(注10)。このような漫画全盛期の中、俳壇も臼田亜浪と共に楠目橙黄子も選者に加えるなど地道にこのコーナーの強化に努めている様子を見せている。

創立三〇周年を迎えた一九三六(昭11)年一月二日の紙面には「紙面大刷新を断行」という記事が見え、新たな紙面の大刷新が行われている。その主な内容としては、まず「御手洗副社長指導の下に政治及び経済記事に力を注ぎ」、「著名なる緒大家に特に乞ふて原稿の執筆を依頼」することであった。また、「婦人と家庭」欄を拡張し、「趣味と学芸」を新設すると共に、「スポーツ欄も特設された。最後は「小説娯楽大家揃い」という見出しで、「小説、講談、囲碁、将棋等にも経費を増加し当代一流の大家に特に依頼」と宣伝している。このような紙面変更が実施されるのは、三日後の一月二五日からで、夕刊の第四面に「趣味と学芸」欄が

設けられ、朝刊の第四面には「婦人と家庭」欄が設けられた。前述の予告どおり一九三六（昭11）年一月二十六日夕刊に初めて「趣味と学芸」欄が新設され、横光利一の「最近の感想Ⅱ何が最も日本的なりやⅡ」という文章が掲載される。翌年の一九三七（昭12）年からは「趣味と学芸」欄にはさらに多くの内地の文学者たちの



図5 「趣味と学芸」欄

評論などが活発に掲載されるようになり、青野季吉「時局と文壇」（三月四日、五日、六日）、萩原朔太郎「実利主義を排す」（三月一日）、伊藤整「文芸時評」（四月二日、六日、八日、九日）、武者小路実篤「文芸時評」（五月四日、六日、七日）といった評論を挙げるこ

とができる。

もう一つこの時期の特徴を挙げるとすれば、この時期に朝鮮出身の文人の執筆活動が活発に紙面で行われ始めることである。崔麟の「我等の主張」（一九三六年八月六日、七日）と「感激を語る」（同年一月六日、七日）を皮切りに、崔南善の名前が文芸欄に頻繁に見られるようになる。以前から「京城日報」紙面に「神ながらの昔を憶ふ」（一九三四年三月二十九日、三〇日）という文章を寄せていたが、一九三七（昭12）年には「朝鮮文化当面の問題」（二月三日、四日、五日、六日）、「北支那の歴史的特殊性」（二月一日、二日、三〇日、全一七回）などを「京城日報」の文芸欄に投稿している。また、日中戦争が起きてから直ちに行われた京城日報社主催の「時局と朝鮮」座談会（七月三日～三〇日、全六回）にも出席者の一人として名前が挙がっている。その他にも座談会の翌月の八月には「国民讃歌」募集の広告が紙面に掲載され、その選者となるなど、積極的に「京城日報」の紙面に登場している。

第四節 日中戦争から廃刊まで——「文芸」欄から「文化」欄へ

一九三七（昭12）年七月に日中戦争が勃発してから「京城日報」の紙面では戦争に関する記事が大きく取り上げられている。連日のように社説欄には「北支事変と朝鮮」（一九三七年七月一日）、「内鮮一体」（一九三七年七月一六日）、「内鮮融和と内鮮一体」（一九三七年七月三一日）といったタイトルが紙面に頻出し、掲載されてい



図 6 学徒兵と「国民歌謡」募集

京成日报社から日刊「京日小学生新聞」が発行された一九三八(昭13)年には、読書に関する記事が数多く掲載されている。一月二五日の「趣味と学芸」欄には「京城府民の読書熱」という見出しで、「文芸物が依然全盛である」とし、「京城の読書人は矢張り堅実である、事変の影響下で随分時局物が売れはしたが、そのため

る。そうした中、文芸欄も例外ではなく、「趣味と学芸」欄の絵が学徒兵や戦艦の絵になったりする。また、内容においても京成日报社主催で開かれた「時局と朝鮮座談会」や、「国民讃歌」募集の

広告が掲載されるなど戦時色が徐々に濃くなつてくる。また、一九三七(昭12)年九月には「北支」と「上海」に送る特派従軍記者の増員も図られるが、その中には戦争文学作家として知られている福永恭助がおり、上海特派員として派遣された。



図 7 「文化」欄

また、一九三九(昭14)年の新年からは「私が半島から受けたよき印象」といった特集記事が数多く紙面

に他の新刊書の読者が減つたりしない」と報じている。このような読書熱の下がらない京城の読者に今度は何を読ませるか問題になってくる。同年九月七日から二二日まで朝刊の「家庭」欄に「婦人子供読物座談会」が一回にかけて連載されたりもする。こうした中、年末の一月一五日の紙面には「半島俳壇空前の催し」と宣伝された「京日俳句紙上互選」懸賞募集の広告が掲載される。課題は「銃後の新年」で、水原秋桜子、富安風生、白田亜浪がその選者を務めている。翌年の一九三九(昭14)年一月五日には「京日俳句紙上互選第一回入選」という見出しで、応募した三万四千句から選ばれた三百句が掲載されている。また、同じ紙面には「京日俳句・歌壇今月より創設」という広告も掲載されている。一九三四(昭9)年ごろからなくなっていた「京日俳壇」と「京日歌壇」が新たに新設されたのである。「京日俳句」は高浜虚子が、「京日歌壇」は北原白秋が選者となった。

を飾るようになる。これまでの新年の記事とは違って、一九三九(昭14)年の新年記事には「朝鮮」をキーワードとする記事が、主に「内地」の作家などの著名人によって寄せられている。その中でも特に同じ紙面に掲載された菊池寛「僕と朝鮮」、浜本浩「懐しい京城よ」、加藤武雄「朝鮮の想ひ出」などが目立つ。これらの執筆陣は同年一月にモダン日本社から発行された雑誌『朝鮮版モダン日本』にも小説や随筆などを載せており、『朝鮮版モダン日本』に先駆けて「朝鮮特集」を組んでいるのである。

一九三九(昭14)年一月二十九日に李光洙を会長とする朝鮮文人協会が京城で発足してからは、「京城日報」の文芸欄に朝鮮文人協会のメンバーたちによる文章が頻繁に掲載されるようになる。その内容としては、兪鎮午「新しき創造へー朝鮮文学の現段階ー」(一九四〇年一月一日〜四日/全三回)や、金永鎮「現段階に於ける朝鮮文学の諸問題」(同年一月二五日〜二月一日/全五回)や、栗林一石路「戦争と俳句」(同年五月四日〜八日/全四回)、辛島驍「戦争と文学」(同年一月三日〜一月七日/全七回)などで、新体制下における「朝鮮文学」の在り方について頻繁に議論されているのが見受けられる。

このような文芸欄が改めて変わるの是一九四一(昭16)年七月一日の紙面からで、朝刊の一面には「本紙の紙面変更」という見出しが見える。そこには「国策に沿ひ用紙節約のため十一日付夕刊より」紙面の変更を行うとあり、具体的な内容としては朝刊には「一面(政治)二面(政治)三面(経済)四面(地方)五面(社

会)六面(体育ラジオ)」が、夕刊には「一面(政治)二面(社会)三面(文化)学芸、家庭)四面(商況)」があるという構成となっている。つまり、夕刊三面の「学芸」欄と朝刊八面の「家庭」欄が新たに「文化」欄という名前に統合されて夕刊の三面に掲載されるようになったのである。しかし、このような「文化」欄も太平洋戦争が勃発してからは徐々に縮小されていき、一九四二(昭17)



図8 「文化」欄 (下から二行)

年一月一日からは紙面の二段ほどの分量しか掲載されないようになる。更に、一九四三(昭18)年八月からは「軍事」欄の新設により、「文化」欄は廃刊までほとんど見受けられなくなる。このような「文化」

欄の動きの中で、一九三九(昭14)年に新設され、翌年の一九四〇(昭15)年九月三日からその選者が北原白秋から吉井勇に変わった「京日歌壇」は、戦局がさらに激しくなる一九四二(昭18)年七月三十一日の紙面で「京日歌壇投稿者へ」という広告文を掲載している。その内容は次のようになっている。

「京日歌壇」への投稿は爾今戦争および時局を詠じたるもの

に限り、身の感傷雑事を詠じたるものは採らぬことにします。投稿者も右趣旨を諒とされ、短歌報告の熱意を以て応募されるやう希望します

これまでは「朝鮮風物・生活・事変雑詠」に関する内容の短歌を募集していたが、これ以降は戦争や時局を取り上げるものを読者に書かせるようになる。さらに、一ヶ月後の八月二十七日の紙面には「京日歌壇」の選者交替の記事が掲載される。選者を吉井勇から楠田敏郎に変え、選歌をお願いし、その募集内容も「愛国歌、勤労の歌及び季節の歌を募る」とあり、戦争や時局的なものだけではなく、季節の歌も募集するようになる。

このような「京日歌壇」は一九四五(昭20)年五月一八日まで掲載されるが、「京日俳壇」は敗戦を挟んで、八月二八日まで「高浜虚子選」が掲載され、その翌日の八月二十九日からは「編集局選」の「京日俳壇」が九月八日まで続く。一方、しばらく「京城日報」の紙面から見当たらなかった散文においても、八月二十九日から夏沢端江作の童話「河童」の連作が開始されるが、一〇月三〇日の樽山ひかる作の詩「感傷編」とカンバヤシヒサヲ絵の連載漫画「ほがらカンさん」を最後に「京城日報」は廃刊を迎える。

以上が復刻版『京城日報』一卷に収録された一九一五(大4)年九月から一九四五(昭20)年一〇月までの文芸関連事項のまとめである。これまで見てきたように大正の初期から「京城日報」の紙面では詩、俳句などの韻文が主流であった。それが大正の後期に

なると、寺田寿夫を部長とする学芸部が設けられ、「内地」の著名な文学者の評論を載せるなど文芸に関する記事がさらに目立つようになる。また、一九二二(大11)年には、島崎藤村を選者として懸賞小説を募集し、一九二六(大15)年には高浜虚子を俳句の選者とするなど、大物の文学者たちとの交流も深められていく様子が見受けられる。昭和になってからも四コマ漫画など多様なジャンルの文芸が掲載されるようになるが、満洲事変を前後にして、文芸欄も戦時色を帯びたものが増えていく。太平洋戦争が勃発してからは、「文芸」欄が「文化」欄に取って代わり、文芸物もさらに軍事物に変わっていくのである。

このように朝鮮で創刊された「京城日報」は徳富蘇峰や吉野左衛門の影響のもとで俳句などの詩歌や講談などが大衆性を重視しながら、文芸欄を発展させてきた。一九三〇年代に入ってから、日本人中心から変わっていき、徐々に朝鮮出身の知的エリートたちも取り組みながら文芸欄に取り組んで更新していくようになり、外地新聞のみの独自性を見せている。

注

〔1〕李相哲によれば、「仁川京城隔週商報」が創刊される前年の明治三二年の秋に、「朝鮮週商報」という新聞が発行されていたという記録があるが、まだ確認できていないという(『朝鮮における日本経営新聞の歴史一八八一—一九四五』角川学芸出版、二〇〇九年二月二八日)。

〔2〕同上。

〔3〕一九二四年六月一日の「京城日報」には、京城日報社の新築を祝う特集が掲載される。その中に次のような記事が見られる。

社会的の出来事を最も通俗に趣味ある書き方で紹介するのがこの部の仕事である。各新聞が四頁の時代には柔かい記事は大抵三面に載せた所から、もとは三面記事と云つたものである。何しろ社会のあらゆる方面に亘つて如何なる問題でも取扱ふのであるから、その範囲は仲々広く、政治、経済を始めとして軍事、交通科学、芸術の方面より各種上下の会合、婦人家庭、内外来往の名士の説話、運動競技、学校学生との消息、演芸、活動写真等の娯楽に至るまで細大漏らさず紹介する。（「わが社の組織」）

つまり、一九二四年の時点で特に文芸部は設けられておらず、文芸に関する仕事は社会部が担当していたことがわかる。

〔4〕橋本牛人という人物の詳細については不明なところが多いが、『ホトトギス』の一九〇五年二月発行の紙面に、「韓国京城」の「失名会」に牛人の名前と俳句が掲載されている。また、一九〇八年六月発行の『ホトトギス』には京城の「オンドル会小集」に京城日報社の鳥越静岐の名前と一緒に牛人の名前と俳句が見える。『朝鮮』（一九〇八年三月）には、オンドル会について「オンドル会と名を付けて句を作るのも早や己に三年になる」とあり、牛人と静岐の名前に、松尾目池の名前も見える。また、一九〇九年二月発行の『朝鮮』の

俳句には鳥越静岐について「絵の筆を掲げて京城に在ること約二年半、俳人として京城同人の間に鳴り、京城日報紙上に抛りて韓国の俳壇に尽せしこと又少しとせず、而して同人今一身の都合より此地を去らんとす、茲に一月二十三日夕目池の居に於て送別の句会を催せり」とある。

〔5〕石島稚子郎（一八八七年八月―一九四一年四月一八日）、本名は石島亀治郎。埼玉県出身。川島奇北に学び、印刷本「浮城」を発売し、「ホトトギス」の句会にも参加した。一時期、句作を辞め救世軍士官学校に入学するが、一九一三年卒業と共に復帰。同年六月に山室軍平の姪と結婚し、同年秋に京城に向かう。一九二一年まで滞在した。著書としては『稚子郎集』、『京日俳句抄』がある。

〔6〕井上剣花坊（一八七〇年六月三日―一九三四年九月一日）、本名は井上幸一。山口県出身。明治三四年には「越後日報」の主筆となり、一九〇三年には「日本」に移り、剣花坊という筆名で川柳の選者を務めた。

〔7〕尾上柴舟（一八七六年八月二〇年―一九五七年一月一三日）、本名は尾上八郎。岡山県出身。一高時代に落合直文に学んだ。『ハイネの詩』、『叙景詩』などの著書がある。

〔8〕内藤鳴雪（一八四七年四月一五日―一九二六年二月二〇日）、本名は内藤素之。愛媛県出身。文部省参事官などを退官した後、一八九二年、正岡子規に会い師事する。著書としては『鳴雪俳話』、『鳴雪俳句抄』などがある。

〔9〕「ギヤスパ！ルイズ」は一九二七年二月七日まで全四二回連載

された。引き続き、一五日からは「女家主」（チョウヂギツシング作、葉山俊一郎訳）が一九二八年一月二四日まで全一八回連載された。他にも以下のような作品が掲載された。「白つぐみの話」（アルフレ・ド・ミュッセ作、葉山俊一郎訳、一九二八年一月二四日～六月一九日、全二〇回）、「兄弟」（ガスケル夫人作、葉山俊一郎訳、同年一月一八日～二月二二日、全二〇回）、「羅馬人の血」（セルマ・ラゲルレフ作、葉山俊一郎訳、一九二九年二月二三日～三月一九日、全一五回）、「黄金の幻」（ワシントン・アービング作、久間学訳、一九二九年四月六日～五月三十一日、全三七回）。

〔10〕その他にも一九三四年一月二〇日夕刊に「三四ちゃんバンザイ」が八月一〇日まで連載される。その後を岩本正二作画漫画が八月一六日から連載される。九月五日からは「正二作画」の「力太郎武勇伝」が一月二二月まで掲載される中、一方朝刊三面には休載していた吉本三平「グルグル太郎」が連載を再開する（九月二〇～一〇月三日）。その後も吉本三平の「トンカチトンベ」（一〇月一二日～二月二七日、全四一回）、「無敵ターチャン」（一九三五年三月一二日～四月一八日、全二一回）などが引き続き掲載された。

第2章 「京城日報」における連載小説と講談

第一節 「京城日報」収録の連載小説と講談をめぐって

朝鮮で発行された「京城日報」に掲載されている小説の中で、現物を見ることが出来る最も古い作品は、『大和撫子』（明28・12）と『探偵小説 伯爵と美人』（明30）で知られている有明山樵の「霞の笛」（明40）である。挿絵は京城日報社の社員である鳥越静岐が担当した。しかし、復刻版『京城日報』には連載の五〇回（明30・6・23）の紙面しか収録されておらず、作品の詳細を確認することは難しい。その他にも明治期の「京城日報」の紙面には松林伯知や田辺南麟のような講談師の作品が掲載されるのが主流であった。

大正に入っっていち早く「京城日報」に掲載された作品は泉鏡花の「二挺鼓」であった。ただ、「二挺鼓」は復刻版『京城日報』においても実物を見ることはできないが、高木健夫編『新聞小説史年表』（国書刊行会、一九八七年五月）や泉鏡花全集などから「参宮日記」が「二挺鼓」というタイトルで「京城日報」に掲載されたことが分かった。

復刻版『京城日報』一卷収録の一九一五（大4）年から紙面を見ると、朝刊（4面）に小説、夕刊（4面）に講談が各々一編ずつ掲

載されている。主な講談師の名前を挙げると、桃川如燕、田辺南龍（五代目・関川正太郎）、猫遊軒伯知（松林伯知）、桃川桂玉、小金井芦州、悟道軒円玉（浪上義三郎）などが「京城日報」に作品を寄せていた。連載小説は明治期にも「京城日報」に作品を掲載した徳田秋声や江見水蔭の活動が目立つ。また渡辺黙禪、渡辺霞亭（碧瑠璃園）、上司小剣、長田幹彦、長田秀雄の早稻田出身の作家たちの活動も目をひく。

このように朝刊と夕刊に一編ずつ連載小説と講談が連載される中、大正前期には間欠的にはあるが、朝刊の一面にもう一編の小説が掲載され、一日三編の小説・講談を楽しめる時期もあった。以下の作品群がそれである。①布施生（訳者）「誰（探偵小説）」（大6・7・4・6・12・1／全138）、②布施生（訳者）「どうして（探偵小説）」（大6・12・2・7・2・24／全79）、③布施生（訳者）「鏝（探偵小説）」（大7・2・25・7・3・31／全34）、④瀧閑村「平行線」（大7・6・7・7・9・23／全88）、⑤佐々木峯雪「邂逅」（大7・9・24・7・11・21／全55）、⑥服部硯月「生別死別」（大8・9・19・9・1・20／全92）、⑦布施生（訳者）「妻となりて」（大9・1・21・9・6・17／全105）、⑧奥野他見男「妙な女」（大10・4・2・10・5・7／全27）、⑨奥野他見男「あゝ大東京よ！」（大10・5・15・10・8・25／全72）、⑩原田東風「運命」（大10・8・26・10・12・1／全53）など。この作品群は前述の通り朝刊の一面に掲載されており、挿絵がないのが特徴である。作者の中で目立つのは布施生こと布施知足であろう。布施知足は正宗白鳥と同じ年の一八九

六(明29)年に早稲田大学に入学した人物で、一九一八(大7)年版の復刻版『新聞総覧』(大空社、一九九二年五月)の朝鮮総督府による英語新聞「セウルプレス」には硬派主任として布施知足の名前が見える。恐らく一九二〇(大9)年九月に「京城日報」に掲載された布施知足の「鼻荊郎」と同じく、その前後の一九一七(大6)年から一九二〇(大9)年間に布施生という筆名で朝鮮総督府の御用紙「京城日報」に作品を寄せていたのである。

「京城日報」紙面に本格的に一日に三つの長編連載物が掲載されるようになるのは、一九二五(大14)年四月一七日からである。前田曙山の「焰の舞」が連載され始め、夕刊の一面に「新講談」という広告文でも一つの長編連載物が掲載された。渡辺黙禅、菊池暁汀などの作品が掲載されたことからわかるように、「新講談」とは大衆文芸のことであった。菊池暁汀の新講談予告には「京日の夕刊小説」といへばいまや朝鮮で一番面白い読み物といふ定評」(「京城日報」大正15・4・21夕刊一面)とあり、新たに掲載され始めた夕刊の読物に京城日報社が力を入れていることが窺える。他にもこの時期に目を引く作品には、その作品予告に芥川龍之介の推薦文が書かれた宮崎光男「途上」(大15・7・28)10・1/全53(連載中止)や、京城日報社の社員である山田勇雄や寺田寿夫の「愛闘」(大正15・10・6)2・1・23/全84)、「拳銃」(昭3・3・29)3・5・12/全35)などがあつた。

また、大正期に特筆すべきなのは懸賞小説当選作品の掲載であろう。一九二一(大10)年一〇月一九日の紙面に京城日報社の五千

号記念事業の一つとして、「朝鮮を題材としたる若しくは朝鮮を背景とした」懸賞小説募集の記事が掲載される。審査は島崎藤村、本間久雄、杉森孝次郎が担当したが、懸賞小説について島崎藤村は「朝鮮を文化的に宣伝」できるだけではなく、「真の内鮮融和であり、朝鮮了解である」と述べている。結局当選したのは馬場明「潮鳴る半島」(大11・8・1)12・1頃)と富士沢けい子「半島の自然と人間」(大12・1頃)12・6・26(推定)の二編で、二人とも朝鮮に居住した経験をもとに作品を書いた。当選した二編について島崎藤村はその審査選評で「内鮮人に取つてはこの上もなき、よき朝鮮の報告書」であると評価しているが、それは日本人による朝鮮人と朝鮮の自然を描写した「よき朝鮮の報告書」であつたのである。

このような島崎藤村の認識は懸賞小説と同じく募集された京城日報社の朝鮮紹介ポスターの懸賞募集と軌を一にしている。その懸賞募集ポスターの広告文には、募集の目的について「朝鮮の現状を広く我が同胞に知らしむる為、また我が同胞が朝鮮を理解し朝鮮の改善に力を藉すことを求むるため」とあり、内地の日本人に朝鮮を宣伝することが目的であつた。このような趣旨のもとで嘗て京城日報社に勤めていた画家の鶴田吾郎が選者となり、鶴田も内地人と朝鮮人との融和のために日本人に朝鮮を理解させることを力説している。

このような懸賞小説募集のイベントは前章で見たように、同年四月の「文芸欄刷新」と共に、京城日報社の文芸に対する積極的な

認識が更に重要視されていたことが窺える。しかし、京城日報社の五千号記念事業として行われた懸賞小説とポスター募集は朝鮮を内地人に宣伝することを主な目的とした朝鮮総督府の「御用紙」としての役割を担ったイベントであったとも言えるだろう。それは柳宗悦が京城日報社の懸賞小説募集について同社から文章を依頼された際、懸念していた「御用新聞」としての「京城日報」の役割からそれほど変わらない認識だったのである。

昭和になってからも大衆作家たちの活動が目立つ。渡辺黙禪、国枝史郎、楠田敏郎や長谷川伸などが昭和初期の「京城日報」の紙面を飾った。特に長谷川伸・木村哲二の小説の広告文には「夕刊第一面に大衆作家の傑作を連載するは近代大新聞の一般風潮である」（「京城日報」昭和3・8・26）とあり、夕刊の一面に大衆作家の作品が掲載されるのが一般的であった。その中でも、映画化されるなど大人気を博していた林不忘「丹下左膳」のその後編が「京城日報」に掲載される。一九三四（昭9）年一月三〇日から同年九月二三日まで全二三三回連載された。その予告で京城日报社からの要請によって「丹下左膳」の後編が執筆されたと宣伝している（「京城日報」昭和9・1・16）。作者の林不忘も「書き下ろしの作をもつて地方読者に接するは、新ジャーナリズムの三四年的趨勢である」とし、地方新聞に作品を寄せるのは今回が初めてであると述べている（「京城日報」昭和9・1・19）。

しかし、このように宣伝された「丹下左膳」の後半は同時に「読売新聞」にも連載されていて、最終回が「京城日報」の時より三

日早い九月二〇日であったが、連載回数は「京城日報」と同じく全二三三回であった。ただし、「読売新聞」の連載時の画家が志村立美であったの対して、「京城日報」においては「丹下左膳」前編の挿絵を描いた小田富彌がふたたび挿絵を担当し、読者たちを魅了させた。

こうした中、一九三二（昭7）年には、日本人作家たちへのみ文筆活動の場として提供されてきた「京城日報」の紙面に、朝鮮出身作家として初めて李石薫の作品が掲載された。しかし、一九三二年に「京城日報」に掲載された李石薫の三つの作品「楽しい葬式」、「移住民列車」、「ユエビン支那人船夫」は、文芸欄の頁に連載された短編小説であって、朝鮮出身の作家が「京城日報」に長編連載物を載せるのは、一九四二（昭17）年一〇月になってからのことである。李石薫が牧洋と創氏改名した筆名で作品を寄せたのである。また、この時期には一九三〇（昭5）年に満洲に向かう途中、朝鮮に寄って講演などを開いた菊池寛、横光利一、直木三十五などの作品が掲載されるなど、内地文壇の大家たちの活動が目立つ。

そうした中、一九三五（昭10）年に再び懸賞小説募集イベントが行われており、「京城日報」紙面一万号を記念して開催された。選者は菊池寛と久米正雄が務め、題材は自由であった。賞金は一等賞金に三千円をかけた。この懸賞募集に内地だけではなく、台湾、樺太からも応募があり、一七〇編が集まった。審査の結果、一等には山口県在住の森岡多作の「人生謳歌」（昭10・12・14～11・

5・8／全147)が、二等には山下ハル子の「春を待つもの」(昭11・5・9)11・10・2／全147)が当選し、「京城日報」の紙面に連載された。特に当選計画になかった二等に選ばれた「春を待つもの」はその作品の舞台を京城にするなど、前回同様に朝鮮在住の経験をもとに創作したものであった。当選の感想の中で山下ハル子は自分が懸賞小説の広告を知ったのは、正月の「文藝春秋」で広告を見た時のことだと述べていて、改めて一九三〇の朝鮮訪問以来の菊池寛と京城日报社との強い繋がりを垣間見ることができると述べている。

第一章でみたように一九三六(昭11)年に創立三〇周年を迎えた「京城日報」は紙面の大刷新を断行したが、その中には小説などを「当代一流の大家に特に依頼」することもあった。早速、その翌年の一九三七(昭12)年三月から田中貢太郎の「曉星雙紙」と吉屋信子の「白き手の人々」が連載され始めた。作品掲載の開始前の広告には二人について、「大衆文壇における第一人者として特異の作風をもつて鳴る」と、「わが女流文壇における最高人気作家として君臨」していると宣伝している。また、二作品の連載後も長谷川伸と小島政二郎の作品が続くなど、当時文壇の人気作家たちの作品が掲載されている。

日中戦争が勃発した翌年の一九三八(昭13)年は佐藤春夫「律儀者」(1・7)1・11／全3)を皮切りに川口松太郎、竹田敏彦、村松梢風などの長編小説の連載が続き、内容の面でも戦時体制を背景にしたものが多かった。そうした中、創刊以来主に日本人作家が行ってきた長編連載小説の執筆に、二人の朝鮮人作家が携わ

ることになる。その二作品は一九四二(昭17)年に朝鮮にはない大衆小説という分野の開拓の役割を任された牧野(李石薫)「永遠の女」と、既に「釜山日報」に「青瓦の家」を連載し、第四回朝鮮芸術賞も受賞した李無影の「海への書」であった。また、作家だけではなく、朴得鎔、金仁承、鄭玄雄のような朝鮮出身画家たちの活動も見受けられるなど、戦時体制における紙面の執筆人の変更が見られる。以下、「京城日報連載小説・講談目録」を記載しておく。

〔凡例〕

①「京城日報」連載小説・講談目録は復刻版『京城日報』に収録されている作品をまとめたものである。ただし、目録の作品以外にも、数多くの「創作」が「京城日報」に掲載されている。今回はそのうち『日本近代文学大事典』(講談社、一九七七年一月)などに載っている作家の作品を中心にした。

②長編連載小説と講談の他に、落語や漫才、戯曲、コントも目録に収録した。また、これら以外にも『京城日報』には数多くの童話のような散文も掲載されているがこれらについては稿を改める。

③作品のタイトル下の括弧には作品のジャンルを表記した。また、「当選」は京城日报社の懸賞募集小説の当選作を示す。

④明治期に連載された作品の場合、『京城日報』に収録されてい

「京城日報」連載小説・講談目録

作家「作品名」	挿絵	連載期間（明治）／回数
有明山樵「霞の笹」	鳥越静岐	40・6・23 (50)
緑汀子「初一念」	なし	42・10・26 (77)
無名氏「美代子」	なし	43・2・17 (15) 43・3・12 (34) 19 (40)
松林伯知「各七人男」(講談)	不明	43・2・17 (29)
松林伯知「艶女長兵衛」(講談)	不明	44・1・21 (58)
田辺南麟「寛永御前試合」(講談)	不明	44・5・11 (10)
松林伯知「槍の権三」(講談)	不明	45・2・3 (33) 17 (45)
徳田秋声「二人令嬢」	不明	45・2・4 (33)
作家「作品名」	挿絵	連載期間（大正）／回数
泉鏡花「二挺鼓」	鱒崎英朋	2・8～?/?
番衆浪人「瓢の旗風」	筒井年峰	?～4・10・2/569 (作者死亡により絶筆)
桃川如燕「大岡政談 越後伝吉」(講談)	不明	?～4・10・2/170
早川貞水「越後大評定」(講談)	不明	4・10・3～5・4・7/180
須藤南翠「千生瓢」	筒井年峰	4・10・3～5・5・31/228
富志子「女ごゝろ」	不明	5・3・3/1
桃川如燕「宮本武蔵」(講談)	不明	5・4・8～5・12・10/240
渡辺黙禪「女鳩」	不明	5・6・1～5・11・22/167
小林暁月「怒濤の月」	武内桂舟	5・11・23～6・5・20/170
田辺南龍「明君道中記」(講談)	不明	5・12・11～6・8・18/238
入船亭扇橋「はつゆめ」(講談)	不明	6・1・1/1
猫遊軒伯知「杉山検校」(講談)	不明	6・1・5/1
松田竹の島人「花筐」	不明	6・5・21～6・8・25/89
布施生(訳者)「誰」(探偵小説) ※エミール・ガボ リオー原作	なし	6・7・4～6・12・1/138
秦瞬星「叫び」	なし	6・8・10/1
桃川如燕「左甚五郎」(講談)	不明	6・8・19～7・2・27/180
大阪霞の家主人「桜御殿」	不明	6・8・30～7・4・13/200
布施生(訳者)「どうして」(探偵小説)	なし	6・12・2～7・2・24/79
猫遊軒伯知「伯楽から大名 出世意の加藤嘉明」(講 談)	不明	7・1・1/1

三遊亭金馬「初ゆめ」(落語)	不明	7・1・3/1
布施生(訳者)「鏝」(探偵小説) ※エルンスト・テ オドーア・アマーデウス・ホフマン原作	なし	7・2・25~7・3・31/34
悟道軒円玉「塚原卜伝」(講談)	不明	7・2・28~7・8・29/180
大阪中谷青霞「花吹雪」	不明	7・4・14~7・6・6/53
瀧閑村「平行線」	なし	7・6・7~7・9・23/88
小林蹴月「妻の心」	武内桂舟	7・6・7~7・10・22/127
桃川桂玉「毛谷村六助卅六番角力」(講談)	不明	7・9・8~8・3・28/180
佐々木峯雪「邂逅」	なし	7・9・24~7・11・21/55
北島春石「母と子」	森田久	7・10・23~8・4・16/161
伊藤花遊「開国の魁 朝晴雪」	森田久	8・1・1/1
柳家さん八「羊小僧」(落語)	田代暁舟	8・1・1/1
上田良一「忘年会」	不明	8・1・1~8・1・5/3
柳家小さん「初夢」(落語)	不明	8・1・3/1
東京田辺南龍「日本名刀伝」(講談)	不明	8・3・29~8・9・14/159
島山碧波「みだれ咲」	森田久	8・4・17~8・10・17/175
小金井芦州「伊達騒動」(講談)	不明	8・9・15~9・4・9/196
服部硯月「生別死別」	なし	8・9・19~9・1・20/92
江見水蔭「夜の蜘蛛」	近藤紫雲	8・10・19~9・5・11/162
北島春石「田家早梅」	不明	9・1・1/1
布施知足「鼻荊郎」(戯曲)	不明	9・1・1/1
朝寝坊むらく「錦木」(落語)	不明	9・1・5/1
梅林舎南鶯「孫悟空」(講談)	不明	9・1・7/1
布施生(訳者)「妻となりて」	なし	9・1・21~9・6・17/105
神田伯山「客奇譚 祐天吉松」(講談)	不明	9・4・10~9・10・31/198
佐田八郎「美代子の父」	なし	9・5・7~9・5・13/3
碧瑠璃園「剣舞」	森田ひさし	9・5・12~9・11・21/157
春錦斎柳桜「富八」(落語)	なし	9・9・1/1
小金井戸州「慶安太平記」(講談)	不明	9・11・3~10・6・14/209
徳田秋声「曙の色」→「曙」	近藤紫雲	9・11・23~10・7・15/200
江見水蔭「奇遇」	なし	10・1・1/1

松林伯知「紀の国屋お浪」(講談)	不明	10・1・1/1
三遊亭円遊「素人車」(落語)	不明	10・1・3/1
中村兵衛「社頭暁」	(社頭写真)	10・1・5/1
奥野他見男「妙な女」	なし	10・4・2~10・5・7/27
奥野他見男「あゝ大東京よ！」	なし	10・5・15~10・8・25/72
小金井戸州「寛永御前試合」(講談)	不明	10・6・15~11・6・7/324?
入江新八「浮草」	守田早苗	10・7・16~11・4・10/227
原田東風「運命」	なし	10・8・26~10・12・1/53
渡辺霞亭「金波乃光」	不明	11・1・1/1
阪本富岳「滑稽会話 犬千代」(講談)	不明	11・1・3/1
三升家小勝「プラス、マイナス」(落語)	不明	11・1・5/1
石丸梧平「幸福」	なし	11・1・7~11・1・8/2
上司小剣「梅にも春」	なし	11・1・11~11・1・13/3
室津鯨太郎「夜明前」	守田早苗	11・4・11~11・7・30/100
猫遊軒伯知「安中草三郎」(講談)	不明	11・6・8~12・1頃
馬場明「潮鳴る半島」(当選)	鶴田五郎	11・8・1~12・1頃
松林伯知「通俗太閤記」(講談)	不明	12・1頃~13・11・8/632
富士沢けい子「半島の自然と人間」(当選)	鶴田五郎	12・1頃~12・6・26 推定
中村雨之助「魂の力」	小寺柳村	12・6・27~12・11・25/120?
上司小剣「災後の恋」	伊東深水	12・11・27~13・6・23/166?
小金井戸州「狩野探幽の鼠」(講談)	なし	13・1・1/1
桂文治「福祿寿」(落語)	不明	13・1・3/1
中村星湖「秘密」	なし	13・1・9~13・1・17/8
入江新八「毒の花」	近藤紫雲	13・6・24~13・11・20/125
綾路「指環」	なし	13・11・7~13・11・22/2
小金井戸州「津の国屋小染」(講談)	不明	13・11・9~14・4・6/146
山田松琴「雲を破る」	清水三重三	13・11・21~14・4・21/120
剣花坊「朝鮮朝顔」	なし	14・1・1・~14・1・5/3
田山花袋「恋の珠玉」	不明	14・1・1~14・1・6/4
神田伯山「出世の谷風」(講談)	なし	14・1・1~14・1・7/5
長田幹彦「人生」	なし	14・1・7~14・1・15/8
小金井戸州「出世名作 寿老神」(講談)	不明	14・1・10~14・1・24/9

入江新八「高麗の壺」	なし	14・3・13~14・3・20/4
上司小剣「くろだい」	なし	14・3・21~14・4・5/6
悟道軒円玉「仁侠講談 国定忠次」(講談)	浜田如洗	14・4・7~14・8・19/136
前田曙山「焰の舞」(講談)	小寺耕嶺	14・4・17~14・8・11/116
渡辺霞亭「二つの月」	樋口富麿	14・4・22~14・10・28/156
渡辺黙禅「七曜の剣」(講談)	須藤宗方	14・8・12~15・4・26/250
松林伯知「恋の淀君」(講談)	野口紅屋	14・8・20~15・4・5/222
長田秀雄「再生の春」	小寺耕嶺	14・10・29~15・3・31/125
山中峯太郎「圧出される良人」	なし	15・1・5~15・1・8/3
山中峯太郎「愛別の十字路口」	細木原青起	15・4・1~15・7・27/100
土佐郷二→南海夢楽「実話佐賀の怪猫」→「佐賀の猫」(講談)	石井滴水	15・4・6~15・9・28/175
菊池暁汀「乱闘地獄」(講談)	小寺耕嶺	15・4・27~?/139?
宮崎光男「途上」	梅津星耕	15・7・28~15・10・1/53 (連載中止)
桃川如燕「柳沢騒動」(講談)	田代暁舟	15・9・29~2・3・23/170
山田勇雄「愛闘」	多田毅三	15・10・6~2・1・23/84
作家「作品名」	挿絵	連載期間(昭和) / 回数
春風亭柳枝「洒落小町」(落語)	なし	2・1・1~2・1・3/2
錦城斎典山「出世の春駒」(講談)	多田毅三	2・1・5~2・1・9/4
吉井勇「夢に狂う」	多田毅三	2・1・25~2・9・17/200
中村兵衛「幕末巷談 剣の市」	不明	2・3・10~2・7・20/100
猫遊軒伯知「畔倉重四郎」(講談)	野口紅屋	2・3・24~2・7・11/108
悟道軒円玉「荒浪地獄」(講談)	藤井耕達	2・7・12~2・11・7/119
渡辺黙禅「幕末秘録 剣俠艶魔」	不明	2・7・21~3・6・7/215
古川実「孔雀」	大村安次郎	2・9・18~3・3・24/142
丘浪之助「海坊主お百」(講談)	石井滴水	2・11・11~3・3・17/122
甲賀三郎「大衆読物 正夢」	不明	3・1・1/1
国枝史郎「恋無情」	なし	3・1・25~3・1・31/6
吉田絃二郎「仔犬」	なし	3・2・18~3・2・28/5
星野静夫「春の波蘭人」	なし	3・3・14~3・3・17/4
中村兵衛「薩摩義士伝」(講談)	神保朋世	3・3・18~3・9・20/182
白石実三「明石将軍」	多田毅三	3・3・25~3・11・1/183

寺田寿夫「拳銃」	なし	3・3・29~3・5・12/35
楠田敏郎「捕物奇譚 紫頭巾」(講談)	小寺耕嶺	3・6・8~3・7・23/30
長谷川伸・木村哲二「妖鬼流血録」	伊藤幾久造	3・8・29~4・4・8/211
桃川如燕「義人侠勇実録後藤半四郎」(講談)	野口紅厩	3・9・22~4・5・10/179
佐藤惣之助「天帝一揆」	多田毅三	3・11・2~4・5・3/143
松林伯知「巳形金」(講談)	不明	4・1・3~4・1・5/2
藤島一虎「侠艶霊剣」	竹中英太郎	4・4・9~4・12・9/240
遠藤柳雨「運命の浪」	多田毅三	4・5・4~5・2・18/240
松林伯知「維新秘録 井伊大老」(講談)	吉川保正	4・5・21~5・2・9/208
稲葉進「捕物奇聞 江都秘録」	なし	4・12・10~5・5・7/85?
林房雄「1930年の序曲」	なし	5・1・1/1
三遊亭円生「武助馬」(落語)	野口紅厩	5・1・3/1
一龍齋貞山「馬揃ひ」(講談)	木俣茂彌(絵なし)	5・1・10~5・1・12/3
片岡鉄兵「女工お吉」	なし	5・1・15~5・1・19/4
稲岡奴之助「風流奴茶屋」(講談)	荒川芳三朗	5・2・13~5・9・9/206
正木不如丘「恋愛黒点」	嶺田 弘	5・2・19~5・9・14/174
潮山長三「刺青傀儡話」	河原塚亀太郎	5・5・22~6・1・14/180
鳥江鉄也「川合又五郎」(講談)	佐藤松華	5・9・10~6・4・10/162
福田正夫「華やかな颱風」	野崎貞雄	5・9・16~6・4・22/175
淡路呼潮「東雲小唄」	神保朋世	6・1・15~6・9・6/202
橋爪彦七「節婦実伝 維新侠艶録」(講談)	竹内静古	6・4・11~7・3・5/179
伊藤松雄「凍えた花」	寺嶋紫明	6・4・23~6・12・19/201
行友李風「茂平次兇状」	藤井耕達	6・9・7~7・5・3/185
平山蘆江「命の最高峰」	布施長春	6・12・20~7・9・15/221
三上於菟吉「延壽秘薬」	藤井耕達	7・1・1/1
桜井忠温「兵賊」	なし	7・1・1/1?
邑井貞吉「塚原ト伝と猿」(講談)	利谷ふみを	7・1・3~7・1・5/2
松林伯知「猿廻與次郎」(講談)	木俣茂彌	7・1・5/1
辰野九紫「円タク婆さん」	須山計一	7・1・7~7・1・8/2
徳川夢声「小猿の初夢」(漫談)	なし	7・1・9~7・1・10/2
柳亭芝楽「猿後家」(落語)	宮尾しげを	7・1・12~7・1・14/3?
佐藤春夫「最後の一葉」	なし	7・1・13~7・1・20/4

甲賀三郎「現場不在証明」	なし	7・1・21~7・1・26/3
直木三十五「寛永卅乱れ」	志村立美	7・5・4~7・5・18/15
川畑直悦「呪血凶絵」	平賀晟豪	7・6・21~7・11・26/158
李石薫「楽しい葬式」	なし	7・9・3~7・9・6/3
群司次郎正「青春哀歌」	野崎友三	7・9・16~8・3・21/149
李石薫「移住民列車」	なし	7・10・14~7・10・20/5
李石薫「ユエビン支那人船夫」	なし	7・11・13~7・11・22/7
長谷川伸「的田雙六」	藤井清	7・11・28~8・4・19/138
広津和郎「愛らしき女」	不明	8・1・1/1
一龍斎貞山「大福のお茶」(講談)	利谷二三夫	8・1・5/1
林芙美子「靄」	不明	8・1・12~8・1・14/3
村松梢風「樽屋のおせん」	なし	8・1・15~8・1・21/4
三井実雄「張学良没落の日」	新木秀郎	8・3・29~8・4・2/5
久野豊彦「春の太陽」	田中比左良	8・4・5~8・9・22/149
土師清二「寺屋義賊」	幡恒春	8・4・20~8・9・17/150
川路柳虹「翼なき鳥」	岩本正二	8・5・16~8・11・25/160
大島多慶夫「明暗旗本男」	寺田英三	8・9・20~9・6・3/217
国枝史郎「侠剣風来坊」	佐々木格	8・9・23~9・1・29/112
馬場明(原作)「東亜をめぐる愛」	武田譲	8・11・26~8・12・14/16
安藤盛「恋の太平洋」	佐々木礼三	8・12・15~8・12・27/10
菊池寛「生活の虹」	志村立美	9・1・1~9・5・18/133
森下雨村「窓から覗く顔」	不明	9・1・3~9・1・10/3
松尾轟明「魚雷は躍る」	不明	9・1・3/1
悟道軒円玉「出世の門松」(講談)	丸尾至陽	9・1・5/1
林不忘「丹下左膳」(講談)	小田富彌	9・1・30~9・9・23/233
小島政二郎「七宝の柱」	岩田専太郎	9・5・19~9・10・3/135
吉川英治「新鸞聖人」	山村耕花	9・9・26~10・8・10/299
三上於菟吉「哭くな、青春」	吉邨二郎	9・10・4~10・2・27/142
久米正雄「愛情の感激」	不明	10・1・1~10・1・3/2
井伏鱒二「田舎の夜遊び風景」	不明	10・1・1~10・1・3/2
大下宇陀児「曲馬団綺譚」	不明	10・1・3~10・1・5/2
悟道軒円玉「幫間松の家露八」(講談)	不明	10・1・5/1

芝佳吉「猪の春」(漫才)	吉本三平	10・1・5/1
芝佳吉「猪まはし」(落語)	なし	10・1・9/1
桃川燕雀「相馬大作」(講談)	鈴木清	10・2・24~10・12・13/159
横光利一「天使」	宮田重雄	10・2・28~10・7・6/128
岸田国士「都会化粧」	田中良	10・7・8~10・12・13/159
藤井真澄「元寇」	志村立美	10・8・13~11・1・9/140
貴司山治「密漁」	なし	10・11・13/1
悟道軒円玉「義士銘々伝」(講談)	中一彌	10・12・14~11・5・11/140
森岡多作「人生謳歌」(当選)	寺本忠雄	10・12・14~11・5・8/147
菊池寛「新婚家庭」	不明	11・1・1/1
悟道軒円玉「成功美談 丹波の五助」(講談)	不明	11・1・1~11・1・3/2
木々高太郎「極量」	不明	11・1・3/1
吉川英治「愚禿頭巾」(新鷲聖人後編)	山村耕花	11・1・10~11・8・1/199
小島健三「剣豪の嗤 近藤勇と山岡鉄太郎」	なし	11・3・10~11・3・13/4
山下ハル子「春を待つもの」(当選)	寺本忠雄	11・5・9~11・10・2/147
大島伯鶴「後藤又兵衛」(講談)	中江正美	11・5・12~11・11・23/190
邦枝完二「御守殿模様」	神保朋世	11・8・2~12・3・11/210
前田河広一郎「母の良人」	田代 光	11・10・3~11・10・21/19
中島直人「ハワイの母」	なし	11・10・4/1
井伏鱒二「御隠居さん」	なし	11・10・11/1
片岡鉄兵「花に濃淡あり」	一木 稔	11・10・22~12・3・26/150
木山捷平「秋冷」(コント)	なし	11・10・30/1
川崎長太郎「交差点」	なし	11・11・7/1
小金井芦州「桑平内」(講談)	福田 勇	11・11・25~12・5・12/164
長谷川伸「髭切り彌太郎」	なし	12・1・1~12・1・3/2
井伏鱒二「メンタルテスト」	なし	12・1・1/1
入船亭扇橋「牛の春」(落語)	不明	12・1・1/1
悟道軒円玉「成功の白餅」(講談)	なし	12・1・3/1
室生犀星「情痴界限」	なし	12・1・7~12・1・9/3?
田中貢太郎「曉星雙紙」	河野通勢	12・3・12~12・7・21/113
吉屋信子「白き手の人々」	富永謙太郎	12・3・27~12・8・16/130
新田 潤「流行歌手」	なし	12・3・31/1

神田伯治「夕立勘五郎」(講談)	藤井耕達	12・5・13~12・10・17/139
長谷川伸「国定忠次」	岩田専太郎	12・7・22~13・4・17/251
小島政二郎「妻」	宮田重雄	12・8・17~13・1・14/150
一龍斎貞丈「蒲生三勇士」(講談)	木俣茂彌	12・10・19~13・4・19/152
桃川燕国「地震加藤」(講談)	不明	13・1・3/1
三遊亭円遊「春の芝居」(落語)	なし	13・1・3/1
佐藤春夫「律儀者」	なし	13・1・7~13・1・11/3
川口松太郎「見果てぬ青春」	志村立美	13・1・15~13・7・15/170
海音寺潮五郎「紅絵曼荼羅」	富永謙太郎	13・4・20~13・10・4/157
大島伯鶴「快男子」(講談)	今村恒美	13・4・20~13・11・13/195
竹田敏彦「麗人荘」	伊勢良夫	13・7・16~14・1・17/180
村松梢風「開花三世相」	中一彌	13・10・5~14・4・9/150
小金井芦州「柳生旅日記」(講談)	若槻六郎	13・11・15~14・7・9/201
清谷閑子「春衣」	寺本忠雄	14・1・1/1?
サトウ・ハチロー「僕の珍友伝」(漫談)	なし	14・1・3/1
三遊亭円左「七福神」(落語)	なし	14・1・3/1
悟道軒円玉「勇将と忠臣」(講談)	不明	14・1・3/1
加藤武雄「南風の唄」	富田千秋	14・1・18~14・5・19/121
室生犀星「結婚前」	なし	14・1・31~14・2・7/5
土師清二「魯西亜船」	坪内節太郎	14・4・11~14・8・17/110
尾崎士郎「空に残れる」	高木 清	14・5・20~14・10・19/150
一龍斎貞山「堀部安兵衛」(講談)	矢島健三	14・7・11~15・2・16/185
根岸情治「夢の聚落」(当選)	朴得鎔	14・8・22~14・9・1/10
吉川英治「三国志」	矢野橋村	14・9・2~17・11・8/950
久生十蘭「激流」	伊勢良夫	14・10・20~15・2・23/126
小林信二「簫の音」	神林久雄	15・1・1~15・1・5/4
浜本 浩「黄金夢」	金仁承	15・1・1/1
悟道軒円玉「大力辰蔵」(講談)	不明	15・1・3/1
尾崎一雄「間抜け男の話」	なし	15・1・4~15・1・5/2
久生十蘭「探偵小説 酒の害について」	なし	15・1・18~15・1・21/3
大島伯鶴「続快男子」(講談)	今村恒美	15・2・17~15・9・24/185
竹田敏彦「牡丹崩れず」	岩田専太郎	15・2・24~15・9・28/209

小金井芦州「世直し公方」(講談)	香川芳彦	15・9・25~16・6・8/210
北村小松「世紀の除夜」	都竹伸一	15・9・29~16・2・13/135
川口松太郎「老春」	伊勢良夫	16・2・14~16・9・15/210
北原武夫「命令」	岩本正二	16・3・14~16・3・16/3
上田 広「春」	村田 久	16・3・18~16・3・19/2
宝井馬琴「南海侠勇伝」(講談)	小松崎恒方	16・6・10~16・8・17/54
山中峯太郎「歌はぬ勝利」	高木 清	16・9・16~17・2・10/146?
加藤 弘「夢は覚めるもの」	なし	16・10・17~16・11・1/13
竹田敏彦「愛の赤道」	都竹伸一	17・2・11~17・10・27/251
牧 洋(旧名李石薫)「永遠の女」	岩本正二	17・10・28~17・12・7/41
吉川英治「後三国志」	矢野橋村	17・11・10~18・9・14/243
中野 実「大いなる祭」	三芳悌吉	17・12・8~18・7・9/180
海野十三「椰子」	村上松次郎	18・7・10~19・4・23/204
村松梢風「大和水軍」	中 一彌	18・9・15~19・2・28/126
李無影「海への書」	鄭玄雄	19・2・29~19・8・31/110
山中峯太郎「東天新生」	伊勢良夫	19・9・1~19・12・31/114?

るものは、連載の一回あるいは二回分しか現物が見られないが、連載期間の後の括弧の中に『京城日報』の一九一卷の補遺に収録されている回数を示した。例えば、有明山樵の「霞の笹」の場合、一九〇七(明40)年六月二三日付の紙面には第五〇回が収録されていることになる。大正に入ってから連載期間で「/」の後の数字は連載総回数を表す。定かではない場合は「？」をつけた。⑤挿画のない場合は「なし」、画家名が不明な場合は「不明」と記した。また、夕刊掲載のものは黒く網掛けで表示した。

第二節 連載物の書誌情報と転載の問題

前節の「京城日報連載小説・講談目録」からもわかるように、一九〇六(明39)年に創刊されて廃刊となる一九四五(昭20)年まで「京城日報」には数多くの連載物が掲載されている。その数は凡そ約二四七編に及び、大きく分けて、小説と講談という二つのジャンルの組み合わせとなっている。作者の名前から確認できるように主に日本人作家の作品が大半を占めている。このような「京城日報」に掲載された作品の書誌情報を調べてみると多数の作品が今までの日本文学史の記述から漏れているのが確認できる。その中から大きく①全集や研究書などに作品に関する書誌情報がないもの、②全集や研究書などに作品のタイトルは見当たらないが、「京城日報」に関する書誌情報がないものの二つの作品群が見受けられる。まず、①の作品群を挙げてみると次のようになる。研究書

としては、各作家の全集と作家の書誌情報が詳しく記載されている『近代文学研究叢書』(昭和女子大学近代文学研究室、一九五六～二〇〇一年、全七六巻・別巻、以下『叢書』と略す)を参考にしたため、選別した作家も『叢書』に収録されている作家を中心とした。「▼」は「京城日報」に掲載された作品と期間、「▽」はその作品を調べる際に参考にした研究書及び全集からの書誌情報である。なお、参考書に作品に関する書誌情報がない場合は「未記載」と太字で記した。

- ▼「二人令嬢」徳田秋声(「京城日報」一九一二年二月四日、三回のみ)▽『叢書第五二巻』(昭和女子大学近代文学研究室、一九八一年五月三十一日)未記載▽『徳田秋声全集別巻』(八木書店、二〇〇六年七月二〇日)未記載
- ▼「千生瓢」須藤南翠(「京城日報」一九一五年一〇月三日～一九一六年五月三十一日/二三八回)▽『叢書第一九巻』(昭和女子大学近代文学研究室、一九六二年一月二〇日)未記載
- ▼「天帝一揆」佐藤惣之助(「京城日報」一九二八年一月二日～一九二九年五月三日/一四三回)▽『叢書第四九巻』(昭和女子大学近代文学研究室、一九七九年六月十五日)未記載▽『佐藤惣之助全集』(日本図書センター、二〇〇六年一月二五日、底本は一九四三年四月桜井書店)未記載
- ▼「延壽秘薬」三上於菟吉(「京城日報」一九三二年一月一日/一回)と「哭くな、青春」三上於菟吉(「京城日報」一九三四年

一〇月四日〜一九三五年二月二七日／一四二回)▽『叢書第五三卷』(昭和女子大学近代文学研究室、一九八二年五月二〇日)未記載

▼「最後の二葉」佐藤春夫(「京城日報」一九三三年一月三日〜一九三三年一月二〇日／四回)▽『定本佐藤春夫全集別巻一』(臨川書店、二〇〇一年八月一〇日)未記載

▼「愛らしき女」広津和郎(「京城日報」一九三三年一月一日／一回)▽『広津和郎全集』(中央公論社、一九八八年〜一九八九年)未記載

▼「靄」林芙美子(「京城日報」一九三三年一月二日〜一九三三年一月四日／三回)▽『林芙美子全集』(文泉堂出版、一九七七年)未記載▽『叢書第六九巻』(昭和女子大学近代文学研究室、一九五五年三月二〇日)未記載

▼「愛情の感激」久米正雄(「京城日報」一九三五年一月一日〜一九三五年一月三日／二回)▽『叢書第七一巻』(昭和女子大学近代文学研究室、一九九六年一〇月七年)未記載▽『久米正雄全集』復刻版(本の友社、一九九三年七月)未記載

▼「新婚家庭」菊池寛(「京城日報」一九三六年一月一日／一回)▽『叢書第六三巻』(昭和女子大学近代文学研究室、一九九〇年六月五日)未記載▽『菊池寛全集』(文芸春秋、一九九四年一月一日)未記載

▼「見果てぬ青春」川口松太郎(「京城日報」一九三八年一月一日〜一九三八年七月一日／一七〇回)と「老春」川口松太郎

(「京城日報」一九四一年二月一日〜一九四一年九月一日／二〇回)▽『川口松太郎全集第一六巻』(講談社、一九六九年四月二日)未記載

▼「空に残れる」尾崎士郎(「京城日報」一九三九年五月二〇日〜一九三九年一〇月一九日／一五〇回)▽『尾崎士郎全集第一二巻』(講談社、一九六六年一月二五日)未記載

以上のように、凡そ一二編の作品が、「京城日報」に掲載されながらも現在まで知られてこなかったことが確認できる。

次に、②全集や研究書などに作品のタイトルは見当たらないが、紙掲載の情報のみで「京城日報」に関する書誌情報が漏れている作品群を挙げる。「▼」は①の場合と同じく「京城日報」に連載された作品と期間、「▽」は参考にした研究書及び全集を示す。参考書に「京城日報」に関する書誌情報がない場合は「未記載」、ある場合は「記載」と表記した。また、「京城日報」以外の他紙に作品が掲載されたものに関しては、括弧の中にその情報を付け加えた。

▼「曙」徳田秋声(「京城日報」一九二〇年十一月三日〜一九二一年七月一日／二〇〇回)▽『叢書第五二巻』(昭和女子大学近代文学研究室、一九八一年五月二日)未記載▽『徳田秋声全集別巻』(八木書店、二〇〇六年七月二〇日)記載

▼「梅にも春」上司小剣(「京城日報」一九三二年一月一日〜

- 一九二二年一月三日／三回)▽『叢書第六二卷』(昭和女子大学近代文学研究室、一九八九年六月五日) **未記載**▽森英一「『北国新聞』文芸関係記事年表稿(明治・大正篇)」(『金沢大学教育学部紀要 人文科学社会学科編29』一九八一年一月) **未記載**
- (『北国新聞』一九二二年一月一日／三日)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(『山陽新報』一九二二年一月七日／九日／三回)
- ▼「恋の珠玉」田山花袋(『京城日報』一九二五年一月一日／一九二五年一月六日／四回)▽『叢書第三二卷』(昭和女子大学近代文学研究室、一九六九年七月一日) **未記載**(『北海タイムス』一九二五年一月一日／一九二五年一月二三日)▽『定本花袋全集別巻』(臨川書店、一九九五年九月三〇日) **未記載**(『北海タイムス』一九二五年一月一日／一九二五年一月二三日／五回、「上毛新聞」同年同月二〇日／二五・二七日までの七回連載)▽宮内俊介『田山花袋書誌』(共信社、一九八九年三月二五日) **未記載**(『北海タイムス』一九二五年一月一日／一九二五年一月二三日／五回、「上毛新聞」同年同月二〇日／二五・二七日までの七回連載)
- ▼「人生」長田幹彦(『京城日報』一九二五年一月七日／一九二五年一月一五日／八回)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(『北海タイムス』一九二五年一月二八日／一九二五年二月五日／八回)
- ▼「再生の春」長田秀雄(『京城日報』一九二五年一〇月二九日／一九二六年三月二日／一二五回)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(『横浜毎朝』一九二五年二月六日／一九二六年四月一日／一二五回)
- ▼「明石將軍」白石実三(『京城日報』一九二八年三月二五日／一九二八年一月一日／一八三回)▽『軍事偵察明石將軍』(春陽堂書店、一九三三年九月一〇日初版)
- ▼「妖鬼流血録」長谷川伸・木村哲二(『京城日報』一九二八年八月二九日／一九二九年四月八日／二二一回)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(『九州日報』一九二八年一月／一九二九年四月)
- ▼「女工お吉」片岡鉄兵(『京城日報』一九三〇年一月一日／一九三〇年一月一日／四回)▽『叢書第五四卷』(昭和女子大学近代文学研究室、一九八三年四月一〇日) **未記載**(『九州日報』一九三〇年一月四日／一九三〇年一月五日)▽『片岡鉄兵書誌と作品』(東王書林、二〇〇〇年一月一日) **未記載**(『九州日報』一九三〇年一月四日／一九三〇年一月五日)▽『片岡鉄兵全集第九卷』(日本図書センター、一九九五年二月二五日復刻発行) **未記載**(『九州日報』)
- ▼「寛永卅乱れ」直木三十五(『京城日報』一九三二年五月四日／一九三二年五月一八日中断)▽『直木三十五全集別巻』(示人社、一九九一年七月六日) **未記載**(「寛永卅乱れ」を「神戸又新日報」に同年九月二二日から一九三三年九月二日にかけて連載)▽『叢書第三六卷』(昭和女子大学近代文学研究室、一九七二年八月一日) **未記載**(注1)
- ▼「生活の虹」菊池寛(『京城日報』一九三四年一月一日／一九

三四年五月一日／一三三回)▽『叢書第六三卷』(昭和女子大
学近代文学研究室、一九九〇年六月五日)記載(「京城日日」、「満
洲日日」、「台湾日日新報」、「名古屋新聞」に同時掲載)▽『菊
池寛全集』(文芸春秋、一九九四年一〇月一五日)未記載(「名
古屋新聞」には一九三四年一月一日から同年五月一七日まで、「京
城日日新聞」、「台湾日日新聞」、「満洲日日新聞」には一九三四
年一月一日から同年五月一八日まで、「小樽新聞」には一九三四年
一月一日から同年五月二三日まで一三五回連載)

▼「丹下左膳」林不忘／小田富彌画(「京城日報」一九三四年
一月三〇日〜一九三四年九月二三日／二三三回)▽高木健夫編『新
聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日)未記載(「読
売」、「志村立美画、一九三四年一月二九日〜一九三四年九月一日
／二三三回、前編は一九三三年六月七日〜同年一月五日まで「東
京日日」、「大阪毎日」に連載)▽『昭和文学年表第一巻』(明
治書院、一九九五年三月二〇日)未記載(「読売新聞」に一九三四
年一月二九日から同年九月一日まで二三三回連載)

▼「新鸞聖人」吉川英治(「京城日報」一九三四年九月二六日〜
一九三五年八月一〇日／二九九回)と「愚禿頭巾」(新鸞聖人後
編)(一九三六年一月一〇日〜一九三六年八月一日／一九九回)▽
高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三
〇日)未記載(「名古屋」一九三六年一月二二日)▽『吉川英
治全集四八』(講談社、一九六八年八月二〇日)未記載(年譜に
は一九三五年「新鸞」というタイトルで名古屋・福日・北海タイ

ムスなど五社に同時掲載、作品年表には一九三五年「新鸞」という
タイトルで「神戸新聞ほか」に三月から一九三六年八月まで連載)
▽蒲池勢至「『新鸞』―吉川英治の新鸞像」(「国文学解釈と
鑑賞」所収、二〇〇一年一〇月一日)未記載(一九三四年九月から
台日、福岡、名古屋、北海タイムス等の地方紙に「新鸞」を執筆連
載)

▼「田舎の夜遊び風景」井伏鱒二(「京城日報」一九三五年一
月一日〜一九三五年一月三日／二回)▽『井伏鱒二全集第五巻』
(筑摩書房、一九九七年三月二五日)未記載(一九三五年一月一日
から「信濃毎日新聞」に掲載)

▼「都会化粧」岸田国士(「京城日報」一九三五年七月八日〜一
九三五年十二月一三日／一五九回)▽高木健夫編『新聞小説史年
表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日)未記載(「名古屋」に
一九三五年七月から十二月)▽『叢書第七五巻』(昭和女子大
学近代文学研究室、一九九九年一月一五日)未記載(「名古屋新聞」
に一九三五年七月八日から同年十二月一五日まで連載)▽『岸田国
士全集二八』(岩波書店、一九九二年六月一七日)未記載(「名
古屋新聞」に一九三五年七月八日から三二日まで掲載)

▼「御隠居さん」井伏鱒二(「京城日報」一九三六年一〇月一
日／一回)▽『井伏鱒二全集第六巻』(筑摩書房、一九九七年六
月二〇日)未記載(「信濃毎日新聞」に一九三六年九月二〇日発表)
▼「花に濃淡あり」片岡鉄兵(「京城日報」一九三六年一〇月二
二日〜一九三七年三月二六日／一五〇回)▽『片岡鉄兵書誌と作

品』(東王書林、二〇〇〇年一月一日) **未記載**(「名古屋新聞」等四社に連載)▽『片岡鉄兵全集第九卷』(日本図書センター、一九九五年二月二五日復刻発行) **未記載**(「名古屋新聞」など四社に掲載)

▼「メンタルテスト」井伏鱒二(「京城日報」一九三七年一月一日/一回)▽『井伏鱒二全集第六卷』(筑摩書房、一九九七年六月二〇日) **未記載**(「満州日日新聞」には一九三七年一月一日、「北国新聞」には同年一月五日に掲載)

▼「情痴界限」室生犀星(「京城日報」一九三七年一月七日/一九三七年一月九日/三回?)▽『室生犀星文学年譜』(明治書院、一九八二年一〇月二五日) **未記載**(「九州日報」「信濃毎日新聞」には四日から、「北国新聞」は五日から、「徳島毎日新聞」には一九三七年一月一日から連載)

▼「律儀者」佐藤春夫(「京城日報」一九三八年一月七日/一九三八年一月一日/三回)▽『定本佐藤春夫全集別巻一』(臨川書店、二〇〇二年八月一〇日) **未記載**

▼「麗人荘」竹田敏彦(「京城日報」一九三八年七月一六日/一九三九年一月一七日/一八〇回)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(「名古屋」に一九三八年七月から一九三九年二月まで連載)

▼「三国志」吉川英治(「京城日報」一九三九年九月二日/一九四二年一月八日/九五〇回)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(「中外商業新報」

に一九三九年八月二六日から一九四二年一〇月三〇日まで九九九回連載)

▼「探偵小説 酒の害について」久生十蘭(「京城日報」一九四〇年一月八日/一九四〇年一月二日/三回)▽『久生十蘭全集VII』(三一書房、一九七〇年五月三日初刊) **未記載**▽森英一「「北国新聞」文芸関係記事年表稿(昭和篇4)」(「金沢大学教育学部紀要 人文科学社会科学編37」一九八八年二月) **記載**(「北国新聞」一九四〇年二月九日、一〇日、一日、一三日、四日)

▼「後三国志」吉川英治(「京城日報」一九四二年一月一〇日/一九四三年九月一日/二四三回)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(「日本経済」に一九四二年一月三日から一九四三年九月五日まで連載)▽『吉川英治全集四十八』(講談社、一九六八年八月二〇日) **未記載**(年表には一九三九年八月から一八年九月まで「中外商業新報ほか」に連載)〔注2〕

▼「激流」久生十蘭(「京城日報」一九三九年一〇月二〇日/一九四〇年二月三日/一二六回)▽『久生十蘭全集VII』(三一書房、一九七〇年五月三日初刊) **未記載**

▼「愛の赤道」竹田敏彦(「京城日報」一九四二年二月一日/一九四二年一〇月二七日/二五一回)▽高木健夫編『新聞小説史年表』(国書刊行会、一九八七年五月三〇日) **未記載**(「地方紙三紙」に一九四二年一月から同年七月まで連載)

以上のように「京城日報」に連載された作品の中で多くの小説が作家の書誌情報から抜けていることが確認できる。作品だけではなく評論などの文章も全集などに収録されていない。特に「京城日報」創刊の一九〇六（明39）年から大正後期までに掲載された連載小説は、「京城日報」という外地の新聞にのみ載せられた作品が多い。それが大正の末期になるにつれて、徐々に内地の新聞にも同時に連載される傾向が表れてくる。昭和初期から敗戦までの間には、「京城日報」に掲載されていた作品が「台湾日日新聞」や「満洲日日新聞」などの外地の新聞を含め、「九州日報」、「名古屋新聞」、「信濃毎日新聞」のような内地の地方新聞にも連載されていたことがわかる。このように外地の朝鮮で発行されながら内地の新聞とも大きな違いが見えないというところこそ「京城日報」の特徴とも言えるだろう。では、次節ではこのような「京城日報」の紙面に掲載された作品二編を事例として挙げる。朝鮮半島で発行されていたメディアにのみ掲載された作品の移動と、内地と外地に同時に掲載されるものの、その掲載の様子が異なってくる場面を覗いてみたいと思う。

第三節 事例一——「林芙美子」の資料をめぐって

この節では「京城日報」に収録されている林芙美子関連の資料を取り上げる。「京城日報」に掲載された時間順に並べると、「文

壇噂ばなし」（一九三二年一月二日）、「林芙美子の小説・雑感（文学の意見書）」（一九三二年二月二〇、二三日）、「靄」（一九三三年一月二二、二三、一四日）、「文学雑感」（一九三六年七月七日）の四点である。その中で林芙美子作は「靄」と「文学雑感」の二編である。特に「靄」という作品は『林芙美子全集』未収録で今まで研究書などにその書誌情報が見受けられなかった三回連載の短編小説である。そのあらずじは次のとおりである。某学院に通っている葦野という学生の寮に遊びに行った路子と正子がその帰りに靄の中で葦野から驚かされる。その際正子は初めて葦野を男として認識してしまう。後に、三人はおでん屋に寄り、葦野が靄の晩に起きた失恋の話を聞く。靄に表象される、恋が結ばれたり結ばれなかったりするアイロニーな空間でのエピソードが中心に描かれている。「靄」の連載一回目の紙面には一九三一（昭6）年に撮ったと思われる作者の顔写真が一葉、二回目には作者不明の挿絵が一葉付いているのみである。

一九三六（昭11）年に書かれた「文学雑感」は林芙美子の文学に対する姿勢や旅に出る時の心情が綴られてあり、芙美子の文学を理解するにあたって一つの手がかりになる。これまで林芙美子は「外地」、その中でも朝鮮との接点が始ど見られなかった。だが右記二編から、芙美子が実は、朝鮮で発行されていた新聞に作品や随筆を寄せていたことが立証される。このことだけでも注目に値する資料だと言えよう。

それでは、一先ず「靄」が掲載される一九三三（昭8）年頃の林

芙美子の文学活動について探ってみることにしよう。一九三〇（昭五）年改造社から出版した『放浪記』が大ヒットし、その際の原稿料などで中国に海外旅行に出る。それから二年後の一九三二（昭七）年十一月に由の汽車でヨ半年後の一九三三年三月三〇日）と榊山潤「文芸時評（四）」（「時事新報」一九三



9 林芙美子「霧」(二)

は朝鮮とシベリア經一ロッパに行き、ほぼ三二（昭七）年六月にくる。日本に戻ってか帳」や「小区」などの目を浴びる。今までの自伝皮しようとするが見え始める「注

3」。

しかし、このおける手法の三三（昭八）年が見られる。一に「文芸春秋」は、好評を得る抒情詩人のような「型」から逃れていないという厳しい評価もうける。例えば、広津和郎「文芸時評（完）」（「読売新聞」一九三三年三月三〇日）と榊山潤「文芸時評（四）」（「時事新報」一九三

三年三月二日）はそれぞれ「ぴしぴしと小魚の跳ねてゐるやうな活発さ」のある作品、「相変らず、貧乏の中において慎ましく貧乏くさくない」「仄々と明るい純情の女性」の主人公の作品であると評価している。その反面、深田久弥「文芸時評②」（『東京日日新聞』一九三三年三月三日）は「魚の序文」について「相変らず水々しい詩情に充ちた作品」で、作者の林芙美子を「賞讃する人々は、ある一つの氏の型で氏を享け入れて」いて、それを作者「自ら氏の型を模倣してゐるらしくさへ見える」とし、創作の技法の流動性を要求している。また、木村毅も「四月文壇の印象（七・完）」（『九州日報』一九三三年四月二三日）で「魚の序文」を取り上げながら、林芙美子について「相変はらずの抒情人で」「どうやら少し濡れ気味にみえる」と酷評している。後に「私の仕事」で林芙美子が自分の創作活動を振り返って「私の仕事は、放浪記時代、清貧の書時代、牡蠣時代と、三期にわたることが出来る」（『文芸』一九三七年八月）と述べたように、一九三三（昭八）年は「清貧の書時代」と「牡蠣時代」との真つ只中に位置する時期であった。このような創作技法の変更が要求された時期に「霧」という作品が書かれたのである。

霧は気象学的には射程一キロメートル以上の場合を指す。「霧」という作品は「霧」の中に入ると、普段は同輩か弟くらいにししか見えなかった人が男として見え始め、恋愛の感情が芽生えたり、逆にお互いに好きな恋人同士の関係が破れてしまったりもするという内容である。普段の生活の中では感じられないあるいは見え

にくいものが、逆に「靄」の中では見えやすくなる。林芙美子の作品にはこのような「靄」の描写はあまり見受けられないが、その中でも一九三四（昭9）年四月の『文芸』に発表した「塵溜」という短編小説に類似した表現が出てくる。宮内との恋に失敗し、別れて一年も経たない内に治作と郊外の煙草屋の二階に住んでいた小なつところに、ある日突然宮内を訪れてくる。同棲している治作にはかつての二人の関係を誤魔化して酒などを御馳走する。宮内を見送りに出掛けた小なつは宮内に対して「もはやこの男に何の魅力も感じてはいない」とも思う。しかし、二週間後に宮内から子供の出産の知らせが届いた時、小なつは「歯茎のきかない子供だろう」と嘲りながらも、一抹の淋しい靄が身体のごりを這いあがるような気持ちがいなくてもなかった。」と心の中で思うのであった。その後特に小なつと宮内の関係の展開は見られないが、もう昔のような恋人としての感情のなくなっていた宮内から子供の出産の知らせを受けた際のこの記述を、小なつのその心境の変化が少なくとも揺らいでいるものとして解釈できるだろう。

板垣直子は『林芙美子』（東京ライフ社、一九五六年一月三〇日）の中で林芙美子の小説を大きく「自伝小説」と「客観小説」の二つに分けている。さらに「自伝小説」の中でも「放浪記」圏内の諸作」と「放浪記」圏外の諸作」に区分している。「塵溜」は前者の「放浪記」圏内の諸作」の一つとして数えられている。板垣直子の分類に従わなくても、林芙美子の読者なら「塵溜」の

宮内から芙美子の初恋の岡野軍一を連想するだろう。尾道の女学校時代に知り合い、岡野が東京の明治大学に進学することになり彼を追って上京したものの、結局は岡野の家族の反対にぶつかり初恋の失敗を味わう。これからも推測できるように「靄」という短編小説に出てくる葦野という男も岡野軍一をモデルにした可能性が高いと思われる。そう考えると「靄」の最後の正子の「なりに、あんたみたいな人は、お父さんの氣にいつたお嫁さんをさつさと貰ふんだわ、さうすると毎日会社の出勤も遅刻しないし、若万一好きなひとを見つけたとしても、一家円満は間違ひつこなしに守れるよ、あんたの人柄がねえ、此ひとはい、御主人様の氣風だよ」という発言は、故郷に帰ったきり親の指示通りお見合い結婚してしまった岡野軍一に対する言葉でもあったと受け止められる。

ここでまた年譜から抜けている作品を一つ紹介しよう〔注4〕。一九三三（昭8）年正月の新春読物として林芙美子は「放浪へ」（二七日、二八日、二九日）という三回読切の作品を「読売新聞」に寄せている。これは五人の女流作家が「女」というテーマでそれぞれ作品を書いているのだが、最初に矢田津世子の「処女時代」（一九三三年一月三日、一四日、一五日）という副題の作品を皮切りにして、佐藤碧子「オフィス・ワイフ」（二七日、一八日、一九日）、大田洋子「女へ」（二〇日、二一日、二三日）、真杉静枝「愛欲」（二四日、二五日、二六日）と続く。挿絵は全作共に新進画家の甲斐仁代が担当している。こうした「中篇連作小説」の最後を林芙美子

が飾っているわけである。その内容は宵子という女を主人公にして彼女の恋愛話を軸に五人の作家がそれぞれの話を進めている。最後の芙美子の「放浪へ」になると小説の中の時間は四年後という設定になり、『放浪記』を連想させるような恋愛に失敗した宵子が描かれている。

このように一九三三(昭8)年前後の芙美子は、作家デビュー前の生活から得たモチーフの自伝的な香を強く匂わせる作品を書いていた。そのような作品は「外地」の朝鮮で発行されていた新聞にも見られたが、戦後の日本では植民地時代に「外地」の朝鮮に進出していった他の作家の作品と同じく「靄」のようにその姿を消して見えにくくしていた。しかしながら、「靄」を含めて芙美子が「京城日報」に寄せた小説や評論のように、当時の朝鮮半島のメディアにも内地の文学者たちが積極的に執筆活動をしていたことが明らかになった。

第四節 事例二——「久生十蘭」の資料をめぐって

「京城日報」には久生十蘭作の小説が二編掲載されている。「激流」(一九三九年一月二〇日〜一九四〇年二月三日/全二二六回)という長編小説と「探偵小説 『酒の害』について」(一九四〇年一月一八、一九、二二日/全三回)という短編小説がそれである。

近年刊行された『定本久生十蘭全集』(国書刊行会、二〇〇七年一月九日〜二〇一三年、『全集』と略す)には、この二つの作品と同

じタイトルの小説は見当たらない。しかし、『全集』四巻には「女性の力」という長編小説が収録されていて、その内容は「京城日報」の「激流」と一致している。『全集』解題には、「女性の力」の初出を、「昭和十五年(一九四〇)十一月、博文館より書き下ろしで(小説選集)の一冊として刊行」と記されているが、正しくは、外地で発行されていた「京城日報」がその初出となる。ただし、その作品の本文の構成は、「京城日報」掲載時の一二六回に、さらに六回分を書き加えたものとなっている。

「京城日報」に、一九三九(昭14)年一月二〇日から翌年の一九四〇(昭15)年二月二三日まで総一二六回に渡って連載された「激流」は、昭和一五年に博文館から『女性の力』というタイトルで出版される。数カ所に本文の異同は見られるが、話の筋は同じである。主人公の真波は、長崎の島原にあるミッシヨンスクールでの一七年間の生活を後にし、唯一の伯母である馨子の招待に応じて、東京に向かう。一方、東京では同じミッシヨンスクール出身の幸子の兄清次郎が、失恋のために自殺するという事件が起きる。復讐を誓う幸子と自分の好きな男(冬彦)を真波と結婚させようとする馨子など、様々な男女の錯綜した関係の有様が描かれている長編小説である。

初出の「京城日報」では、真波が冬彦から逃れようとして窓から飛び降りる場面(第二二六回)で締め括られているが、単行本ではその後日談が書き加えられた形となっている。また、初出と単行本では章立ての違いも見られる。「京城日報」連載時の章立て

と、一九四〇（昭15）年に単行本化された『女性の力』を底本とする『全集』第四巻に収録された作品のその章立ては、以下の通りである。

○初出——「出発」（二〇二二）、「冬薔薇と鷲」（二〇二三）、「落葉の記」（二〇二七）、「闘志」（二〇二八）、「晚餐」（二〇二三）、「疑惑」（二〇二二）、「温室の中」（二〇二八）、「四人の客」（二〇二九）、「即興曲」（二〇二二）、「椿貞三」（二〇二二）、「代理人」（二〇二五）、「愛着」（二〇二六）、「女性の力」（二〇二〇）

●『全集』——「出発」（二〇二五）、「屈託のない人」（二〇二七）、「冬薔薇」（二〇二七）、「唾娘」（二〇二六）、「落葉の記」（二〇二七）、「闘志」（二〇二八）、「宣言」（二〇二六）、「晚餐」（二〇二七）、「同行」（二〇二五）、「疑惑」（二〇二七）、「温室の中」（二〇二八）、「四人の客」（二〇二九）、「即興曲」（二〇二六）、「茨の道」（二〇二六）、「再会」（二〇二六）、「炎の街」（二〇二五）、「代理人の人」（二〇二五）、「愛執」（二〇二六）、「日記帳」（二〇二八）、「信愛」（二〇二八）

初出が全一二六回であるのに対して、単行本収録の際には一三二回分の分量となっている。単行本化された時に多少推敲の跡が見られるが、内容的にはそれほど大きな相違点は認められない。初出の「女性の力」（九）と単行本の「信愛」（二）まで、その内

容はほぼ同じである。しかし、単行本には、初出にはなかった「信愛」（二）が挿入され、その後初出の最終回にあたる「信愛」（三）と新しく「信愛」（四〇八）が書き加えられている。つまり、初出の際にはなかった「信愛」（二）



図 10 久生十蘭「激流」の最終回

と「信愛」（四〇八）という六回分が単行本に加筆されたわけである。その他にも初出では、真波が上京する際汽車の中で出会った同じ孤児出身の「椿貞三」という男の名前が『全集』では「菅直記」と変更されている。

戦後の一九四八（昭23）年に「読売新聞」に発表された「ココニ泉アリ」の連載前の予告記事「次の連載小説」（三月三十一日）には、「新聞小説に初めて筆をとる久生氏は他の一切の執筆を絶つて構想三ヶ月、日本文壇に一大波紋を投ずべき新しき『百万人の文学』を掲げて登場する」という紹介文があり、『全集』解題もその記事が引かれている（注5）。しかし、本稿でこれまで見てきたように、久生十蘭は戦前から、しかも外地新聞の「京城日報」上で、新聞連載小説の執筆活動を行ってきたので

ある。

また、「探偵小説 『酒の害』について」も、『全集』や他の研究書などの年譜にも、そのタイトルが見当たらない作品である。その概要は、以下の通りである。ある霜のひどい朝、タクシー運転手の死体が見つかる。その現場には七人の野次馬が集まっている。通りかかっていた木谷道夫は、殺人者は必ず現場に戻ってくるというある博士の「殺人論」を思い出しながら、その七人を疑い始める。しかし、捜査の協力のため、警察署に行った木谷は逆に犯人として疑われる。木谷は断然と嫌疑を否定するが、警察署で差し出されたお酒を飲んでから、実は自分が昨夜帰りに酔っぱらってタクシー運転手と喧嘩し、殺害したことを思いだし、罪を認めるというあらずじとなっている。

『全集』未収録の作品だが、実はこの短編小説は、外地の新聞である「京城日報」に掲載の後、内地の新聞にも掲載されていた。森英一作成の「北国新聞」文芸関係記事年表稿(昭和篇³)、「金沢大学教育学部紀要 人文科学社会科学編³」一九八八年二月、以下「年表稿」には、石川県で発行されていた「北国新聞」に、五回に渡って連載されていたことが確認できる。一九四〇(昭15)年二月九日から一〇、一一、一三、一四日まで、それぞれ「探偵小説 酒をめぐって」、「探偵小説 酒の害をめぐって」、「探偵小説 酒の害をめぐって」、「探偵小説 酒の害をめぐって」、「探偵小説 酒の害をめぐって」というタイトルで連載されている。連載日から確認できるように、内地の新聞より半月ほど早い時期

に、外地の新聞に連載されていたことがわかる。

一九二九(昭4)年から一九三三(昭8)年までフランスに留学した久生十蘭は、フランス留学体験から題材を得た小説を数多く執筆している。また、戦中には海軍報道班員として南方に赴き、日記や南方を舞台にした小説などを残している。「京城日報」に掲載されていた久生十蘭の二つの作品は、内容的には朝鮮との直接的な関係は認められないにしても、久生十蘭が一九三九(昭14)年から一五年の間、内地の雑誌だけではなく、外地の新聞にも作品を寄せていたという、彼の創作活動の新たな一側面を見せてくれる貴重な資料になると考える。

ここまで見てきたように「京城日報」に掲載されていた小説の中には戦前はもちろん、戦後も「日本文学史」から漏れていたものがあることが確認できた。次の第二部では朝鮮半島における「日本文学」をさらに具体的に探りながら、分析を行う。内地の作家たちや彼らの作品などがどのように外地の朝鮮にまで移動するかに焦点を当てながら、その移動後の「京城日報」に掲載される作品群にも目を配る。同じ作家の同じ内容の作品でもその掲載媒体の性格によつてその内容の変更が見受けられる。特に、戦時体制になるにつれて、その媒体の性格がさらに強まる場面や逆にこれまでは見られなかった隙間のようなものも見えてくると思う。

注

〔1〕連載一五回目が掲載された五月一八日を最後に急遽、連載が中断

となる。通常の場合あるはずの連載中断の広告文も「京城日報」には見あたらない。その理由は定かではないが、一つの手がかりとして全集などの年譜をみると、同年の五月に取材の為上海に向かったことがわかる。上海行きとなんらかの関係があるのだろうか。実際に、波瀾剛「昭和モダンと文化翻訳」（『九大日文』二〇〇九年三月三十一日）によると、「上海毎日新聞にも同年の十一月ごろに「寛永卅乱れ」という同じタイトルの作品が連載されていたことが確認できる。

〔2〕一九四二年政府の新聞統合令により、「中外商業新報」が「日本産業経済」に改題、後に「日本経済新聞」へと変わる。

〔3〕十一谷義三郎は「文芸時評 三」（『東京朝日新聞』一九三二年一月四日）で「小区」について「女ごころに潜む「善き古さ」を、縦から横から眺めて、その味を、雨に、花に、犬に、小区居住者の景物的展望にまでゆきわたらせた佳作」だと評価しながら、「作家的捨身の開眼の道程をだどらうとするやう見える」と述べている。

〔4〕但し、昭和女子大学近代文学研究書発行の『近代文学研究叢書』（第六九巻、一九九五年三月二〇日）にはその書誌情報が記載されている。

〔5〕『全集』の第一〇巻の解題「作者の言葉（「ユコニ泉アリ」）」参照。

第二部 「京城日報」をめぐる文学者と作品の移動

第3章 脚色・挿入される関東大震災——上司小剣

「災後の恋」論

第一節 「京城日報」と「災後の恋」、二つの震災描写

この章では関東大震災を背景にして外地の朝鮮で発表された上司小剣の「災後の恋」に焦点を当てることで、これまで内地だけに偏っていた関東大震災後の上司小剣の執筆活動を更に立体的に描いてみたい。

上司小剣の「災後の恋」は関東大震災の二ヶ月後の一九二二（大正十一年）一月二七日から翌年の六月六日まで、朝鮮で発行されていた「京城日報」に連載された長編小説である〔注1〕。その簡単な筋は次のようである。詩人の星野光多と夏山花枝は日光に駆け落ちした際、関東大震災の知らせを耳にする。何とか東京に戻り、両親の無事を確認した二人を待っていたのは、それぞれの縁談の話であった。二人はそれを拒み、罹災した東京を後にし、花枝の従妹の繁子たちと長野、京都などを転々する。最後には大阪の海の近くの村に落ち着くが、花枝の病気が判明するという関東

大震災後の男女の恋話を描いた作品である。

一九二二（大正十一年）九月一日に起きた関東大震災は死亡者と行方不明者を合わせて約一〇万五千人の被害者が出るなど、主に東京と横浜に莫大な被害を与えた〔注2〕。住宅や官公署なども火災により、多くの建物が失われた。このような未曾有の大震災について新聞などのメディアの報道は、主要新聞社などの通信機関が被災したため、九月五日になって漸く発行された「東京日日新聞」夕刊を待たなければならなかったのである。つまり、震災が発生した一日から五日の夕方まで震災に関する新聞報道による情報の入手は出来なかったことになる〔注3〕。

では外地の朝鮮で発行していた「京城日報」はどうであったろうか。震災に関する最も早い記事は震災翌日の二日の「京城日報」紙面に「東海道の各地の大震災被害」という見出しで報じられる。その具体的な内容は「震源地は桑名方面か」、「東京全市に火災起り宮城は危険に陥る」、「津浪で駿河町全滅」などの確証のない推測程度の報道であった。このような震災に関する報道はその後も連日のように、被害の状況が写真付きで紙面を飾るようになる。「京城日報」における関東大震災に関する記事をいくつかピックアップすると次のようである。

● 「日光御滞在中の両陛下／飛行機で来る報告を聞召さる／日光御滞在中の両陛下は御安泰、飛行機にて来る刻々の報告を聞召されてゐる（午後十時半著電）」（一九二三年九月五日朝

刊、傍線は嚴、以下同じ。）

●「帝都大惨禍の真相（中略）危難を免れて昨日帰朝した留学生の目撃談（中略）外に出て見ると其処此処に家の倒れたのがあつたが地震で倒れたのは一割にも達しなつたと思ふ、火の出たのは丸之内神田方面が早かつた自分等は何処か安全な所と思つて馬場先に来て一夜を明し此処も危険なので新聞の号外を見て青山に行き明治神宮で翌夜を明し三日朝漸く道を探し東京を出て川口まで歩いたが汽車に乗れない」（一九二三年九月六日朝刊）

●「列車の屋根に乗つて避難／火の海と化した大東京／帝都へ出張中に大地震に遭遇し九死に一生を得て帰城した中村教諭の談（中略）正午頃東京駅にいつて見ました、此駅は安全に立つて居て駅内から駅前の広場は避難民を以て山をなしてゐました、其中に信越線は日暮里駅から無賃乗車を許すと云ふ鉄道省からの記事広告があつたので午後三時頃同駅で乗客多数のため辛うじて列車の屋根の上に這上つて避難した様な訳でした」（一九二三年九月七日朝刊）

●「人類愛の基本に立ちて世界的大惨禍に処せよ（中略）丸山警務局長談（中略）一部少数の不良鮮人が此の惨禍に乗じて暴行したものがあつたので、著しく一般民衆の反感を買ひ鮮人と民衆と衝突した事例二三あつたのは洵に遺憾至極であるかゝる惨禍の際に乗じて乱暴な挙動をする鮮人が少数でもあ

つたことは天人共に容れざる不徳の行為たるは言を俟たないが之が為に流言飛語行はれ誇大の訛伝の流布せられて益々昂奮せる民衆と鮮人間との阻隔を大ならしめて居る模様がある」（一九二三年九月七日夕刊）

●「不良鮮人の暴動【東京電報】福田戒嚴軍司令官は主要左の如く発表して曰く這般の災害に際し不良鮮人の暴動に就き種々宣伝されたが震災当初に於て三三五々の不良鮮人が暴動を働いた事は事実である」（一九二三年九月九日朝刊）

●「貼紙だらけの西郷さんの銅像 罹災民が家族や知人に居所を知らせる為め上野公園の西郷さんの銅像に所嫌はず貼紙をしたところ」（一九二三年九月二三日朝刊、写真付き）

以上のような震災に関するトピック群に「京城日報」を通して接した新聞の読者は震災の二ヶ月後に同じ「京城日報」の紙面に連載される小説を読むことになる。「災後の恋」で震災に関する場面は一月三〇日の四回から一月一九日の二〇回に渡つて集中的に描かれている。主な震災の場面を抜粋してみると次のようである。

●「二人の向ふ側には、新聞雑誌の写真版で見覚えのある宮中の大官が、若い随員と並んで腰をおろしてゐた。」（九回）

●「川口町へ着いた。そこから先きは約束の通り汽車は普通

であつた」(一〇回)

●「そこへ、上りの列車が轟と入つて来たが、見ると驚いた機関車にまで山車か何かのやうに人がいつぱい集つて乗つてゐる、石炭車にもむろん人がいつぱいなら客車は言ふまでもなく、ぎつしり詰まつて。屋根の上にもまで乗つてゐる。」(一三回)

●「汽車は日暮り迄しか行かなかつた。光多は其処から線路を歩いて多くの避難者の哀れに疲れた姿と行き違ひながら、上野の森の中まで辿り着いた。」(一六回)

●「街の見えた丘の上まで来ると、西郷隆盛の銅像が尋ね人や立ち退き先を知らせる貼り札に鎧を着たやうになつてゐた。」(一七回)

●「何んでも或る種の暴民どもが、焼け残つた町々へ放火するとかいふ流言が伝はつて、それを警戒する為めに、多くの平民たちが武装して警戒線を張つてゐるのであつた。」(二〇回)

「京城日報」に報道された震災についての情報が大体「災後の恋」にも盛り込まれていることが確認できる。このように、同じ紙面から、または他のメディアから得た震災に関する情報を既に共有している読者たちのために、作者が外地の新聞に震災を背景にした作品を寄せる際の意図や戦略などは何だったのだろうか。

本論ではこのような点に着目し、その解決までのプロセスとし

てまず震災後の上司小剣の発言やそれに対する文学者たちの反応や差異を鳥瞰する。その上で、「災後の恋」の連載前後に発表されていた長編小説「東京」四部作を視野に入れながら、「災後の恋」

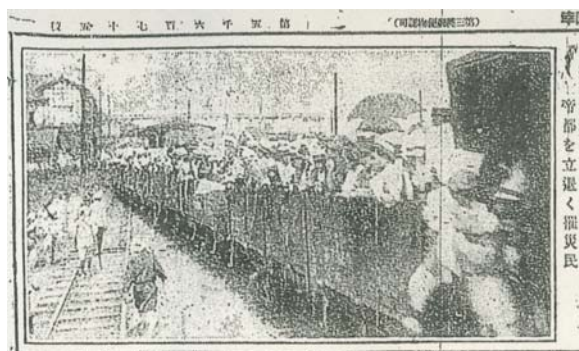


図 11 「避難民たち」(大正 12 年 9 月 13 日)

との関連性を考察する。長編小説「東京」は大阪から上京した春田影彦という天才的な口笛を吹く青年を中心に、恋人の海野浜江と彼女の父で文学士の海野三郎、女流作家の岩村小夜子、先輩画家の吉松栄などとの交流を描いた作品である。このような長編小説「東京」の第三部「争闘篇」の執筆中に震災に遭つた作者が震災後に回想しているように、果たして震災以前から東京の破壊を意識していたのだろうか。この疑問点に答えるために、プロセスの最後には震災直後から「朝日新聞」に連載される「東京」の第三部「争闘篇」から「震災」に関する記述を抜粋する。その後、「京城日報」に掲載される「災後の恋」の「震災」関連記述を分析し、一九二八(昭三)年に『現代長篇小説全集(16)』に一冊として収録される際の「東京」第三部の震災描写の改変・修正なども検討する。このような作業を通して、最終的にはこれまで内地にのみ偏重していた関東大震災後の作者小剣の執筆活動が更に明らかに

なると思われる。

第二節 震災後の上司小剣の発言をめぐる

関東大震災の起きる一ヶ月前の一九二三(大12)年八月に上司小剣は避暑のため日光中禅寺湖畔に向かう。そこで作品の執筆をづけていた小剣は関東大震災の知らせに接する。小剣はのちにこの時の状況を次のように述べている。

私は日光に居りましたから、地震には遭ひませんでした。東京全滅の地方新聞号外をば多分嘘であらうと思ひながら、満員以上の汽車の屋根の上に乗つて帰京して見ると、上野の松坂屋はまだ燃えてゐました。丸の内まで来ると、あすこの大建築は皆無事で、全滅は矢張り嘘でした。(上司小剣「注目すべき新東京」(『婦人公論』一九三三年一〇月))

避暑中の日光で震災に遭い、地方の新聞からその情報を得るしか方法がなかった小剣の回想は、日光に駆け落ちしていた「災後の恋」の主人公の二人を思い出させる。小剣は続けて同じ文章の中で次のように付け加えている。

私は丁度長篇「東京」の第三部で、空想的に東京の破壊を書き、第四部で新東京の建設を書くつもりでしたから、空想が

事実になりました。爾来一兩日焼跡を観察して歩きましたが、到る所復興の気の溢れてゐるのを覚えました。災害の報を聞いた折りの第一の感じは、「東京が立派になるぞ」といふことでありました。此際、大自然の前には人間の力が無力だ、などといふ陳腐な口上を述べたくありません。たゞ全部資本主義によつて復興せらるゝ新東京の内容如何は、注目すべきものでありませう。(同前)



図 12 上司小剣「災後の恋」第13回

関東大震災の時日光に滞在しながら「東京」の第三部に取り組んでいた小剣は、震災後、東京に戻つてからの感想を右のように述べている。執筆中の「東京」第三部に「東京の破壊」を描こう思っていた折に、偶然大震災が起こり、東京に戻つてから被災地を自ら廻つてみて最初に感じたのは「東京が立派になるぞ」という非常に大胆な感想であった。しかし、直接震災を経験した人たちから見ると、震災を経験せずまた特に家の被害も受けていない小剣のこのような発言は物議を醸しだすに十分であった。実際に小剣が雑誌などに震災後の感想などを寄せていた時期に、それに対する批判の声も寄せられていたのである。「時事新報」には菊池寛の次のような文章が

掲載されている。

喧嘩過ぎての強がりには誰にだつて出来る。余震が全く収まり文壇が半恢復してからの気焰なら上司小剣君を待たない。(中略)罹災せる東京について同じことを云つてゐるのだ。完全なる衣食住なくして、何の文学ぞや。衣食住の保証なき者に対しては、芸術は贅沢品だ。この観察が何が泣き声なのだ。白日を指してゐるが如く堂々たる立言でないか上司氏から真面目になれと云はれた。(中略)たゞ九月一日の午後、被服廠裡の熱火に里見君と葛西氏と上司小剣氏とを立たしめ「珠は砕けない」「コレシキの事にへこたれては、芸術の神にすまない」「芸術家の任務は消防夫よりも重大である」と、それぞれ芸術のために叫んで貰へなかつたことは、芸術のために甚だ遺憾である。(菊池寛「喧嘩過ぎての強がり」(「時事新報」一九三三年一〇月二〇日))

ここで菊池寛は震災のような状況では芸術より生活が優先であることを主張している。芸術は贅沢品で、衣食住が大事であると述べながら、その批判の矛先を小剣のような文学者に向けている(注4)。菊池寛のこのような批判をうけて、引き続き二日後の同じ紙面には「無名」の次のような文章が見られる。

只何と考へても合点の行かぬは「東京全焼と聞いたとき私の

頭へ第一に浮んだものは「東京の街が美しくなるぞ」と云ふことであつた」と、其れを人間の言葉で麗々しく述べたてた某文士の「頭」そのものである。阿鼻叫喚の東京市民に対して、仮令此人が人間なみの同情を一点も持合せなかつたとしても、咄嗟の間、妻子眷族に対する心配は起りさうなものだ。其れを二の次三の次にして第一番に東京の街が美しくなることを考へた其頭の構造がどうなつて居るのか、返す／＼も合点が行かぬ。大災以来、見識振りやツムジ曲りで、変な文句を弄んだ人が少くなかつた。其等に対して先日も一言したことであるが、此文士などは其中でも秀逸の部類に属するであらう。(無名「時事小観」(「時事新報」一九三三年一〇月二二日))

この文章で批判の対象になつている「某文士」とはおそらく小剣であろう。「東京の街が美しくなる」という震災後の小剣の第一の感想について、「合点が行かぬ」、「同情を一点も持ち合せなかつた」と不満を述べている。このような小剣に対する一連の批判に対して、彼がどのような対応をしたのか、「時事新報」の紙面からはまだ確認できていない(注5)。更に、震災後に小剣が数多くの文章を寄せている『中央公論』の社員であつた木佐木勝も小剣の震災についての感想に対して戸惑いを隠さなかつた。

午前中に目黒の上司小剣氏を訪ね、「大正十三年を迎ふる辞」について執筆を依頼。(中略)東京へ帰つて来て、上野駅に着

いたとき、初めて東京の焼野原を目撃して、小剣氏は「これで東京が生まれ変わって美しくなる」と思ったそうである。

それを聞いて小剣氏の感覚を不思議なものに思った。東京の焼野原を見たとき「東京は美しくなる」と自分などは感じなかったし、誰もそんなことを言った者はなかったようだ。

東京を離れていて、焼け出されもせず、家をつぶされもしなかった人でなければ言えないことだと思つた。(木佐木勝「一九二三年一月九日」(『木佐木日記 第一巻』現代史出版会、一九七六年四月五日))

木佐木も述べているように震災後の小剣の感想は、東京にいて大震災を目の前で経験した人たちからみると、非常に「不思議なもの」であつたのである。震災の際日光にいて遅れてきた者であつたからこそ、小剣に対する世間の批判の声は当然であつたかもしれない。このような批判にも関わらず、小剣はその後も「不思議な」発言を多様なメディアで繰り返している。このような「不思議な」発言はただ単に、直接身を以て震災を経験できなかったことに起因するのだろうか。この問題の手がかりを得るためにも、次に震災前後に執筆された小剣の作品に目を向けなければならぬ。

第三節 「東京」から「災後の恋」へ

小剣の「東京」は前述したように関東大震災が起きる前から新聞や雑誌に掲載されていた四部作の長編小説である(注6)。一九二一年(大10)年一月一日付けの「読売新聞」に次のような記事が見られる。

私は数年来「東京」といふ長編を書きたいと思つて、準備をしてゐるのですが、まだ着筆の機会を得ません。千枚ほどにもなるつもりで、私の一生の小さな事業中、これだけは不朽とまでに行かずとも、三十年や五十年ぐらゐ後に残したいと、生意気なことを考へてゐるのです。今年あたりからは、前編の初めだけでも書きかけてみたいと思つてゐます。(上司小剣「今年は何を書くか 長篇「東京」(「読売新聞」一九二二年一月一日朝刊))

一九二一年(大10)年度に何を書くかという新聞社からの質問に小剣は以前から構想していた「東京」という長編を書きたいと述べている。この記事からほぼ二ヶ月後に「読売新聞」ではなく、「朝日新聞」に「東京」第一部「愛欲篇」が連載される。一九二一年(大10)年二月二〇日から同年七月九日まで全一四〇回に渡つて連載され、後に一九二一年(大10)年二月二五日に大鑑閣から単行本が発行された。第二部の「労働篇」は『中央公論』に一九二一年(大10)年七月から一九二二年(大11)年の一月まで連載された後、『解放』にその続きが同年同月から八月まで掲載されることになる。第二部も

また大鑑閣から単行本化された（一九二三年八月二五日）。

このように関東大震災以前から第一部と第二部が発表されていた「東京」は、一九二三（大12）年の『解放』の一月号にその第三部「争闘篇」の「祭日」が掲載される。五月には同じ紙面に「赤い室」が掲載されるが、九月に起きた震災のため大鑑閣が全焼してしまい、連載は中断される〔注7〕。しかし、震災直後の九月二七日の「朝日新聞」には次のような「新小説予告」が見受けられる。

帝都廃滅の惨害、それは市民の、国民全般の真に夢想だもしなかつた一大事実であつた。然も時代の先駆者たる芸術家の超地上的な空想の裡には歴然指點するやうにはつきりと想像され、描写されて居たのである。（中略）右は第二の「労働篇」と併せて所謂洛陽の紙価を高からしめたが、偶氏が第三篇以下に空想しつゝあつた廢墟の東京は凶らずも自然の力により現前の災厄として現実され、更に建設の新しい理想は人間の力によつて営まれつゝある。氏は地図を按じて焦土の全街を踏査すること数日、稿を急いでこゝに争闘から建設への東京を描く。正に大正震害の記念塔であり、新生活の警鐘でなければならぬ。愛読を賜へ。（「朝日新聞」一九二三年九月二七日朝刊）

震災のため一旦連載中止となつた「東京」の第三部が、発表の場

を変えて改めて連載を再開するという予告文であつた。誰も想像できなかった震災を「時代の先駆者たる芸術家」である作者は以前から想像し、それを描いていたと宣伝している。前節でみた『婦人公論』に掲載された震災後の小剣の感想とほぼ同じ内容がつづられており、また小剣が震災後の東京の街を踏査したと付け加えている。そしてこの予告文の二日後には、「長篇『東京』の作者から」が掲載される。

今春来私は其の第三部「争闘篇」に着手し、空想をもつて旧東京の破壊を描き、新東京の理想的建設に移らうとして居りました。ところが偶然と言はうかなんと言はうか、あの通りの大破壊が東京の上にやつて来ました。（中略）焼跡を歩いて、第一に感得するものは、旺んなる復興の気であります（中略）私の主として描かうとするのは東京の物質的破壊と物質的建設とに伴ふ精神的破壊と精神的建設とであります。（「朝日新聞」一九二三年九月二九日朝刊）

前掲の「新小説予告」と震災前後の小剣の感想が更に繰り返されている。このように宣伝された「東京」第三部の「争闘篇」は、震災前に『解放』に寄せていた「祭日」と「赤い室」を引き継いで、「朝日新聞」に一九二三（大12）年一〇月一日から同年一二月二九日まで全九〇回にわたつて連載される。前節でも見たように小剣は「東京」第三部の執筆の段階で東京の破壊の場面を構想し

ていたと繰り返して述べた。では、実際作品の中ではどのように描かれていたのだろうか。以下「朝日新聞」連載の「東京」第三部から「大破壊」に関する箇所を抽出してみよう。

●「何か痛快なことがあるといふのね。……世の中を一度にひっくりかへすやうな。」(四回)

●「まだく、こんなことどころぢやないのよ。今にござんなさい、この都会が土台からひっくりかへるやうなことがあるかも知れないから。」(五回)

●「赤い雲が流れる。……紅が流れる。昔江戸では、大火事のことをさう言つたのよ。……ほんとに、空一面赤い雲が紅のやうに流れるほどの火事になればい。」(七回)

●「今にきつと大事変があるから。……さうして大惨事が起るから。……それまではまあ、かうやつて浮かれながら暮すのよ。いゝ気になつてね。……あゝ詰まらない」(八回)

●「東京をほんたうに活きた大都会とするには、一度あの街々の上に大破壊が来なければなりません。」(一八回)

●「若し仮りに、東京が大地震か大火事かで、全滅してしまつて、生き残つた人たちが、元の公園であつた場所か何かの広場にでも、バラツクの長屋生活、たとへば、今この森の中にあるこんな生活でも始めたとしたら、外形がどんなに見苦しくとも、ガスや電気の設備はなくとも、思想観念の相交通した、所謂活きたる都市(?)が出来上ると思ひますよ。」(一

九回)

●「あたし何んだか、此頃に大地震か大火事でもありさうな気がしてならないのよ。近いうちに。……じれつたくて仕様がなから、そんなことでもあつた方がいゝと思ふのよ。この大川が一面に死骸で埋まるやうな騒ぎがあつたらどうでせう。むろんあたしも、其死骸の一員になつたツていゝわ。」(三九回)

●「そんな低級な俗悪な、浪費的なことをするものゝある世の中が、早晚天譴を受けて、大破壊の刑罰に泣くことがあるのを恐れるのです。」(四〇回)

●「琉球と東京とが同じ温度」などと新聞の標題は歌つてゐた。「大地震でもなければいゝが。……」と、人々は不気味さうに恐れ合つた。」(四二回)

●「今にこれが一面の焦土となる日が来るのであらうか。……(中略) 近いうちに何かきつと恐ろしい騒ぎが起るであらうといふ凶兆に、心がたゞそはくして、どこまで行つても風の吹き捲くる街路をうねく、曲つたり下つたり上つたりして、決して電車には乗るまいと、固い覚悟で、爪先きの欠けた薩摩下駄の足を大股に運んだ。」(八三回)

●「若しやこの東京が一日一夜のうちに焼け野原となるならば、……廃墟の都となるならば、自分の生活もまた新しい都とも建設されやうけれど、そんなことを待つのもをぞましい。」(八九回)

このように連載開始早々から連載が終わる直前まで、東京の「大破壊」を予感させるような箇所が頻繁に本文に挿入されていたことが確認できる。小剣がいつから東京の「大破壊」を構想していたのかは特定できないが、震災前に発表した「祭日」と「赤い室」に東京の破壊に関する記述が殆ど見られないことからすると、震災後の「朝日新聞」連載時から更に強く東京の「大破壊」を意識していたのだろう。しかし、小剣が構想していたという「大破壊」の場面は第三部の連載が終わるまで見当たらず、結局その「大破壊」が描かれるのは一九二八（昭三）年に刊行された『現代長篇小説全集（16）上小剣篇』（新潮社、一九二八年一月一日、以下『現代全集』版「東京」と略す）であった（注8）。『現代全集』版「東京」は「東京」第一部「愛欲篇」と第二部「労働篇」、そして第三部の「争闘篇」を一つにまとめた単行本である。その刊行にあたって小剣は『現代全集』版「東京」の月報に収められた『東京』に就て「で次のように述べている。

今度のこの「現代長篇小説全集」へ『東京』を入れることになり、第三部まで、一と先づ完結させるに就いては、新たに百枚ばかり書き足した。かういふ種類の全集物に書きおろしの際稿を用いたのは、私が初めかも知れない。

これまで発表してきた「東京」を一つの本にまとめるにあたって、

百枚くらいの際稿を新しく書き加えたと紹介している。その新しく加筆された箇所は「朝日新聞」連載の最終回以降の「矢の根」（二二―一五）から「春の泡雪」（二一―九）、「暗黒」、「破壊」（二一―一四）、「光明」（二一―二）までである。新聞連載の回数に換算すると、全三〇回分になるだろう。上記の各章題からも推測できるように、「暗黒」の後に「破壊」に至って漸く大震災の場面が登場する。ここで注目しなければならないのは、震災が描かれる「暗黒」と「破壊」の間の空白である。「暗黒」の最後には次のような括弧つきの註が書かれてある。

（註。これから一ヶ年余に渉る春田の生活日誌は、彼れ一代の暗黒面として、闇から闇へ葬り去ることを望んでゐる。そのうち、また気が変つたら、ぼつ／＼過去の追懐として、建設篇の中でも発表するか知れない。姑らく、舞台を暗転ダークチェンジとして、それから一年後の記録に移る。）（本文七七〇頁）

自殺を考えて家を出たが、結局はみんなのところに戻ってくる場面で終わる「暗黒」で一旦春田の話は締め括られる。その後の話は「註」で示しているように一年の時間が過ぎて、春田と小夜子が上野から日光に向かう場面から始まる「破壊」に引き継がれる。なぜこのような「暗転ダークチェンジ」が起きるのであろうか。新聞連載

の時には描くことの出来なかつた震災の場面を一九二八（昭3）年の『現代全集』版「東京」にわざわざ挿入したのに何かわけがあるのだろうか。ここで改めて「東京」第三部の連載の頃に遡ってみよう。「朝日新聞」での「争闘篇」の連載がほぼ半分を過ぎていたところの一九二三（大12）年一月一八日の「京城日報」には次のような広告文が見受けられる。

一夜のうちに、大東京の半を焦土にした恐ろしい災の後にも、優しい恋の花のみは、大地震に散らされず、大火事に焼かれず、もとの美しい形をして咲き残つてゐる。大自然の力も、男女の強い一年をどうすることも出来なかつた。焼跡のバラツクに咲くこの恋の花が、これからどんな世の荒波に揉まれて、いかなる実を結ぶであらうか。町家の娘と或る詩人との恋！若い二人は流れくぐって、遠く新領土へまでも彷徨て行く。哀れ深い物語りがこの一編である。採材清新、構想幽奇、且作家は我国文壇の大家として既に定評あり必ずや熱狂的歓迎を受くることゝ信じます（「次回新小説予告」（一九三三年一月一八日））

震災後すぐさま「朝日新聞」に「東京」の第三部の連載を始めた小剣は、立て続けに外地の新聞にも同時に長編小説を寄せていた。作品のタイトルからもわかるように関東大震災を背景にした男女の恋話が主に描かれている小説である。同じ予告文には作者の小

剣の文章も載せてある。しかし、それは作品についてというより以前「朝鮮新聞」に自分と同じ名前の作者の描いた「二つの秘密」という長編小説が掲載されたことを指摘しながら、朝鮮の新聞に作品を寄せるのは今回が初めてであると強く主張しているのみである。その事実の確認はまだ定かではないが、このことから、当時外地の朝鮮のメディアにおいて内地文壇の文学者の名を借りた文学活動も行われていたことがわかる。

このように広告された「災後の恋」の第一回目（「紅蓮」（一））は星野光多と夏山花枝が既に日光に着いた場面から話が展開される。『現代全集』版「東京」の「破壊」以後の部分を「災後の恋」の本文と比較してみると、「災後の恋」の第四回目「紅蓮（四）」から第二〇回分の「バラツク（八）」までの内容とばらつきはあるものの、基本的な内容の構造はほぼ同じである（注9）。

荒井真理亜は前掲の「『東京』に就て」で小剣が『現代全集』版「東京」の発刊にあたり、新しく百枚程度の加筆をしたことに対して、文の最後に書いてある「九月二十八日、「東京」第三部争闘篇『光明』の章を執筆しつゝ」という記述に注目し、新しく加筆された箇所は『現代全集』版「東京」の刊行直前に書かれたと指摘している（注10）。しかし、前述したように一九二八（昭3）年に『現代全集』版「東京」が発行される際、新しく書き加えられた箇所、特に「破壊」以後の部分は既に一九二三（大12）年末の時点で外地の新聞で活字化されていたのである（注11）。

第四節 「暗転」後の震災の描き方と作者の戦略

前節で見てきた「京城日報」に掲載された「災後の恋」の前半の震災の描写と、内容が似ている一九二八（昭三）年の『現代全集』版「東京」の「破壊」以後の部分を具体的に見比べてみて、ひとまず注意を引くのは両作品のヒロインの名前である。『現代全集』版「東京」の第三部「争闘篇」で春田影彦と女性作家の岩村小夜子が避暑のため、日光に赴く。一方、「災後の恋」では「東京」第一部「愛欲篇」で亡くなる春田の恋人の海野浜江と似た名前の夏山花枝と、詩人の星野光多が日光に駆け落ちする設定になっている。このように、ヒロインの名前と震災以後の場面がよく似た設定になっている二つの作品であるが、両作品には少なくとも内容の差異が見られる。

例えば、日光に向かう二人の関係をめぐる描写について、『現代全集』版「東京」では「暗転」の後、春田影彦と岩村小夜子は二人の関係についての詳しい説明もなく、何故か一緒に旅に出る。しかし、「災後の恋」では星野光多と夏山花枝の関係についてのより具体的な描写が頻繁に出てくる。

- 「男女の密会を目的に作られた家であった」（一一一回）
- 「いづれは男女の密会を目的に設計されたといふことが、

露骨に現れてゐた」（一一一回）

● 「漸く汽車が動きだしても、花枝はぼかんと気抜けしたやうになつて、あらぬ方に眼を注いでゐたが、それも暫く、動く汽車は忽ち光多の眼から花枝の姿を消してしまつた。何んだかもうこれが今生の別れになるのではあるまいか、といふやうな気がして、光多は涙ぐんでくる眼を人に見られまいと、手巾で押さへた。」（一四回）

● 「光多は、しよんぼりと立つてゐる花枝の幻影の、眼先にちら／＼するのを消すことが出来なかつた。」（一四回）

● 「この時若し下りの列車がすぐ出るならば光多はそれに飛び乗つて大宮へ、花枝の幻影を追ふて走つたかも知れなかつたが下り列車は一時間の後といふことだつたから」（一四回）

● 「さうして、唯一人大宮の宿に残しておいた花枝のこと、女中と二人で東京の郊外に居る母親のこと、が頻りに思ひ浮べられた。」（一五回）

● 「光多は、ほつとしながらも、今までくづ／＼してゐた岸からだん／＼離れて行くのに、一種の淋しさを感じた。花枝からだん／＼遠ざかつて行くと思ふのも悲しかった。この川を渡つてしまへば、いよ／＼花枝との間に隔たりが出来るといふやうなことを考へた」（一六回）

● 「この道は浮き間ヶ原といふところへ、名物の桜草を見に来た帰りに、花枝と二人で歩いたとこのあるのを漸くに思ひ出した。」（一六回）

「災後の恋」の二人の関係を赤裸々に見せているような「男女の密会を目的」という表現や、大宮に花枝を残して、一人で東京に来る光多の花枝に対して熱い思いを巡らす描写が作品前半に集中的に見られる。このような箇所は『現代全集』版「東京」には見当たらない。更に、光多の両家の家族に対する思いが綴られた部分も「災後の恋」に散在している。

● 「光多の老母が倒れた家に押し潰された惨状や、花枝の父母の猛火に追はれて、生命からく逃げ走つてゐる姿や」(「災後の恋」(八回)) ↓ 「焼けてゐる東京」(破壊(五))

● 「光多の老母も花枝の父母も世になき人となったといふ悲しみ」(同前) ↓ 「二人の知る邊が一つもなくなつたといふ悲惨」(同前)

● 「あの焰の下に、今頃花枝の両親や、自分の母親はどうなつたであらうかと、」(「災後の恋」(二二回)) ↓ 「あの焰の下に、美しかつた東京があるのだ……。」(破壊(九))

● 「この上は一刻も早く花枝の無事を父母に知らせて安心させてやりたい。通信機関が絶滅してゐるのだから、当然無事である地域の消息も不明で、どんなにか一人娘の安否を気づかかつてゐることであらう。父母に花枝の無事を知らせて、それから花枝に父母の身の安全を報ずる……それが自分の当面の二大任務だと、さう考へて」(「災後の恋」(一九回)) ↓ 「こ

の上は久し振りにそれを見舞つてやりたいと、口笛の全盛時代には考へてもみなかつたことを、廢墟の上にしんみりと考へつゝ」(光明(二))

● 「もちろんこのトタンの立て札だけで父母の無事は分つてゐるが、単に無事といふだけでは、大宮に待つてゐる花枝への土産には物足りない。どうしても父母の無事の顔を見て帰つてやらなければならない。」(「災後の恋」(二九回)) (のみ挿入。)

● 「奥座敷であつたか、父母や花枝と笑ひ興じた跡は残らず焦土となつて」(「災後の恋」(一九回)) ↓ 「どの辺に小さい仏壇があつたか。それは残らず焦土となつて」(「光明」(二))

「災後の恋」における東京にいる「光多の老母」や「花枝の父母」の安否に関する記述は、『現代小説』版「東京」では「焼けてゐる東京」、「美しかつた東京」などの描写にすり替えられている。また、家族の安全を心配するだけではなく、花枝と彼女の両親との思い出についての描写も「災後の恋」には挿入されている。つまり、作品の予告文にも見られたように、「東京」第三部「争闘篇」が主に「争闘から建設への東京」を描いたことに対して、「災後の恋」は大震災後にも「もとの美しい形をして咲き残つてゐる」二人の男女の「優しい恋」の話が繰り広げられていると言えよう。

このように「災後の恋」の震災の描写では、主に主人公の二人の恋人同士の思いやりや二人の両親の家族の安否を心配するような家族愛の物語としての傾向が強い。恐らくこのような家族愛の

物語が震災後の場面に散りばめられたのは、遠い朝鮮で震災の知らせに接した小説の読者たちの作品に対する関心を引くための一つの戦略ではなかっただろうか。そこには震災の描写と恋愛をセツトにするという京城日報社からの要求があったのかも知れない。しかし、震災後の描写が大体終わり、物語が後半になると、次のような光多たちの震災についての会話が交わされる。

「ね、君、実際バラックでこの冬を送る人は可哀さうなものだよしかし考へてみると、こんなことでもなかつたら、東京には永久に文化都市となるべき機会が来なかつたね」(中略)

「さうだ、今大きな声でそんなことを言つたら、殴られるかも知れないが、全く東京(マエ)ら都市計画は行き詰つてたからね。

(中略)今度のやうな大火事でもなければほんたうに仕様がなかつたね。見たまへ。五年十年経ちや、東京は綺麗になるぜ。今でこそ焼け残つたのを喜んでる家も、その時分になつたら、あの時この家も焼けてたら、綺麗に立派になつてるのにと、焼けなかつたのを悔やむやうなことになるから」(「災後の恋」(一〇四回))

罹災してバラック生活を余儀なくされた人たちに同情するような発言がなされた後、作者の震災後の感想を連想させるような表現が見られる。震災後の小剣の「不思議な」発言に対する世間の批

判を気にしながらも、以前として光多たちに震災に対する作者小剣の「不思議な」発言を語らせているのである。なぜ外地の新聞に連載された「災後の恋」にまでこのような「不思議な」発言の場面の挿入が可能だったのだろうか。おそらく外地の新聞を意識した作者小剣の一つの戦略であつたと思われる。外地の新聞であつたからこそ、震災後、批判されてきた自分の「不思議な」発言を作品にも反映することができたのである。

このような小剣は『現代全集』版「東京」が刊行された後に、次のように述べている。

私は今、丁度私の四部作長篇の一ばん終りの『建設篇』といふのを、ぼつ／＼書きはじめてゐる。この長篇の第二部『労働篇』といふのが、単行本になる前、『中央公論』に連載されたのは、一九二二年か三年の頃であつた。もう七八年の歳月が流れる。私の描かうとするのは、芸術『東京』であつた。必らずしも実在の『東京』ではない。資本主義を基礎としての中央集権が行はれ、近世大都市は皆その産物として現はれた。私の芸術『東京』は、さうした私生児的都市の滅亡に理想をおいて、『美しき東京』を描かうとするのである。ところが、偶然にも七年前のあの大地震火災。…私の建設篇は、新大東京の復興と、期を同ふして筆を執るやうな羽目になつた。(上司小剣「新大東京の顔」(『中央公論』一九三〇年四月))

「東京」の第四部「建設篇」を書きながら、小剣はもともと自分が描きたかった「東京」は必ずしも「実在の『東京』」ではなく、「芸術『東京』」であったと述懐する。その「芸術『東京』」は資本主義を基にした中央集権的な「私生児的都市」を滅ぼすことを目指す「美しき東京」であった。そこに偶然にも関東大震災が起きて小剣が目指していた「芸術『東京』」の執筆は「実在の『東京』」の復興と共に行われざるを得なかったのである。しかし、こうした「建設篇」が日の目を見るのは、戦後まで待たなければならなかった〔注12〕。

震災後にしきりに以前から東京の「大破壊」を空想していたと発言しながら、すぐさまその震災の描写が「朝日新聞」の連載時に挿入されることはなかった。小剣が震災前から東京の「大破壊」を意識していたとしても、それは前掲の小剣の回想のように「実在の『東京』」の「大破壊」ではなかった。このようなこれまでの作品の内容または構成との整合性の問題もあってか、結局東京の「大破壊」の場面は一九二八（昭3）年の『現代全集』版「東京」に漸く加筆されて現れる。しかも、その際東京の「大破壊」の場面を挿入するためには、「暗転^{ダークチェンジ}」という舞台装置の仕掛けなしには適えなかったのである。震災直後、実際に東京の「大破壊」が描かれたのは、外地の新聞「京城日報」に連載された「災後の恋」であった。そこで登場人物たちが語る震災に対する大胆な発言は震災後の作者小剣の「不思議な」発言を連想させる。このよ

うな場面が作品に挿入され得たのは外地の新聞としての地政学的なものに起因すると思われる。それを意識した作者が自分の「不思議な」発言を作品にも反映したのである。このような作者の戦略は外地の新聞であるからこそ明らかにされることができたのである。

注

〔1〕「災後の恋」の他にも、「京城日報」には上司小剣の作品がいくつか掲載されている。「梅にも春」（一九二二年一月一日〜三日／全三回）、「くろだい」（一九二五年三月二日〜同年四月五日／全六回）という短編小説と「蓄音機の話（感想）」（一九二五年一月一日〜一日／全二回）、「社会雑感」（一九三九年七月二九日〜三〇日／全二回）などの随筆が見受けられる。

〔2〕北原糸子『関東大震災の社会史』（朝日新聞出版、二〇一一年八月二五日）

〔3〕吉村昭『関東大震災』（文芸春秋、一九七三年八月）

〔4〕菊池寛は震災後の感想を他の雑誌にも寄せている。「我々文芸家に取つて、第一の打撃は、文芸と云ふことが、生死存亡の境に於ては、骨董書画などと同じやうに、無用の贅沢品であることを、マザ〜と知つたことである。（中略）今度の震災では、人生に於て何が一番必要であるかと云ふことが、今更ながら分つた。生死の境に於ては、たゞ寢食の外必要のものはない。食ふことと寝ることだ。」（「災後雑感」（『中央公論』一九二三年一〇月））

〔5〕 上司小剣の書誌情報が詳しく掲載されている『近代文学研究叢書』(第六二巻、昭和女子大学近代文学研究室、一九八九年六月五日)の「著作年表」には、一九二三年一〇月の前後に「時事新報」に文章を寄せた経歴は見当たらない。

〔6〕 「東京」四部作の成立過程に関しては荒井真理亜「上司小剣『東京』(四部作)の成立過程―上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介―」(『日本近代文学館年誌 資料探索 7』日本近代文学館、二〇一二年三月二〇日)に詳しく紹介されている。

〔7〕 後に小剣はその時のことを振り返って次にように述べている。「大正十一年から私は長篇『東京』の四部作にかゝつて、殆んど他の仕事に筆を絶つてゐるが、半分だけ漸く書き上げて出版した時、あの大震災で、東京の市街とゞもに、紙型の全部を焼き、更らに初めから書きなほすべく、日夜復稿を練つてゐる次第である。かくて私の大正年代は暮れた。千九百十二年から千九百二十七年までの十五年間。」(上司小剣「十五年間私史」(『文章倶楽部』一九二七年三月))

〔8〕 上司小剣の長編小説「東京」が「朝日新聞」に連載される時から挿画を担当していた石井鶴三は後に当手を振り返りながら次のように回想している。「争闘編は大正震災直後に朝日新聞に載ることになり、この時は上司さん自身拙宅に來られ挿画をたのむといわれた。災後万事不便の時であるから、本文原稿も挿画もはこぶ仕事は上司さんの令息がその労をとってくれるということであった。争闘編は何か天災が起るといふ構想だったが、こういう大震災が起つたので、

これを取り入れることにすると話された。上司さんは旅に出ておられ、震災を直接体験しておられなかった。災後混乱の中を苦勞し東京へ帰つてこられたという。私は東京にいたので最初の震動から身をもつてうけとめ、火災となつては火の下をくぐつて親類知人を見舞つたと話したら、それはよかつた、いずれ震災の場面が出るから、その時は体験を生かして挿画をかくてくれといわれた。だが紙上に大震災の場面はあらわれなくて、意気込んでいた私はいささかはりあいぬけの気持であつた。」(石井鶴三「折り折りの人」(4) 上司小剣 心に残る寸言隻語」(『朝日新聞』一九六七年一月一九日夕刊))

〔9〕 「災後の恋」の章題は次のようになっていゝ。「紅蓮」(一〇一―二)、 「バラック」(一〇二―四)、 「不意の縁談」(一〇一―一八)、 「大衝突」(一〇二―二)、 「家出」(一〇一―一八)、 道行(一〇二―四)、 異郷の空(一〇一―一九)、 海辺の村(一〇一―三?)。 「災後の恋」の最終回の実物は確認ができないが、内容から推測すると「海辺の村」(一三)まで掲載されていたと思われる。また、連載中に欠号は以下のとおりである。「紅蓮」(七)、 「バラック」(九、一〇)、 「不意の縁談」(一一)、 「道行」(一、九、一四、一九)、 「異郷の空」(二、四)、 「海辺の村」(五、一一、一三?)。

〔10〕 前掲の注6と同じ。

〔11〕 『現代全集』版「東京」の新しく書き加えられた「光明」(一)に「海野の家の焼跡」という箇所があり、それに対応する「災後の恋」(一九)では「花枝の家の焼跡」ではなく、なぜか「花野の家

の焼跡」となっている。単純な編集のミスというよりも、恐らく大正一二年に「東京」第三部を「朝日新聞」に連載しながら、同時に「京城日報」に連載していた「災後の恋」の震災後の内容とのつながりを強く意識していたと思われる。

〔12〕「東京」の第四部「建設篇」は戦後に『東宝』六号（東宝出版社、一九四六年七月）から一〇号（東宝出版社、一九四七年三月）までに全五回連載された。挿絵は一回目は福山義夫が、二回目から五回目までは宮田重雄が担当している。

第4章 「京城日報」における芥川龍之介の「提灯文」

をめぐって——宮崎光男との親交を中心に

第一節 芥川に「紹介文」を書かせる男

この章では外地の新聞に掲載されていた芥川の新資料を手掛かりにして、これまでの芥川研究において顧みられることのなかった宮崎光男という人物に焦点を当てる。

「京城日報」には芥川龍之介という名前で書かれている文章が二編見当たる。夏に対する感想を淡々と綴った「夏の感覚」（一九二五年七月一五日）という随筆と、芥川が「京城日報」に小説を寄せる友人のために書いた「紹介文」が掲載されているのである。両方共に今までの芥川龍之介研究の中でも知られていない資料である。特に、後者の「紹介文」はこれまであまり注目されてこなかった芥川の人脈に関する文章で、本稿ではこの「紹介文」に焦点を当てたい。

山中峯太郎の「愛別の十字路」の掲載が終わる頃の一九二六（大正十五年）七月二四日の夕刊には「新作小説連載予告」（以下、「予告」と略す）が載っている。宮崎光男作の「途上」という題名で、挿絵は梅津星耕が担当している。「予告」には「途上」を「新進作家会心の力作」と紹介しながら、その「作者と親交のある芥川龍之

介」の紹介文が「予告」と同時に掲載されている。「本編の作者のために」と付された紹介文で、芥川は次のように述べている。

本編の作者宮崎光男氏は私の年来の友である。氏は創作欲を蔵しつゝ、東京日日新聞記者としての十年間を送った。その間日日紙に、松浦貧郎といふ変名で、朝鮮を題材とした「沼の彼方」といふ一編を連載したことのある以外、氏が創作をものしたのを見ない。従つて、今、どういふ傾向のものを書かうとするか、それを詳にし得ないけれども、とにかく、氏の筆力は信頼するに足ると思ふ。友のために一言する。

「京城日報」に掲載された以上の紹介文は芥川が自殺するちょうど一年前に書かれたものである。紹介文の中には「京城日報」に新しく連載され始める小説について、作者宮崎光男の言葉の代りに芥川の紹介文が先に掲載される。宮崎の自分の作品についての「作者の言葉」が「京城日報」に掲載されるのはその三日後の七月二七日の紙面である。

作者は年少時代の数年間を、この京城で呼吸した。京城は作者にとつて、甘き感情の都である。その都の本紙に、創作「途上」の筆を進めることは、作者の大いなる欣幸であらねばならぬ。（中略）作者はたゞ一言したい。作者の描出せんとするものは「筋」ではない。「人間」である。「筋」の中に「人

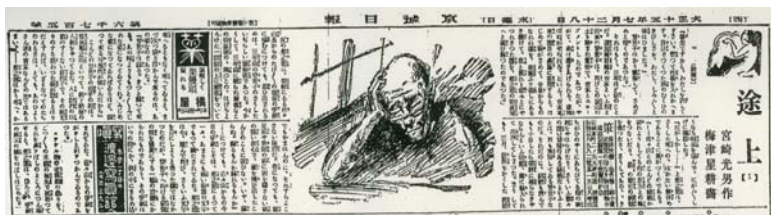


図 13 宮崎光男「途上」第1回

間」を発見するのではなくて「人間」によつて起こる「筋」を見、かつ運ぶのである。「筋」のための筋は遠慮なく閑却し去りたいこれが作者の態度である。

朝鮮でも生活した経験があるという作者の宮崎光男は今回「京城日報」に寄せた「途上」について、「筋」ではなく「人間」を描きたいと強調している。その「人間」を描くことによつて「筋」も描けると言っているのである。このような意図から創作された「途上」の主人公は須美子という「純真無垢、大理石像の如き一少女」である。「淫逸なその姉の出走による身代りとなつて朝鮮に嫁した」須美子だが、「間もなく、その結婚生活に破綻を来して帰国更に、東京へと嫁ぎ直すことになる。しかし、「また破鏡の嘆を見て、遂には彼女は九州の一都市に遊女としてうく嘆はしき一夜々送らなければならぬ身」になるなど、彼女の波瀾万丈な人生を描いた小説である。しかし、九月二十九日の五一回目

の連載を最後に、「途上」の連載は中断になる。一〇月三日の紙面の小説欄には小さく「小説「途上」作者病気に付休載」とあり、その二日後の一〇月五日の紙面には次回小説に関する短い予告文

が掲載されているのみである。

その連載中止の理由は不明であるが、本稿ではこうような小説を「京城日報」に寄せた宮崎光男という人物に注目したい。宮崎光男という名前は芥川全集でも確認できない、あまり馴染みのない人物のように見える。しかし、宮崎の略歴を覗いてみると、芥川との接点が垣間見えてくる。では、このように当時の文壇の大家であった芥川に、朝鮮の新聞に自分の小説の紹介文まで書かせた宮崎光男という人物は何者であったのか、また芥川とはどのような付き合いをしていたのだろうか。このような点に着目しながら、戦後になつて宮崎が「芥川龍之介と菊池寛」（以下「芥川」と略す）〔注1〕という文章を寄せる背景にも照射しながら、最終的には「京城日報」に掲載された芥川の推薦文の意味を明らかにしてみたい。

第二節 宮崎光男という人物とその創作活動

前述したように宮崎光男という人物に関する情報は、芥川龍之介の全集などにはほとんど見当たらない。しかし、新聞記者であった宮崎についての履歴は、復刻版『新聞人名辞典 全三巻』（以下『新聞人名』と略す）〔注2〕などに詳しく記されている。それによると、宮崎光男は一八九五（明28）年八月二〇日、佐賀県の東松浦郡唐津に有浦生まれの人である。別名は北村豊太郎、松浦貧郎。どのような理由で朝鮮に渡ったのか詳細は不明だが、一九一三（大

2)年三月に京城にある善隣商業学校を卒業している。その後は、朝鮮銀行、日本電報通信社、福岡日日新聞社、實業之世界を経て、一九一六(大5)年九月に東京日日新聞社会部に入る。一九二六(大15)年一月には読売新聞整理部に移り、一九三〇(昭5)年の新愛知新聞社を経て、一九三一(昭6)年十二月に再び読売新聞社に戻って一九四五(昭20)年一〇月の退職まで勤める。

このような宮崎の創作はそれほど多くはない。宮崎は前述したように「松浦貧郎」や「北村豊太郎」というペンネームで創作活動を行った。管見のところ、宮崎の一番早い時期の作品としては前記の「沼の彼方」という四五回分の小説がある。一九一九(大8)年六月六日から同年七月二七日まで「松浦貧郎」というペンネームで「東京日日新聞」に連載された。そのあらすじは次のようである。朝鮮の銀行に勤めている野智雄蔵はアメリカ出身の未亡人のマリアと組んで、銀行のお金を騙しとる。そのお金でマリアは

ネットピア

朝鮮に「理想郷」の町を作ろうとする。アメリカ領事スコットの協力で、「成陽」という町に本拠地を新築し、ハンゲルの宣言書まで書いて発表する。ある日、村の女性(閔)が日本人憲兵に無惨に殺されたことをきっかけに、「人格尊重、憲兵制度反対、精神的独立及び政治的独立」を掲げながら、宣伝のため朝鮮の各地に人を派遣する。しかし、派遣された朝鮮人が憲兵に殺された際、死体の手帳や紙幣の束からその正体が知られたマリアたちは危機に迫る。いよいよマリアたちの本拠地に押し迫ってきた憲兵を後

に、「半島の人々の永遠の幸福を祈りながら、アメリカに向かう場面で話は終わる。

このよう内容から、作品が発表された同じ年の三月に朝鮮半島で起きた全国的な民衆の独立運動を連想させる。作品の最後にマリアたちがアメリカに逃げた「その後一ヶ月に渡って各地に大動が続いた。そしてそれから一年経って、民衆政治が、この半島の人々の上に□□つた」とあるように、三・一独立運動を背景に描いていると思われる。前記の宮崎の履歴からもわかるように、朝鮮銀行でも働いた経験のある宮崎は朝鮮での実生活から得た材料を基に創作を行っていたと思われる。しかし、このような内容の作品に対する反応や掲載が可能になったことに対してはまだ定かではない。

その後ほとんど創作活動を行っていなかった宮崎の文章が再びメディアに登場するのは、関東大震災後の『文藝春秋』の紙面上であった。震災の二ヶ月後の一九二三(大12)年一月号の『文藝春秋』には、「震災文章」という特集が生まれ芥川龍之介、菊池寛のような作家たちと共に、宮崎光男の名前が見える。「反逆者の片影Ⅱ大杉君を偲ぶⅡ」というタイトルの文章で震災の際に殺害された大杉栄との付き合いを追憶している。そこで宮崎が大杉と初めて出会ったのは「野依秀一の社に録を食んでいた頃」であったという。つまり、宮崎が実業之世界社に勤めていた時から大杉が亡くなるまでの交流が綴られてある。

後に宮崎は『文藝春秋』の原稿について前記の「芥川」で、菊

池寛から進められて『文藝春秋』に文章を寄せたと述懐している。その際「文藝春秋清規」にもあるように「いかなる大家の原稿といえども三枚を超ゆべからず」ことや、投稿の「目的が小遣い銭かせぎであつてはならないこと」にも関わらず、九枚を書いて文藝春秋社に送つて、そのまま掲載されたと述べている。宮崎が「芥川」を『文藝春秋』に載せたのが、震災の翌年で「震災一周記念号」であつたと間違つて記憶していても、「震災文章」の他の執筆者たちよりも量的に目立つ宮崎の文章から、宮崎が述べているように菊池寛ともただならぬ付き合いをしていたと思われる。前述の文章を『文藝春秋』に投稿して以来、宮崎の創作活動が見られるのは三年後の「外地」の朝鮮で発行されていた「京城日報」の紙面からであつた。前述のように一九二六（大15）年七月二十八日から同年一〇月一日まで全五三回連載された後、途中連載が中断になる。

昭和になつてから再び宮崎は「北村豊太郎」というペンネームで短編小説を発表している。一九二七（昭2）年一月二一日の「読売新聞」には「生きた小説」という角書きの「鋸と金槌」という一回読み切りの小説が掲載されている。舞台は「〇県の町」で旅館兼料理屋の「さつき」の主人俊五郎とその妻お力は店の経営難に苦しんでいた。大晦日まで借金などで二万円が必要な時に、東京からお金持ちの若主人がやってくる。時折東京にお芝居に行つていた際知り合いになつたお力に会いにきたのである。翌日の朝まで接待をしていたお力の所に、俊五郎は鋸と金槌を持って現

れる。女中から頼まれて戸袋を直しに行つたのだが、その姿に驚いた若主人はつい二万円を払ってくれると言つてしまう。俊五郎は鋸と金槌に感謝したという滑稽な内容である。

実際、「鋸と金槌」が「読売新聞」に掲載される三ヶ月前の一九二七（昭2）年八月の『文藝春秋』に載せられた「盛夏の死生譚」という文章で、宮崎は当時の生活について次のように述べている。「群馬の下仁田町に、一家を挙げて落ち延び」ていた時、「妻は芸妓に出てゐて、味噌汁を摺るのは僕の役目といふ、そんなにまで自分自身の實際生活力を失つてゐた」と回想している。これからわかるように、小説の背景になつている「〇県の町」は群馬県の下仁田町で、当時の生活を題材にしたまさに「生きた小説」である。

またその翌年の一九二八（昭3）年一月の『文藝春秋』には「女教師殺し」という短編小説も寄せている。「西九州の〇県〇郡〇村」の近くにある炭坑で坑夫として働いている岡添源八郎は数年前に放蕩で全財産を失い、家に火まで放つて投獄された経験のある人物である。失われた財産と名誉を取り戻したく、坑夫になつた岡添にはお澄という五つ年下の恋人がいた。結婚まで約束していた二人は、お澄の両親の反対にぶつかるとある夜、朝鮮に逃げた覚悟で源八郎はトンネルでお澄を待っていたが、約束の時間が過ぎてもお澄は来ない。その時たまたまトンネルを通り過ぎていた女教師を源八郎は殺害してしまふ。その三〇分後お澄は約束の場所に現れるが、もう取り返しつかないことになり、犯行の五

日後に源八郎は警察に捕まれることになったという物語である。前記のように「西九州の〆県〆郡〆村」が宮崎の生まれ故郷の佐賀県の東松浦郡唐津在浦であることがわかる。このように主に新聞記者として働きながら、二つのペンネームで創作活動をしてきた宮崎は身の回りの自分の実生活から得た題材を作品に反映している。では、次に上記のような履歴を持つ宮崎光男と作家の芥川龍之介とはどのような付き合いをしていたのか考えてみよう。

第三節 創作と金銭をめぐる交流

宮崎がいつから芥川と交流し始めたのかは定かではない。が、芥川の死の直後に宮崎の書いた「死直前の芥川君」（以下「死直前」と略す）〔注3〕で「僕と芥川君とは、十年この方の交友である。」と述べられている。また、「芥川」でも「この二人（注―芥川龍之介と菊池寛。注は厳、以下同）は、わずかに相前後して親しくなった私の亡友で、いま生きていれば、交遊三十幾年ということになる。二人があとで『文豪』と呼ばれるようになったことなどは、私らに、そう大した関係はない。どちらも『新思潮』の卵として、まだ世間に売り出していなかった頃からの、へらはず口をたゝき合う友で」あったと回想していることから推測すると、おそらく宮崎が東京日日新聞社に入る一九一六（大5）年あたりから二人の付き合いが始まったと思われる。

その後の宮崎と芥川との親交の様子は、前述したように全集に

も宮崎に関する書簡などの資料が収録されておらず定かではない。しかし、一方的ではあるが、二人の友情を窺えるようなエピソードを宮崎は「芥川」に綴っている。その中で興味深いのは、「『日本の女』の由来と『偷盗』の横行」である。「日本の女」は一九二五（大14）年四月、五月号の『婦人画報』に二回に渡って発表されたもので、二冊の洋書についての紹介が書かれてある。この文章が発表されたきっかけについて「芥川」には、お金に窮していた宮崎が芥川のところを駆けつけて、事情を説明した後、「何か談話をしてもらって、私がそれを筆記して、芥川に筆を入れてもらつたうえで、一枚十円見当で『婦人画報』に売り込」んだということが述べられている。つまり、宮崎自身の私事の理由で芥川に原稿を書かせ、「日本の女」の原稿料をもらったことになる。それに対して芥川は、こうした宮崎の身勝手な要求にすんなりと応じながら、宮崎を「世の中に出してくれた恩人」と言ったという。同じ文章によれば、芥川は「そうさ、恩人でなくて何だ。あのとき君が、有名でなかつた僕の小説（『偷盗』のことだ）を、広く世間一般に読まれる新聞というものに、はじめて拾いあげて載せてくれたからこそ、僕というものゝ存在が拡大されて行つたんじゃないか。あの御恩は一生わすれやしないよ。」と、宮崎に対して感謝の気持ちを表したという。

しかし、果して「偷盗」のことであつたかは疑問である。「偷盗」は周知のとおり、一九一四（大3）年四月と七月発行の『中央公論』に二回に渡って掲載された作品である。「芥川」で語られ

ているように、『中央公論』は「広く世間一般に読まれる新聞」ではない。「芥川」における「広く世間一般に読まれる新聞」に「はじめて拾いあげて」という表現に相応する背景にある「僕の小説」とは、「偷盗」ではなく、「戯作三昧」ではないだろうか。「戯作三昧」は芥川の小説として初めて「大阪毎日新聞」夕刊に一九一七年一〇月二〇日から一月四日まで連載された。その連載時宮崎は東京日日新聞社の社員であった。

このように芥川龍之介と宮崎光男との付き合いは、金銭的な問題についてもすんなり聞いてくれる、仲の良い間柄であったと思われる。一九一六（大5）年ごろから始まった親交は芥川が死ぬ直前まで続いた。前記の「死直前」でも最期に面会した時の芥川との思い出が綴られてある。その中で、宮崎は「京城日報」に小説を寄せた当時の話と共に、小説が途中で中断になった理由を次のように述べている。

「ぢや僕（注―芥川）は、君（注―宮崎）にすつかり済まないことをしてしまつたよ。許してくれ給へ。」

「え？」

僕は訳がわからなかつた。

「それ、去年のその頃さ、京城の新聞に小説を書くことになつたから、僕の提灯文があれば一層都合がいゝつて、君がさういつてよこしたことがあつたぢやないか」

「うむあれか、あの駄小説か。ハ、ハ、ハ、ハ、」

僕は、今考へれば欠点だらけでしかも、不穩味が祟つて中絶したその小説のことが、むしろをかしかつた。（それによつて、兎に角も、下仁田生活の後期三ヶ月ほどを糊したことは、猶一層をかしかつたかも知れない。）が、その稿料の出鱈目な遅れ方から、僕と妻との間が真暗闇になりく／＼した深刻さを思ひ出すと、笑ひ沙汰などではない。かう書いてゐる今でもひんやりとして慄えるのを覚える

「でも、それほど君の生活を支配しつゝあつた小説に、僕のヅボラから、ウンと提灯を持たなかつたことは、僕として友達甲斐のないことだつたよ。失敬々々。がしかし君も、君の生活的事情について僕に詳しく報ずるところのなかつたのは、ちよつと手落ちだな。」

芥川君は、僕がそれについて何も思つてゐはしないのに、いつまでもこだわつてゐるのだつた。がしかし僕は、そこに動く芥川君の友情のこまかさを思ふと、涙ぐましいうれしさと感謝とを感じた。

以上の文章からも、宮崎と芥川がかなり親密な関係であつたことが窺える。では、なぜこれまで芥川の全集や研究書などに宮崎の名前はなかつたのだろうか。ただ、芥川の全集や研究書などに宮崎に関する書簡などの具体的な資料が存在しなかつたためだろうか。次節ではこのような点について若干の考察を加えたい。

第四節 戦後に人脈を点す「提灯文」

これまで見てきた芥川と宮崎との親交に関する記述が戦後全然なかったわけではない。『読売新聞「100年史」』（読売新聞社、一九七六年一月二日）には、読売新聞の号数が一万八千号を迎えた一九二七（昭二）年に関する記述で芥川の自殺の記事と共に、前記の宮崎の「死直前」を取り上げている。しかし、それ以後の読売新聞社の社史には「死直前」の内容は再び記されることはなかった。

ここで前記の宮崎が戦後に書いた「芥川」という文章にもう一度戻ってみよう。この文章の冒頭の「前がき」で宮崎は次のように文を始める。

日本は人情の国、日本人は人情の人種といわれ、思われて来た。それはたしかに美しかった。ただ度がすぎて、おせっかいになるのが困りものだった。それさえのけたら、人情は深いほどよいにきまつている。戦争に負けて、四等国か五等国かになり下つたとたんに、この日本から、人情がケシ飛んでしまつたといわれる。それではいけない。国は小さくなつても、いや、小さくなつたからこそ、まず、人情で団結して行きたい。大邸宅の一家と棟割長屋の一家との、どちらに人情があるかを考えればわかることだ。

この「前がき」で宮崎は「人情」の国であった日本が戦後になつ

てもその「人情」を強く貫くことが大事であると述べている。続けて宮崎は自分が社会部の記者であったと述べながら、次のように加えている。

仕事の性質上、どんなにか非人情に見える仕事もやつて来たであろう。心の中ではおがみながら、社会国家のために——というので、目をつぶつて書いたことが、かず々とあつたものだ。それでこれは、その罪ほろぼしというわけでもないが、いくらかはその心もちを兼ねあいに、老來の涙もろさをもつてして、人情の美しさを書いてみたい意欲の、その一編である。

これからも推測できるように、実は宮崎は戦後、戦争責任で公職追放されていた身分であった。具体的にはどのような罪名で公職追放されたのかはまだ不明であるが、戦時中読売新聞社の編集次長などを歴任していたなど、戦争協力的な記事などを執筆していたと思われる。このような宮崎がその公職追放から解除になるのが、戦後ほぼ五年が過ぎた一九五〇（昭25）年一月一三日であった。宮崎をも含めて解放解除は一万九〇人であった。「芥川」という文章は宮崎がこのような公職追放から解除されてから間もなく『文藝春秋』に発表したものであったのである。宮崎がその文章の中で述べているように、自分の戦時中の「罪ほろぼし」という側面と共に、二人の大家との友情を綴りながら、戦時中の戦争責

任に対する自己弁明のようにも読める。そのためか戦後書かれた「芥川」という文章の内容はあまり注目されず、芥川研究でも宮崎光男という人名は見当たらない存在になったのかも知れない。その際、戦前外地の「京城日報」に宮崎という友人の為に直接書いた「提灯文」は、二人のただならぬ交流を後付してくれる貴重な資料になると思われる。このようにこれまでの日本文学史の中から抜け落ちていた芥川の伝記情報と、作家の宮崎光男をめぐる情報を提供することによって、「日本文学史」の新たな全体像を描くことができたと思われる。

注

- 〔1〕 『文藝春秋』所収、一九五〇年十一月
- 〔2〕 日本図書センター、一九八八年二月
- 〔3〕 「読売新聞」一九二七年七月二六〜二八日／全三回

第5章 菊池寛たちの昭和五年の朝鮮訪問をめぐる

て——講演会で愚痴をこぼす文学者

第一節 「スピード飛行講演の旅」に出る菊池寛たち

一九三〇（昭五）年九月一日、菊池寛を先頭に、直木三十五、横光利一、佐々木茂索、池谷信三郎の五人〔注一〕を乗せた旅客機が京城の汝矣島飛行場に着いた。南満洲鉄道の招待で、麻雀会と講演行脚の旅の途中、朝鮮を訪ね、講演会を開くことになったのである。講演会の前日の「京城日報」の夕刊の紙面には「文壇の重鎮五氏の文芸大講演会」という広告の記事が次のように掲載されている。

講演者一行は明十五日午後五時半頃旅客飛行機で汝矣島着直ちに本社の講演会に臨む予定ですが、天候その他の故障の場合には到着当日に延期いたします。明夜の講演会は煙花を以てお報らせ致しますから煙花の合図があつたら予定通りの開催と御承知下さい。（一九三〇年九月一日）

九月一五日午前一〇時四五分大阪から出発した菊池寛一行が実際に京城に着いたのは、予定した時間より二〇分遅い午後五時五

〇分のことであった。「京城日報」の九月一六日の紙面では菊池寛たちの飛行機から降り立った写真と共に、京城入りの記事や講演会の様子が大きく報じられている。記事によると、菊池寛一行が汝矣島飛行場に着く前から飛行場には既に京城日報社の社員や文芸関係者などが集まり「身動きならぬ雑踏の□」であった。そこで飛行機から菊池寛たちが下り立つと、「握手攻め、歓声、拍手の渦を巻き起」した。早速、空輸会社の事務室に立ち寄って、京城日報社の桑原主筆などと挨拶を取り交わし、徳口飛行場長から旅の感想を聞かれた菊池寛は「温突のけむりはやがて山かひの夕もやとなりてくるゝ山々」と書いたという。数台の車に乗り分けて朝鮮ホテルに移動した菊池寛たちは少し休憩を取ってから講演会の会場である京城日報社の来青閣に移動した。午後七時半の開始予定だったが、既に午後の五時頃から「熱心な文芸愛好者の群がぞくぞくと殺到しましたゝ間に千数百名を収容する会場を埋めつくして立錐の余地もない」大盛況であった。講演開始の時間になり、先ず京城日報社の主筆である桑原が開会の辞を述べた後、同社の寺田社会部長の紹介で演壇に上がったのは佐々木茂索であった。「曾遊朝鮮」という演題で「ユーモアに満ちた漫談」であった。続いて登壇したのは「文壇の変り種」の池谷信三郎であった。「自分は単なるつなぎ」だと自己紹介しながら、二〇分くらい「断片的に近代の諸相」について述べた。次に拍手の中で登壇したのは横光利一で、八年前に朝鮮で亡くなった父のことを話し、聴衆を涙ぐませたという。こうした雰囲気の中、続いて登壇した

のは「科学小説の提唱」という題名の講演を行った直木三十五であった。「次の時代は科学の時代だ」



図 14 菊池寛たちの到着と講演会

と主張しながら、小説もまた「科学小説の時代である」と各方面の例を引いて小説の進むべき道を示した。最後に演壇に上がったのは「満場の熱狂的拍手に迎へられ」た菊池寛であった。「ユーモアに富んだ漫談に聴衆を喜ばせ」ながら、「文芸の鑑賞と創作」という題名の講演を行った。「人間が自然を見る眼を養ふ必要」を強調しながら、「更に人生を熟視することは人生を豊かに美しくするものである」と結論づけていた。

る。約一時間に渡る菊池寛の講演を最後に、夜九時五〇分ころ閉会した。その後、京城日報社側の招待宴で明日館に場所を移した菊池寛たちは、妓生の舞を楽しみ一時過ぎに解散する。解散後、

一同はホテルに向かうが、菊池寛と池谷信三郎は朝鮮の麻雀会の招待で明治旅館の麻雀会に出席した。翌日一六日の午前六時半ホテルを出た菊池寛たちは、汝矣島飛行場に向かうが、生憎の霧のため予定した時間より一時間遅れて飛行機に搭乗し、京城日報社員たちの見送りの中、短い一泊二日間の京城滞在を終えて、午前八時二〇分大連に向かう。

京城を離れて大連に着いた五人は満洲日報社の歓迎を受け、一日午後六時に星ヶ浦ヤマトホテルにて開催された懇談会に参加した。懇談会には満鉄の社員や、「満洲日報」の編集長と記者などが参加し、夜八時くらいに解散した。その翌日の一七日午後四時二〇分からは満鉄社員倶楽部にて講演会が行われ、菊池は「鑑賞と創作」、直木は「科学小説」、横光は「無題」の題名で講演を行った。その後はハルビンなどを視察し、二四日一時五〇分に周水子飛行場から帰京の途についていた。このような五人の満洲滞在の一挙手一投足は「満洲日報」の紙面に記事と投稿文の形で報じられていた。その中でも探偵小説作家として知られた大庭武年は菊池寛一行と同行した経験を基に数回に渡り「満洲日報」に文章を寄せている。大庭は周水子飛行場に一行を迎えに行った時の感想を「私たちは今や日本文壇の最も重要な一部分を、完全に我が土地にキヤツチし得たのだ。私は遠に喜悅の情を禁ずることが出来なかつた。」と述懐している〔注2〕。一九〇四年生まれでちやうど一九三〇年一〇月号の『新青年』に「13号室の殺人」で文壇デビューすることになる若い作家の感想としては率直のように

は見えるが、この感想から内地と外地文壇の上下関係を垣間見せられると言っても過言ではない。

このような文壇の上下関係は京城日報社側が菊池寛たちの来城について「いま黎明期にあるわが朝鮮文芸史上に特別大書さるべきものであり今後の進展に炬火をかざすものである。」とか「黎明期の朝鮮文芸に呼びかけんと」すると宣伝したこととも相通じると思われる。

では、次に「のんきな満洲の旅」と言われた菊池寛たちの来城する前の当時の文壇の事件を探りながら、京城や満洲で講演した内容にも触れながら、その意味についても考えてみたい。最後には菊池寛一行の京城訪問後に、「京城日報」にどのような作品が連載され、どのように宣伝されたのかについても視野に入れる。

第二節 税金滞納と小説のモデル問題

京城で講演を行った菊池寛たちの様子は、彼らを招待した京城日报社の「京城日報」だけではなく、『朝鮮及満洲』という雑誌の紙面にも掲載されている。一九三〇（昭五）年一〇月号には、「一記者」署名の「小説家の講演」と、菊池寛の京城での講演内容をまとめた「鑑賞と創作」、それから直木三十五の「科学小説の提唱」が収録されている。菊池寛と直木三十五の講演内容は次節で考察することにして、ここでは「小説家の講演」の内容を覗いてみよう。タイトルからも推測できるように、菊池寛たちの京城

での講演について取材した記録となっている。そこで講演会の入場者については、「固より青年が多かった、文学好き否小説好きな若い女も相当に居た、鮮人の若い男女も可なり居た、以て如何に京城の若い男女間に文学——否小説熱が高いかが窺はれる」と書かれている。講演の観客に若い人が多いと述べながら、そこから小説に対する若者たちの人気を指摘している。続けて、前半の三人、佐々木茂索、池谷信三郎、横光利一の講演については、「全く雄弁会の学生演説でも聞いて居るやうな感じで、聴衆もたゞ笑って、身ぶりや話しぶりを聞いて居ると云ふ風であつた」と酷評している。一方、後半の直木三十五と菊池寛の講演については「初めて講演らしい講演」が聞けたと評している。特に、菊池寛の場合については講演の内容だけではなく、その外見についても詳細に描写されている。

写真でお馴染の通りの御面相で、蓬髪をモガ／＼させ強度に光つてゐる眼鏡は低い小さな鼻から滑べり落ちさうで、小さな眼に食つゝけるやうにしてゐる、太つた低い体軀をよれ／＼になつた袴と単衣羽織で無造作に包である、丁度書齋で原稿を書きさしにして出て来たと思ふ格好で、此点は如何にも文士らしい風格をしてゐる、此醜男が、盛に甘つたるい恋愛小説を書くのかと思ふと全く人は見かけによらぬものだと思はしめた(三五頁)

次いで講演の内容を紹介した後は、「氏は雑弁では無いが、しみぐくとした春雨のやうな調子で□々と説いて尽きない趣がある」と述べながら、最後は「此の調子で女も口説いて小説の□料を製造するのだなあと思はしめた」と皮肉った文章で締めくくられている。

このような『朝鮮及満洲』掲載の菊池寛に対する批判的な論調は、当時の菊池寛の著作権と所得税をめぐる一連の問題とも無関係ではないと思われる。京城での講演会に臨む一ヶ月前の八月一日の「朝日新聞」では、菊池寛の税金滞納の記事が大きく報道されている。一九二七(昭二)年から滞納した税金があり、そのため菊池寛の作品の著作権を競売にかけるとのことであった。作品の著作権だけではなく、菊池寛の競馬用の馬までが差し押さえになりそうな羽目になってから、やっと税金の完納を約束した事は一段落を着くように見えた。しかし、そこで小説のモデル問題が起きたのである。事の始めは、『婦人公論』の一九三〇(昭五)年八月号に収録されている広津和郎の小説「女給」のヒロインの小夜子を誘惑する吉水薫のモデルがどうみても菊池寛しかいなかったことである。このことに対して菊池寛は「僕の見た彼女」という抗議文を送るが、それを中央公論社側は「僕と小夜子との関係」と改題して次号の広告文に載せる。それに激怒した菊池寛は直接中央公論社に駆けつけ、『婦人公論』の編集人の頭部を殴るに至った。これで中央公論社側と菊池寛はお互いに告訴しあうことになるが、菊池寛を始め、「文芸家協会」などでは声明が発表

され、抗議文を勝手に改竄したという「著作権侵害問題」として新しい局面を迎える。結局、「女給」の著者、広津和郎の仲裁でお互いに告訴を取り下げ、小説のモデル問題は決着がつく。

このような内地文壇の騒動に関する情報は外地の朝鮮でも報道され、菊池寛が朝鮮に来る前に発行された『朝鮮及満洲』の一九三〇(昭五)年九月号の「秋窓漫語」で東邦生は、当時文壇を騒がした谷崎潤一郎と佐藤春夫のいわゆる「細君譲渡事件」と共に、菊池寛のモデル問題についても次のように書いている。

世の中は小説の実演を行ったとして話題にして居る、日本の一流小説家も、此□の程度の男が多いと思へば全く情けない、是れでも大正昭和を通じての一流小説家と言はれるのであるから、小説家と云ふものは人格的には全く下柄屋にごろくくして居る不良青年や裏長屋の車夫馬丁と選ぶ所無しと云ふのだからお話にならぬ、こんな男でも小説で有名になると人格的にまで偉いやうに思はれて青年男女から崇拜せられるのだから全くたまらぬ、女の小説家も婦人道德から□たら全くカフェーの女給に□をかけたやうな者が多い、日本の小説家は全く□人化した、原阿佐緒と石原純との愛欲の葛藤離合を盛に宣伝されて居る、なぞも、是れも日本現代の世相の一面を物語るものであるとして心有る者は、□□している。(一頁、傍点は原文のまま)

このように当時の文壇で話題になった文学者たちの情報が、一部ではかなり批判的に朝鮮でも報道または消費されていたわけである。そのため「のんきな満州の旅」であったはずの旅行が、税金問題や小説のモデル問題などで疲れ果てた心身を癒すための満鮮旅行になったのかもしれない。では、東京でのいざこざを後にし、京城に着いた菊池寛はどのような内容の講演を行ったのだろうか。次節ではその中身について探ってみる。

第三節 多様なバージョンの「文芸の鑑賞と創作」

菊池寛たちが京城で行った講演の内容については、彼らが京城を去り、満洲に向かった四日後の九月二〇日の「京城日報」の紙面に、直木三十五の「科学小説の提唱」が三〇日まで五回に渡って掲載される〔注3〕。その後を次いで、菊池寛の「文芸の鑑賞と創作」という講演の内容は翌月の一〇月三日から八日まで四回に渡って掲載されている〔注4〕。この二つの講演の内容は前述したように「京城日報」だけではなく、同年一〇月五日発行の『朝鮮及満洲』にも掲載されている。しかし、「京城日報」の方が数回に渡って掲載されている反面、『朝鮮及満洲』の方は一回読み切りとなっている。また、菊池寛の講演の場合は、そのタイトルが「文芸の鑑賞と創作」ではなく「鑑賞と創作」となっており、その内容の違いが少なくない。まず、『朝鮮及満洲』の方は講演会

に参加した記者の講演後記の形式で綴られているが、「京城日報」の方は講演者であった菊池寛の投稿文となっている。他にも分量的にも『朝鮮及満洲』の方が一回読み切りのため、「京城日報」の場合より省略されたり、記者のことで書き直されたりしている。例えば、道徳に関して『朝鮮及満洲』では、「しかし、余り新しい道をつくると選んで行く」と有島武郎のやうに却つて古溝に落込んで終ふといふやうなこともある」と具体的に「有島武郎」を例に挙げているが、この箇所が「京城日報」には見当たらない。可能性としては、実際講演の際には「有島武郎」を例に挙げたが、「京城日報」に掲載される際に何らかの理由で削除された可能性が高い。もしくは、逆に講演には「有島武郎」に関する言及はなかったのに、勝手に記者が書き加えて『朝鮮及満洲』の記事を掲載したのかもしれない。その際、他の菊池寛の講演を参照にして内容を補足した可能性もある。実は、京城で菊池寛が行った「文芸の鑑賞と創作」にはいくつかのバージョンのテキストがある。菊池寛は「講演」〔注5〕という文章の中で、自分の初講演の時の失敗を振り返えり、それが糧になって次の講演は楽にできたと回想しながら、次のように述べている。

自分は、このとき喋べつた要旨を整理したり増補したりして、「文芸と生活」と云ふ題で幾度も講演した。仙台、新潟、岡山、名古屋、大阪、何処へ行つても同じ講演だつた。(中略)
「文芸と生活」の外に「戯曲と小説」とか「わが恋愛観」と

か「文芸上の緒主義」とか五つ六つかは別題があるが、然し多くは「文芸と生活」である。だが、同じ題目でもその時その時に依つて、出来不出来があり話の内容も半分以上違つたりしてゐる。(一二二―一二三頁)

初講演の経験から自信を得て、その後に行つた講演の内容をまとめて以来、大体的場合は「文芸と生活」というタイトルで講演を行つていたのである。しかし、その内容はいつも同じでなく、その都度少なからず変えていたということであつた。

菊池寛が「文芸と生活」という題目で行つたすべての講演の内容を確認することはできないが、『菊池寛全集 第二巻』(文藝春秋、一九九五年一〇月三〇日)からはいくつかのバージョンが確認できる。それを「京城日報」と見比べてみると、「京城日報」の紙面にだけ綴られている内容がある。それは日本での文学を国家が更に保護する必要があると主張するところの最後で、ぽろつと「日本で文士が認められるのは所得税を払はない時だけである。閑話休題……。」と愚痴をこぼしている箇所である。この内容は前述した税金問題を想起させるが、前掲の「講演」で菊池寛が書いているように、それ以降の「文芸と生活」という題名の講演は余り変更しないが、その都度の出来事を講演の内容に取り組んでいることが窺える。

第四節 菊池寛たちの「京城日報」の連載小説

この節では一九三〇(昭五)年の朝鮮訪問以後、「京城日報」に掲載された菊池寛たちの作品について見てみたい。一九三〇(昭五)年のメンバーの中で一番早く「京城日報」に長編小説を寄せたのは直木三十五であつた。直木三十五作、志村立美画の「寛永卅乱れ」という作品が「京城日報」に掲載され始めるのは一九三二(昭七)年五月四日からである。前日の新作の広告には直木三十五の顔写真と簡単な作品の紹介の文章が見えるだけで、作家や画家の言葉は見当たらず簡単にあらずしが書かれていただけである。このように連載され始めた「寛永卅乱れ」は結局一五回が掲載された五月一日を最後に急遽、連載が中断となる。これもまた通常の場合はあるはずの連載中断に対する予告文はなかつた。その理由は定かではないが、全集(『直木三十五全集別巻』示人社、一九九一年七月六日)の年譜には同年五月に、取材のため上海に行つたとされている。上海に行つたこととなんらかの関係があるのだろうか。

第2章で述べたように「上海毎日新聞」にも同年の十一月ごろに「寛永卅乱れ」という同じタイトルの作品が連載されていたことが確認できる。内容は未確認ではあるが、おそらく同じ内容の作品である可能性が高いと思われる。その裏付けとしては「京城日報」と「上海毎日新聞」に連載されていた「寛永卅乱れ」の他にもう一つの「寛永卅乱れ」の存在が確認できる所以である。直木三十五の年譜には前述のように「寛永卅乱れ」という作品名は

見えず、唯一あるのは「神戸又新日報」に「寛正卅乱れ」という作品が一九三二(昭七)年九月二二日から翌年の九月二日まで連載されていたという記述だけである。時期から見ると、「京城日報」に「寛永卅乱れ」の連載が中断された後で、「上海毎日新聞」に「寛永卅乱れ」が連載される二カ月前の時期である。実際に「神戸又新日報」の現物を調べてみた結果、全集の年譜に書いてある「寛正卅乱れ」ではなく、「寛永卅乱れ」であったことが確認できた。「神戸又新日報」の三回分だけを調べた限り、挿絵を描いたのは「京城日報」と同じく志村立美で、内容の違いは見当たらない。ただ、第三回の挿絵が異なるという点と「京城日報」にはなかった「作者の言葉」が前日の広告文に掲載されているという差異が目立つ。

一九三二(昭七)年の直木三十五の作品を皮切りに、一九三四(昭九)年には菊池寛の「生活の虹」(「名古屋新聞」、「台湾日日新報」、「満洲日日新聞」とやや遅れて「小樽新聞」にも連載)が「京城日報」に一三三回連載される(注6)。「京城日報」の紙面にも直木三十五の小説とは違って大々的に宣伝される。次の引用はその広告文である。

文壇の大御所菊池寛氏は、従来東京大阪以外の新聞に長編小説を執筆されたことは無かつたのであります。然るに今回我社の熱誠に動かされて初めて筆を執らるゝことを 快諾されました。即ち昭和九年一月元旦より本紙上に長編小説「生

活の虹」が掲載されることになりました。(中略)特にこの新作品に見逃すべからざる点は、従来ブルジョアの生活を描き口した作者が、視野を転じて貧しき生活への描写に手を染めたことで、必ず一世を驚かす傑作が生れ出ませう。(中略)地方の新聞紙に書くのは、これが最初である。しかし地方の新聞紙だからと云つて、いゝ加減な作品は書かないつもりである。私は全力を尽くして書くつもりである、現在の混乱せる社会状態に於てブルジョアの青年子女は、どこに生活の虹を求めてゐるか、また貧しき家の子女は、どこに生活の虹を求めてゐるか、その各々の虹が皮肉に中空に交錯するところを描いて見たいと思つてゐる。「待望の傑作小説『生活の虹』」(一九三三年二月九日付)

東京と大阪以外の地方新聞には長編小説を書いたことがないことを大いに宣伝し、京城日报社の文芸部もまたそれを売りにしているのがわかる。こうした広告は引き続き翌年の一九三五(昭10)年の二月から「京城日報」に連載される横光利一の長編作品「天使」(「名古屋新聞」と「台湾日日新報」にも連載)の広告文にも、似た言葉の宣伝文を見ることができるといえる。

横光氏が新聞小説に筆をとることは今回が全く最初のことであり、本紙はこの文壇の惑星の最初の新聞小説を「獲得した」ことを誇ると共に、発表される新作品が半島文壇にフレッシ

ユな衝撃を与へ更にわが国新聞小説界に一新紀元を画するものと信じて疑はないものであります。

右記のような広告文と共に同じ紙面に菊池寛の推薦の言葉が続いて掲載されている。

京城日報の手柄―横光君が長編小説を書くことは非常に意義のあることだ。横光君は昨年あたりから、新聞小説を書きたいといふ気持をもたれてゐたから、相当な抱負も自信もあるに違ひない。京城日報がこの純文学の第一人者に、最初の新聞小説を書かしたことは非常な手柄である。横光君は仕事に對して全力をつくしてかゝる人だから、今度の仕事もさつといふものが出来るに違ひないと思ふ。読者諸君も□□の新聞小説などに求めるやうな、卑俗な興味は、しばらくおいて、横光君の滋味溢れるやうな描写と、その快よい会話のリズムを味はつてゐると、必ず面白い筋が展開されるものだと思つては信じてゐる。（「文壇の驍將新聞小説へ初登場」（一九三五年二月一七日付））

東京・大阪以外の地方新聞には長編小説を初めて書くという菊池寛の言葉と、初めて新聞小説を連載する横光利一のそれとは通じるものがある。他の内地の新聞にどのような広告文が載せられたのかは未確認であるが、菊池寛の次の文章も「京城日報」に掲載

された広告文を裏付けてくれる。

北海道の新聞に僕の連載小説がのると云ふ予告が出たので、駭いて差し止めたが、僕の名で小説を売るなんて、純然たるカタリである。今後喰ふのに困れば、地方新聞にも小説を書かぬとも限らぬが当分は書かない。もし、そんなものが外にも出るやうであつたら知らせてほしい。尚、この事件を知らして下さつた方に、あつく感謝する。（「文藝春秋」編輯記文集（昭和二年）」（『菊池寛全集 第二四卷』文藝春秋、一九九五年八月三〇日））

二人のこうした「京城日報」での作品の掲載と広告の他にも、一九三五（昭10）年には久米正雄の「愛情の感激」という全二回の短編小説が紙面を飾る。そして一九三六（昭11）年の正月には、掲載されるのが二度目の菊池寛の一回読みきりの小説「新婚家庭」が掲載されたのを最後に一九三〇（昭5）年朝鮮を訪問したメンバーたちの作品は「京城日報」から見ることができなくなる。この中で朝鮮を主な舞台にした作品はなく、唯一、横光利一の「天使」には主人公の寺島幹雄と貞子との結婚の場所として描かれているだけであつた。

このように一九三〇年九月に内地作家たちの約一〇日間の朝鮮と満洲の外地旅行は単なる「のんきな満州の旅」ではなかつた。外地のメディアは内地作家の訪問による宣伝記事や講演会の開催

など、商業的な利益を得た。外地作家にとっては、満鉄のような
スポンサーから旅費を得ることができ、外地文人との交流や、自
作の宣伝などができるようになった。また、外地のメディア
アに彼らの作品を掲載するなど菊池寛一行の一九三〇年の「のん
きな満州の旅」はこのような外地のメディアと内地の文人たちの
商業性とその双方向性を如実に見せてくれる旅であった。

注

〔1〕菊池寛一行が京城に着く前日の一四日の「京城日報」の紙面には
「もでる小説『女給』で、問題の渦中にあつた文壇の大御所、菊池
寛氏をはじめ、調停役を一役かつて出た久米正雄氏や直木三十五、
佐々木茂索、池谷信三郎、横光利一の六氏、問題も一落着のひまな
折とし、十五日貸切りで日本空輸送会社旅客機に搭乗、一気に大連
に乗りこむ事になった」とあるが、実際に京城を訪問したのは、久
米正雄を除いた五人であった。「読売新聞」（一九三〇年九月一二
日）には久米正雄について、「大佛次郎氏と共に二十日頃満州に旅
行、菊池氏の一行と同行する」とある。

〔2〕大庭武年「菊池氏一行を迎ふるの記」（「満洲日報」一九三〇年
九月二二日）

〔3〕九月二〇日に第一回目が、二回目から五回目はそれぞれ二一日、
二三日、二七日、三〇日に掲載されている。

〔4〕一〇月三日に一回目が掲載され、五日、七日、八日まで連載され
た。

〔5〕『菊池寛全集 第二四巻』（文藝春秋、一九九五年八月三〇日）
所収

〔6〕『菊池寛全集』（文藝春秋、一九九四年一〇月一五日）と『叢書
第六三巻』（昭和女子大学近代文学研究室、一九九〇年六月五日）
には一九三四年一月一日から「京城日日新聞」に連載と記載されて
いるが、おそらく間違いであろう。しかし、「京城日日新聞」は実
際にソウルで発行されていた新聞で、総督府の「京城日報」、仁川
の「朝鮮毎日新聞」（一九二一年八月一日に「仁川新報」として創
刊）と共に朝鮮三大新聞と呼ばれていた。一九二〇年七月一日に創
刊され一九三一年三月一五日には「朝鮮日日」、一九三六年九月に
は「朝鮮日々新聞」に改名された。後に一九四二年二月に「朝鮮商
工新聞」に統合された。

第6章 「京城日報」における検閲の問題——佐藤春

夫の「律儀者」を中心に

第一節 新聞紙法と「内地」の検閲システム

一九三八（昭13）年一月七日から一日まで「京城日報」の紙面には、タイトルに「創作」と付された「律儀者」という佐藤春夫の短編小説が全三回にわたって連載されている。この作品では戦争に召集されたことを夫に知らせるために上京した妻子と、その二人と偶然出会った主人公とのエピソードが描かれている。このような「律儀者」は最新版の『定本佐藤春夫全集』（臨川書店、一九九八年四月、二〇〇一年九月、全三八巻）などにも収録されていないが、水沢不二夫の「佐藤春夫「律儀者」、江戸川乱歩「芋虫」の検閲」（『日本近代文学』第八三集、二〇一〇年一月）から、一九三七（昭12）年十二月二〇日発行の同盟通信社『同盟特信』が初出であったことが明らかになった。また、「律儀者」は翌年の一九三八（昭13）年一月に内務省から発禁処分を受けるが、水沢はその実質的な初出として「高知新聞」を挙げている。掲載時は「京城日報」と同じく一九三八（昭13）年一月七日であった。その際、同じ作品が内地の新聞では検閲により発禁になるが、外地の新聞では掲載が可能になるのはなぜだろうか。また、その内容の違いな

どはあったのだろうか。

本論では以上のような点に注目し、まず内地の検閲システムを概観しながら、佐藤春夫の「律儀者」が多様な新聞や雑誌などどのような掲載され、またいかなる理由で発禁処分を受けたのかを再検討する。その上、同じ作品が外地の検閲システムの中でどのように掲載されていくのかを探りながら、内地と外地の検閲の違いや作品に関する検閲情報の伝達形式がどのように行われていたのかを考えてみたい。

日本の戦前戦中の検閲を考える時に重要な法規は「新聞紙法」と「出版法」の二つがある。そのうち「新聞紙法」は何度かの改正を経て、最終的には一九〇九（明42）年に制定された「新聞紙法」が一九四五（昭20）年まで効力を発揮し、一九四九（昭24）年まで存在した。「新聞紙法」には全部で四五条あり、第一条で新聞紙について「本法ニ於テ新聞紙ト称スルハ一定ノ題号ヲ用キ時期ヲ定メ又ハ六箇月以内ノ期間ニ於テ時期ヲ定メシテ発行スル著作物及定時期以外ニ本著作物ト同一題号ヲ用キテ臨時発行スル著作物ヲ謂フ」と定義づけられている。また、第一条では、発行と同時に「内務省ニ二部、管轄地方官庁、地方裁判所検事局及区裁判所検事局ニ各一部ヲ納ムヘシ」と定められており、全部で五部を納本することが義務付けられていた。納本された新聞紙は内務省の警保局図書課の検閲を受けることになるが、その際、「新聞紙法」の第二三条にはその検閲の結果について「内務大臣ハ新聞紙掲載ノ事項ニシテ安寧秩序ヲ紊シ又ハ風俗ヲ害スルモノト認ム

ルトキハ其ノ発売及頒布ヲ禁止シ必要ノ場合ニ於テハ之ヲ差押フルコトヲ得ノ前項ノ場合ニ於テ内務大臣ハ同一主旨ノ事項ノ掲載ヲ差止ムルコトヲ得」とある。つまり、内務大臣が安寧秩序を乱したり、風俗を害したりすると判断した記事に対しては、発売頒布を禁止し、差押することができたのである。中園裕は前述の「新聞紙法」の第一条について次のように解説している。

検閲の権限は法律的には内務大臣の認定とあるが、実質的には内務省警保局図書課（後に検閲課）が検閲を主管とする部局であり、実際の検閲事務は図書課の職員が担っていた。また新聞紙法が規程する新聞・通信・新聞雑誌は、東京府（後に東京都）が内務省と警視庁であるほかは、地方庁（各府県警察部）に納本されることになっていた。そのため実際の検閲は、各地方庁管下の警察部に所属する警察官（特高課設置後は特高課職員）が実施していたのである。〔注1〕

検閲の権限は法律的には内務大臣にあったが、実質的に検閲を行ったのは図書課の職員と各地方庁管下の警察部の警察官たちであったことが確認できる。このような検閲の組織について中園は更に続けて次のように述べる。

このような組織を維持するためには、図書課が各府県警察部に所属する検閲担当官を管轄するための組織と運用手段

を持ち合わせなければならぬ。また彼ら警察職員の問題意識や知識を向上させるだけの媒体を用意する必要がある。（中略）そのために図書課が講じた一つの対策が、『出版警察報』の発行である。（中略）これら雑誌を通じて、関係当局の職員たちは執務を覚え、出版報道界や学界の出版する著作物の内容を検閲できる学識能力を養ったのである。〔注2〕

このように検閲制度を運用するにあたって内務省では『出版警察報』のような雑誌を作り、それを検閲に携わる職員たちの執務や検閲能力の向上のために使っていた。上記の検閲関係の雑誌の中でもここでは主に一九二八（昭三）年一〇月から一九四四（昭19）年三月まで発行された『出版警察報』（全一四九号）を中心に参考にすることにする。

では、次にこのような検閲が具体的にどのような行われていたのか佐藤春夫の「律儀者」を事例に挙げて考えてみよう。

第二節 佐藤春夫の「律儀者」を事例として

佐藤春夫の「律儀者」に関する先行研究には前記の水沢不二夫の「佐藤春夫「律儀者」、江戸川乱歩「芋虫」の検閲」を見るのみである。前述したように水沢はその初出について「一九三七年十二月二〇日の同盟通信社『同盟特信』。四百字詰原稿用紙換算で十三枚ほどの短編であり、配信先の編集部が別箇に採否を決め

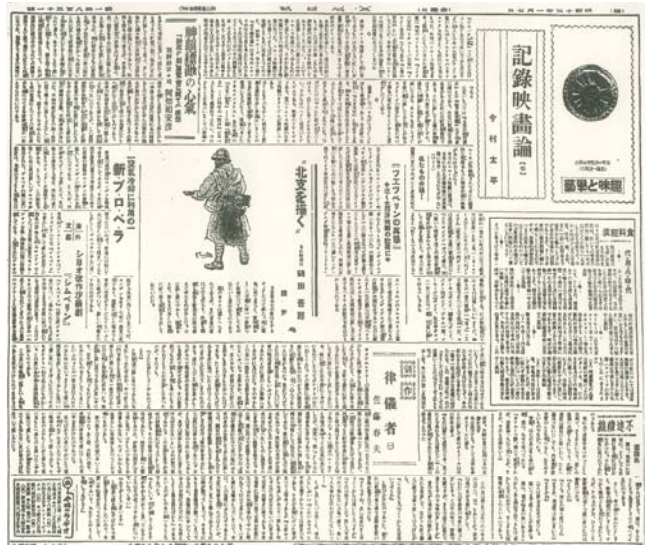


図 15 佐藤春夫「律儀者」第一回

て掲載するものであった。どこかの小新聞か地方紙に載るようなもので、書き流された印象の小品である。」と解説している。続けて「律儀者」が発禁になった理由について次の二点を挙げながら、その検閲基準の変更を指摘している。まず、「ス

トリー展開上で姦通が実行も夢想もされていない」点、また「他人の妻へ恋情を抱くことが、「猥褻表現」の規則を主とした〈風俗壊乱〉ではなく、〈安寧秩序紊乱〉によって発禁となっている」点である。つまり、佐藤春夫の「律儀者」は「あくまで「恋情」の段階でしかなく、〈風俗〉でも〈安寧〉でも従来の発禁基準を満たしていたというわけでもなかった。」のである。論文の最後に水沢は「律儀者」について佐藤春夫がナシヨナリズムへ接近していくにあたってその直接の一因であったと評価しながら、作品が発禁になったのが通常の「猥褻表現」による風俗壊乱ではなく、



図 16 「九州日報」掲載の「律義者」

安寧秩序によるものであったことは、やはり当時の戦時体制に起因すると強調している。

実際に『出版警察報』から佐藤春夫の「律儀者」の発禁に関する記述を探ってみると、一九三八（昭和十三年）一月七日発

行の「高知新聞」（第一一六五〇号、高知市同社発行、一月七日禁止）に関する発禁情報がいち早く記載されている。『出版警察報』（注3）にはその発禁の理由について「「律儀者」ト題スル小説（佐藤春夫署名）ハ夫出征不在中ノ妻ニ対スル恋愛関係ヲ取扱ヒタルモノナルガ時局柄其ノ取材面白カラズ出征将兵ノ後顧ノ憂トナリ延テ皇軍将士ノ士氣ニ悪影響アリト認メラル、ニ因リ禁止。」とある。「律儀者」の発禁の理由は「出征将兵の後顧の憂となり」、「皇軍将士ノ士氣に悪影響」を与えることとされたからであった。先行研究では検閲を受ける最初の段階について、高知県の特高警察からの『電話聴取書』（注4）を元に、発行前日の一月六日の夜、

内務省警保局図書課に電話で問い合わせた結果発禁になったと説明している。『出版警察報』には「律儀者」が掲載された一月七日付の紙面の全発行部数が24,200部で、差押部数計は22,350部、差押率は0.931と記されており、現在高知県立図書館の高知新聞データベースで閲覧できる同日付の紙面には「律儀者」は見当たらない。おそらく検閲を受けた後、作品を削除した版を再印刷したと思われる。このような「高知新聞」の検閲があつてから一週間後の一月一五日には前年の一二月に発行された『同盟特信』（第七二五号、東京市同盟通信社発行、一月二〇日発行、一月一五日禁止）が「高知新聞」と同じ理由で発禁になる。検閲時に問題になった箇所は以下のようになっている。

「(中略)牛島は或る朝ふと戦死者の名のなかで藤田寅之助を見出したらと虞れた。それは彼の安否を憂へるためであつたらうか。それならば寧ろ妹の夫の方をもつと心配してやるのが自然ではないかと牛島は自分に反問して見た。そうして藤田が萬々一戦死するやうな事があつたなら、と空想して牛島は自分がそれを心の底で希望してゐるのではないかと思ひはじめた。飛んでもない。そんな場合には彼の妻女と子供と共に慰安の言葉を忘れてはならないと思つてゐるだけだと自分で辯明して見るが。(中略)あんな田舎女房のそれも年上の者々と自分で打ち消して見るが、牛島が彼女のために盡した行爲を考へて見て、彼女が見るから感じの悪い女であつたら果し

てあれほどの好意を持つて勤務時間にまでおくれるやうな結果にはならなかつたらうと考へつゞけて見ると、牛島はやはり藤田上等兵の生存を呪ふやうな事は決してしてゐないまでも、その妻女に對して特別な心づかひを抱いてゐる事は自ら否定することは出来なかつた。(後略)」

この箇所は、作品の後半で戦場にむかつた藤田上等兵の妻に牛島が恋情を抱いていると自覚するところで、前述した『電話聴取書』にもこれとほぼ同じ内容が記載されており、検閲の最初の段階でこの箇所が問題になつたと思われる。こうして禁止処分を受けた『同盟特信』は全発行部数22部のうち、差押部数計は一部のみになつており、差押率は0.937と記されているが、もともと発行部数が少なかつたせいも、現在実物を閲覧することはできない。他にも東京の山口自転車工場販売部が発行した『販売』（二月七日付第四卷第二号、二月七日削除）という雑誌にも掲載されたところだが、0.995という高い差押率（全発行部数3,258、差押部数計3,247）のためこれもまた現物の閲覧が不可能である。

最後に、内地で発行されたものとして「九州日報」がある。発禁処分は一月二四日になつてゐるが、発行はそれより一週間ぐらい早い一月一七日となつてゐる。これは「高知新聞」と「京城日報」よりも遅く掲載されたことになるが、0.001という非常に低い差押率で、現物を見ることが出来る。「京城日報」の紙面と比較してみると、「京城日報」では三日間にわたつて掲載されたもの

が、「九州日報」では一回読み切りになっている。また「京城日報」と「九州日報」の本文を見比べてみると、大きく二カ所が「九州日報」の本文から削除されていることが確認できる。

●削除①「でもわざと見なかつたものをどうしても見たいといふのでこの一枚を買ひ入れたのかも知れない。さうして現に殉国忠魂を出して見てみると気づいて彼は急にふきげんになつてそれをポケットへねぢ込んだものらしい。この男はあの事以来神経衰弱にかゝつてゐる。」

この男は牛嶋^(ト)狂二郎といふ特色のある名前をつけられて自分では狂二郎の狂を鏡に代へたりたゞ二郎とだけ名乗つたりしてゐるが、一族間では律儀者とだけで通用し同僚間でも入社半年後に模範小市民と呼び慣はされるに至つた人物であつた。人々は幾分のユーモアと冷嘲の気味でこんな風にあだ名したが、事實は、彼はごく小心に親切善良な市民であつた。支那事変に当つては最初から極く厳肅に国民の模範として恥ぢない程憂慮してゐた。彼の憂ひは専ら天下国家にあつた。同年輩の男子が出動を命ぜられるのを見ると数年前に兵^(ト)〔注5〕

●削除②「「まことに御親切さまに」「とんだお世話さまに」など田舎の女は思ひ出す限りの言葉を列べて感謝の意を伝へようとしてゐた。牛島は自分の行く先の近所だから序に車

に乗せて行くだけだからお礼には及ばないと、何度も同じことを繰り返してゐた。

安全はすぐ見つかった。牛島の出社時刻にはまだ十五分位はゆとりがあつた。牛島は真先きに下りて安全の店に飛び込むと、いきなり、

「こゝに藤田といふ甲府の方の人が勤めて居ますか」

「藤田君、居りますが……」

「今店にゐますか」

「今は宿に帰つてゐますよ。藤田君は通勤でしてね。昨晩は夜稼ぐ番だつたものですから、今朝になつて帰りました。きつと寝てゐるでせう」〔注6〕

削除①は「京城日報」の一回目の内容で、削除②は二回目の内容にあたる部分である。このような削除が行われたのは一回読み切りという紙面の制限があつたせいかもしれないが、もしかすると一週間前にあつた「高知新聞」の発禁のことを意識していた可能性もあると思われる。しかし、削除した二カ所を見ると、「高知新聞」の検閲を強く意識していたとも思われぬ。削除②は特に消されても作品の内容に大きく支障を与えらるゝと思われぬ。

削除①の場合も内容からすると、主人公の時局に対する心情を表す部分で、前記の『同盟特信』のような検閲の理由になりそうな要素は見受けられない。これから推測すると、「九州日報」で二カ所が削除されたのは「高知新聞」などの一連の検閲を強く意識

したというよりも、むしろ紙面の制限によるものであったのではないだろうか。それは 0.001 という非常に低い差押率からも検閲に対する緩い意識が窺えるのである。このように当時中央文壇の作家が同時に外地をも含めた複数の地方新聞にほぼ同一の作品を送るのは一般的であった。こうした中での検閲の実態はその様々な差押部数からもわかるように、内地と外地というよりも地域的な偏差が窺えるのではないだろうか。つまり、内地と外地という枠組みには収まらない地域偏差の検閲が行われていたのである。

第三節 「外地」朝鮮の検閲制度

「外地」朝鮮における検閲制度について鄭根植は「植民地朝鮮での検閲基準の体系化は一九二七（昭二）年と一九三六（昭11）年に二回に渡って行われて、一九二〇年代には朝鮮の特殊事情に基づいていたが、一九三〇年代になっては帝國的な普遍性を更に反映する方向に定立していった。」〔注7〕と説明している。一九二〇年代は社会主義者の弾圧や排日思想を抑圧するための検閲であったのに対して、一九三〇年代は戦時下における軍事関連事項などに対する検閲であったということである。このような検閲について朝鮮総督府の警務局発行の『朝鮮出版警察概要』では次のように明記されている。

本書中新聞紙規則とあるは明治四十一年四月統監府令第十二

号を以て制定せられたる規則にして朝鮮在在の朝鮮人以外の者に適用せられ、新聞紙法とは光武十一年七月韓国法律第一号を以て制定せられたる旧韓国法律にして朝鮮人にも適用せらる。出版規則とは明治四十三年五月統監府令第二十号に依り制定せられたる規則にして朝鮮内在在の朝鮮人以外の者に適用せられ内地現行出版法並に予約出版法を準用し、又出版法とは隆熙三年二月韓国法律第六号を以て制定せられ朝鮮人にのみ適用せらるゝ旧韓国法律なり。〔注8〕

これを以下のようにまとめることができる。

◎朝鮮人発行新聞―「光武新聞紙法」（一九〇七年七月）

「出版法」（一九〇九年）

◎日本人発行新聞―「新聞紙規則」（一九〇八年四月三〇日）

「出版規則」（一九一〇年五月二〇日）

この中でも朝鮮人が発行した新聞に適用されていた「光武新聞紙法」はどのようなものであったのだろうか。ハン・ヨンハクは内地の「新聞紙法」と比較しながら、その違いを次のように述べている。

両法の主な相違点は発行の手続きの面で光武新聞紙法が許可制度と事前納本制度を採択しているのに対して、日本の新聞紙法は届出制度と事後納本制度を採用している点である。ま

た、内容の規制の面で前者が内府大臣の行政処分に発行停止・禁止処分権を置いている反面、後者は発行禁止処分権を司法処分規定している。〔注9〕

二つの新聞紙法の大きな違いは内地の「新聞紙法」は届出制度と事後納本制度を採択しているが、外地の朝鮮では許可制度と事前納本制度が採用されており、更に検閲が厳しかったというところにある。また、朝鮮における日本人発行の新聞に適用されていた「新聞紙規則」について金昌録は、外地朝鮮で日本人向けの「新聞紙規則」も内地の新聞紙法制定前の「新聞紙条例」と似ていて、届出制度を採択していたと指摘している〔注10〕。このような法律による朝鮮での検閲はその機構の変遷を経て、一九三八（昭13）年頃は警務局の図書課が担当していた〔注11〕。次に引用する、元朝鮮総督府の職員であった坪井幸生の回想はこのような当時の警務局での検閲の様子を垣間みせてくれる。

私が配置され、勤務することになった警務局図書課は、文書、図画の検閲が主管任務であった。文書には新聞、雑誌等をふくみ、図画には映画などもその一つとして取り扱われた。（中略）朝鮮語関係の検閲は、数のうえでも質的にも最重要視されていたが、とくに日刊の諺文（ハングルの当時の呼称）新聞の検閲には最も注意が払われた。朝刊、夕刊、地方版などの日刊新聞の印刷、発行の実態に即応して、検閲も昼夜を問

わない態勢を必要とした。〔注12〕

坪井も述懐しているように、警務局では朝鮮語新聞の検閲に最も力を入れながら、内地の『出版警察報』のような雑誌が朝鮮でも発行されていた〔注13〕。その中で一九三八（昭13）年一月の『朝鮮出版警察月報』と一九三八（昭13）年版の『朝鮮出版警察概要』は発行されたようだが、欠号のために現物は見られない。そのため、佐藤春夫の「律儀者」が「京城日報」で検閲を受けたかどうかその実態については推測するしかない。

第四節 「京城日報」における検閲の実態

鄭晉錫は朝鮮総督府の機関紙であった「京城日報」も検閲を受けていたと指摘しながら、その事例を次のように述べている。

京城日報は一九二二年八月九日付けの第一八〇三号が発売禁止と同時に差押されたし、翌年の一〇月九日には二日間発行停止処分を受けたりもした。最もひどい筆禍は一九二六年一月二日に日本の天皇が死んだ後、二六日付けの夕刊第二面に元号を昭和に変えた記事を掲載したため、発売禁止され関連する編集責任者が提訴された事件であった。〔注14〕

上記の二件の検閲事例からもわかるように総督府の御用紙と言

われていた「京城日報」にも厳しい検閲が行われていたのである。更に、前述した一九二八（昭三）年から発行された『朝鮮出版警察月報』から「京城日報」の検閲処分を通覧しても特に朝鮮で発行された新聞だけの特色というものは見られない。

実際、削除処分された箇所を「京城日報」の紙面から調べてみると、記事によっては削除されたものや削除されずにそのまま発行されるなどさまざまである。特に『朝鮮出版警察月報』から抜粋した「京城日報」の検閲事例の中で、文芸に関する事例はほとんど見当たらない。しかし、一九四〇（昭一五）年版の『朝鮮出版警察概要』（注15）には検閲の際「朝鮮の特殊事情」による取り締まりが多いことが記されており、それを含めていくつかの参考例を挙げている。その中には「京城日報」に連載された吉川英治の「三国志」（矢野橋村挿絵、一九三九年九月二日〜一九四二年一月八日／全九五〇回）が検閲を受けたという内容の記載も見受けられる。一九四〇（昭一五）年九月一日付の「京城日報」の紙面に掲載された際に「胡弓夫人」が登場する場面があったために、風俗壊乱で削除処分となっている。実際、「京城日報」の同日付の紙面を確認してみると、もともと夕刊一面に掲載されるはずだった「三国志」の連載が削除されている。更に、「京城日報」の「三国志」に関する検閲種別には「削除」という表記と共に、「内務省にては発禁処分となりたるものなり」という説明も書き加えられている。このことから一九四〇（昭一五）年ごろには内地での検閲情報を何らかの形で、外地の朝鮮でも共有していたと言えよう。実際、一九

四〇（昭一五）年度の検閲資料が収録されている『出版警察報』（三一号）を調べてみると、一九四〇（昭一五）年九月一三日発行の「名古屋新聞」（第一六〇〇四号、名古屋市同社発行、九月二日禁止）に掲載された「三国志」が発禁処分を受けたとある。その理由は「曹操胡弓夫人ノ情痴場面ヲ煽情的筆致ヲ以テ描字シタルニ因」るものであった。

また、「京城日報」の「新聞紙規則による行政処分年間合計」を見ると、一九三四（昭九）年に二件だったのが、三年（一九三五）年、五件（一九三六年）と徐々に増え、一九四〇年度には一〇件となっている。朝鮮の三代日本語新聞と呼ばれていた「朝鮮新聞」や「釜山日報」と見比べてみると、若干検閲件数が増加する傾向が見られる（注16）。朝鮮総督府の機関紙であったためか一九三六（昭一〇）年ごろまでは検閲が他の日本語新聞と比べてもそれほど違いはなかったが、戦時体制になると機関紙であるからこそ厳しく取り締まられるようになったのかもしれない。その際「三国志」の事例からもわかるように、外地の朝鮮では内地とは異なる検閲規則が定められていたが、内地との検閲情報の共有がある程度はできていたと思われる。しかし、一九三八（昭一三）年に内地で発禁になった「律儀者」のほぼ完全な原稿が「京城日報」に掲載されていたということは、更に厳しい検閲が行われると考えられがち。内地と外地の遠近法から見ても特異なケースであった。しかし、これまで分析したように「律儀者」の差押部数が内地と外地の枠組みには収まらない地方偏差の様子を帯びるなど、「律儀者」とい

う作品からこのような帝国検閲システムの揺れが窺える。

注

- [1] 中園裕『新聞検閲制度運用論』（清文堂出版、二〇〇六 平成一八年六月三〇日）
- [2] 同上。
- [3] 内務省警保局編『出版警察報 32 111～113号 昭和13年1～9月』（不二出版、一九八二年三月三〇日）
- [4] 国会図書館憲政資料館所蔵のマイクロフィルムを用いた。整理番号はMOJ5011-リール 3-625
- [5] 『京城日報』（一九三八年一月七日夕刊四面、漢字は原文のまま、以下同）
- [6] 『京城日報』（一九三八年一月九日夕刊四面）
- [7] 鄭根埴「植民地検閲と「検閲標準」——日本及び台湾との比較を通して」（『大東文化研究』二〇一二年、ソウル）
- [8] 「凡例」（朝鮮総督府警務局『朝鮮出版警察概要』一九四〇年版（『日帝下戦時体制期政策資料叢書 第三八巻』韓国学術情報株式会社、二〇〇〇年一月五日））
- [9] ハン・ヨンハク「光武新聞紙法と日本新聞紙法」（『韓国言論学報』五五巻一号、二〇一一年二月）
- [10] 金昌録「日帝強占期の言論・出版法制」（『韓国文学研究』第二〇集、二〇〇六年、ソウル）
- [11] 総督府警務局の変動は次のように進められた。警務総監府高等警

察課（一九一〇年～一九一九年）↓警務局高等警察課（一九一九年～一九二五年）↓警務局図書課（一九二六年）↓保安課（一九四三年）↓検閲課（一九四五年）

[12] 坪井幸生『ある朝鮮総督府警察官僚の回想』（草思社、二〇〇四年二月一日）

[13] 代表的なものとして以下の三点を挙げられる。①『朝鮮出版警察月報』（一九二八年九月～一九三八年一月の統制資料、全一二三号）※「国史編纂委員会の韓国史データベース」で閲覧可能（<http://db.history.go.kr/>）②『朝鮮における出版物概要』または『朝鮮出版警察概要』（一九二六年～一九四〇年の統制資料）③『朝鮮警察の概要』（朝鮮総督府警務局、一九三九年～一九四〇年統制資料）

[14] 鄭晉錫『極秘朝鮮総督府の言論検閲と弾圧』（コミュニケーションブックス、二〇〇七年一〇月五日、ソウル）

[15] 「第六章 新聞・通信・雑誌其の他出版物取締事例」（朝鮮総督府警務局『朝鮮出版警察概要』一九四〇年版（『日帝下戦時体制期政策資料叢書 第38巻』韓国学術情報株式会社、二〇〇〇年一月五日））

[16] 「朝鮮新聞」は一九三四年に五件、一九三五年に七件、一九三六年に二件、一九四〇年六件である。「釜山日報」はそれぞれ七件、五件、七件、二件となっている。

第7章 「京城日報」における「大衆小説」の成立と

変遷——朝鮮文人協会の改革と『国民文学』をめぐる

つて

第一節 「内地」における「大衆小説」をめぐる議論

一九四一（昭16）年に創刊された『国民文学』は崔載瑞を編集兼発行人とした文芸雑誌である。創刊当初は、年四回は日本語、八回はハングルで出版する計画だったが、一九四二（昭17）年の五月の合本を最後に全て日本語版で出版されるようになる。このような『国民文学』の一九四三（昭18）年三月号には「新半島文学への要望」というタイトルの座談会の記事が掲載されている。座談会の出席者は『国民文学』の主催者である崔載瑞を始め、「内地」からは菊池寛、横光利一、河上徹太郎、保高德蔵、福田清人、湯浅克衛などであった。この座談会では「朝鮮文壇の現状」や「国語創作の問題」などの話題を皮切りに「内地」の文学者たちからの質問に崔載瑞が応じる形で会は進む。そして座談会の終り頃、歴史小説に関する次のようなやり取りが見られる。

横光 歴史物を書く作家は居りませんか。

崔 居りますね。但しそれは全部諺文です向ふ（朝鮮―筆者注）

の新聞小説と云ふものは、十中八九歴史小説です。尤も其の歴史小説と云ふものは、所謂こちら（日本―筆者注）の大衆文学ではないんですここで言ふ大衆文学と云ふものはないんです。

菊池 朝鮮には全然大衆文学と云ふのがないね。近代小説でも甘いものはない。

崔 あります。例へば恋愛を題材としたので、「野バラ」等、いつまで経つても人気落ちません。所謂大衆小説は、歴史小説になりますと、それは全部と云つて宜いほど諺文です。（一二頁）

横光利一の歴史小説に関する質問に崔載瑞は朝鮮にも歴史小説というものはあるが、日本で言う「大衆文学」ではないと発言している。それに加えて菊池寛も朝鮮には「大衆文学」というものがないと断言している。このように朝鮮と日本の文学者たちが大衆文学について日本にはあるが朝鮮にはないものという認識を共有しているのはなぜであろうか。

本論では以上のような問題点に注目し、「内地」での「大衆小説」という概念の成立と変遷を辿りながら、このような「大衆小説」が「外地」の朝鮮ではどのように展開されたのかを「京城日報」の紙面を中心に探る。その際、一九三九（昭14）年に発足した朝鮮文人協会の改革と一九四一（昭16）年に創刊された『国民文学』

を視野に入れながら考察を行う。

大衆文学の研究者で有名な尾崎秀樹によると〔注1〕、大衆文学は一九二三（大12）年の関東大震災の直後にその成立が見られる。尾崎はその際、次の三つのプロセスをその成立までの決定的な要因として挙げている。第一に『読物文芸叢書』（春陽堂、一九二四年六月）の刊行、第二に大衆雑誌『キング』（一九二五年一月）の創刊、第三に大衆文学の名付け親として知られている白井喬二が中心となつて結成された「二十一日会」とその機関誌の『大衆文芸』（一九二六年一月）の誕生である。「二十一日会」のメンバーは白井喬二を始め、長谷川伸、土師清二、国枝史郎、直木三十五、それから江戸川乱歩などであった。これらの名前から推測できるように、当時の『大衆文芸』は時代小説〔注2〕と探偵小説の作家が中心であった。

このような動きの中、大衆文学に更なる勢いを与えたのは、一九二七（昭2）年五月に平凡社から刊行された『現代大衆文学全集』である。第一回配本の『白井喬二集』からその後を『前田曙山集』、『正木不如丘集』、『国枝史郎集』、『沢田撫松集』、『江戸川乱歩集』、『直木三十五集』、『吉川英治集』が続き、当初計画していた全三六巻を遥かに超え、全六〇巻まで発行された。このことから当時の新しい文学としての大衆文学の人気を垣間見ることが出来る。

成立当時から文壇にその勢いを見せていた大衆文学は、昭和に入ると初期の芸術性よりは娯楽性が強くなるなど、通俗的な傾向

が見られるようになる。特に一九三〇・三一（昭5・6）年にはプロレタリア文学と共に、多様な娯楽雑誌を中心に大衆文学が盛んになる。こうした中、翌年の一九三二（昭7）年には『新潮』誌上で「純文学」に関する特集が組まれるなど、「純文学」という用語が頻繁に用いられ、「大衆文学」の対概念として確立していく様子も見受けられる。

このような大衆文学は一九三五（昭10）年頃には主に時代小説を指すようになり、風俗小説を意味する「通俗文学」とも区別される現象が起こる〔注3〕。またこの時期には所謂「純文学」の新聞小説への進出が目立つようになる〔注4〕。しかし、このような大衆文学も一九三七（昭12）年の日中戦争の勃発後からは、徐々に時局的な「国策文学」または「国民文学」という新たな衣装を着る破目になるのである〔注5〕。

ここまで見てきたように関東大震災後に新しい文学として発生した大衆文学は、時代の変遷と共にその性質が少しずつ変化していったことがわかる。それでは次にこのような大衆文学というのが、当時の外地の朝鮮ではどのように展開されていたのか。その見取り図を「京城日報」の紙面から描いてみることにしよう。

第二節 「京城日報」における「大衆小説」の変遷

まず、「京城日報」が発行されていた当時の朝鮮文壇における「大衆小説」についての流れを簡単に探ってみよう。朝鮮文壇史

の中で初めて「大衆小説」がジャンルの概念として使われたのは金東仁の「小説についての朝鮮人の思想を」（『学之光』一八号、一九一八年八月）からだと言う〔注6〕。しかし、その際金東仁は大衆小説を芸術小説の下位のジャンルとして、「通俗小説」という用語を使っている。それ以来否定的な概念と見なされた「大衆小説」は金基鎮の「通俗小説小考」（『朝鮮日報』一九二八年一月九日～二〇日）を経て、「大衆小説論」（『東亜日報』一九二九年四月一四日～二〇日）によってその形式と内容についての本格的な議論がなされ始める。「大衆小説論」という題名からもわかるように、金基鎮はこれまで使っていた「通俗小説」という用語に代わって、「大衆小説」という用語を使い、既存のプロレタリア小説と、新しい大衆小説の両立を主張している。しかし、このような金基鎮の芸術大衆化運動は林和などのプロ文学の政治性を重要視した作家たちから批判され、特に一九三〇年代に入ってから日本で提起された芸術運動のボルシェヴィキ化を盲目的に受け止め、さらなる文学の政治化を加速化した〔注7〕。このようなカップ（朝鮮プロレタリア芸術家同盟）は一九三五（昭10）年のその解散を迎えることになるのだが、それ以後は朝鮮文壇に全集ブームと共に大衆小説の出版が盛んになる様子が窺える〔注8〕。

こうした「大衆小説」をめぐる朝鮮文壇の動きの中で、外地の朝鮮で発行されていた「京城日報」において、「大衆小説」または「大衆文芸」はどのように議論されていたのだろうか。「京城日報」に掲載された記事からその様子を覗いてみよう。

「大衆小説」または「大衆文芸」に関する記事を時系列に沿って見てみると、管見のところ一九二七（昭2）年の木村達の「大衆文芸の趨向」（『京城日報』一九二七年一月九日、一日、二日）が、最も早い時期に「京城日報」に掲載された大衆文芸に関する記事である。それに引き続いて翌年の一九二八（昭3）年には寺田鼎の「大衆文芸の魅力」（三月一日、五日）と金子光晴の「大衆文芸の位置」（五月六日、八日）という評論が見受けられる。その後、少し時間をおいて一九三二（昭7）年を境に大衆文学に関する多くの記事が集中的に掲載され始める。

一九三二（昭7）年一月二七日付の「京城日報」に掲載された新居格の「大衆文学とその進展性」の中で、新居格〔注9〕は近年大衆物が盛んになった条件を、「経済上の需給関係」から大衆物を「執筆する作家たちの物質生活がゆたかに」なった点、「多数の読者を背景に」している点、また「作品の掲載される場所が、日刊新聞、大衆向な雑誌である」と三つ挙げながら、次のように述べている。

然し私は、それ等のあるが儘の現在の状態を別に、大衆作家、通俗作家たちは、所謂大衆作家であり、通俗作家であるといふことの意識をもつて、現在のこの複雑な社会情勢を時代感情を背景として、ものをかく態度をもつことこそそのぞましいことであり、真に大衆小説のゆく道はそこにあつて欲しいと希ふものである。

ここで新居格は大衆小説について、作家個人の問題ではなく、作品を創作するにあたってその時代状況を如実に描くことの重要性を主張している。このような新居格の主張は次の飯島正と吉川英治の文章の内容と相通じるものがある。飯島正は大衆小説の特徴を純文学と比較しながら、その例として久野豊彦を取り上げる。

久野豊彦は最近特に『人生特急』に於いて大衆小説をかいてゐるやうだ。しかし、芸術的小説家は、常に個より出発してゐるからこの場合思ひの外に現実を誇張し過ぎて普遍的たらんとする意思をこえる危険をもつてゐる。まづ大衆小説は自らを殺して、社会の水準面に浮ばなければならぬやうである。そこにまた大衆小説の偉大さと悲惨さがあるのではないか。らうか。（『京城日報』一九三二年一〇月二五日、二六日、二七日）

ここでも飯島正は、大衆小説について芸術的小説とは違って、個を捨て、誇張し過ぎないように社会を描くことを主張する。更に一九三三（昭八）年には、吉川英治の「大衆文芸を語る」という評論が『京城日報』に掲載されるが、ここで吉川は創作に当って、人情風俗や社会状態といったその時代の特徴を把握することを強調している。

このような大衆小説に対する議論以外にも、武田麟太郎、三田村鳶魚、木戸左右太などの記事も見受けられる（注10）。その中でも特に、木戸左右太という人物の「大衆作家評判記」シリーズの

掲載が目立つ。木戸左右太についてはその正体は定かではないが、一九三二（昭七）年から直木三十五、長谷川伸、白井喬二、吉川英治についてそれぞれの作家の作品やその特徴について批評している。その連載は評判がよかったのか、その後も「続大衆作家評判記」、「続々大衆作家評判記」などの連載が続く。

このように「京城日報」には昭和に入ってから「大衆小説」に関する議論が見え始め、特に一九三二（昭七）年になってからは「大衆文芸」に関する記事が数多く掲載されていたことが確認できる。また「大衆小説」に関する記事だけではなく、「京城日報」には「大衆小説」、「大衆読物」といった作品が多数掲載されている。「京城日報」にはその創刊から廃刊の一九四五（昭20）年まで約一四七編の連載物が紙面を飾っているが（注11）、作品の広告文で作家や作品の紹介の中に「大衆小説」や「大衆作家」などと表記されたものを選別しただけでも、次の「京城日報」における「大衆小説」目録」に挙げられているように二一編の「大衆小説」が確認できる。

目録からも確認できるように、前述した木戸左右太が「大衆作家評判記」などで取り上げていた作家たちが主に「京城日報」に作品を寄せていたことがわかる。一九二八（昭3）年正月の甲賀三郎の短編「大衆読物 正夢」を皮切りに、初期は講談が主に掲載され、一九三二（昭7）年に入ってから、三上於菟吉、直木三十五、長谷川伸、国枝史郎といった代表的な大衆作家たちの作品が一九四二（昭17）年まで続く。こうした中、一九四二（昭17）年になって漸く朝鮮出身作家では初めて牧洋の「永遠の女」という長

★「京城日報」における「大衆小説」目録

作家「作品名」	挿画	連載期間（昭和）／回数
甲賀三郎「大衆読物 正夢」	不明	3・1・1／1
藤島一虎「俠艶霊剣」（平山蘆江閲）	竹中英太郎	4・4・9～4・12・9／240
遠藤柳雨「運命の浪」	多田毅三	4・5・4～5・2・18／240
稲岡奴之助「風流奴茶屋」	荒川芳三朗	5・2・13～5・9・9／206
潮山長三「刺青傀儡話」	河原塚亀太郎	5・5・22～6・1・14／180
鳥江鉄也「川合又五郎」	佐藤松華	5・9・10～6・4・10／162
伊藤松雄「凍えた花」	寺嶋紫明	6・4・23～6・12・19／201
行友李風「茂平次兇状」	藤井耕達	6・9・7～7・5・3／185
三上於菟吉「延寿秘薬」	藤井耕達	7・1・1／1
直木三十五「寛永卅乱れ」	志村立美	7・5・4～7・5・18／15
長谷川伸「的田双六」	藤井清	7・11・28～8・4・19／138
土師清二「寺小屋義賊」	幡恒春	8・4・20～8・9・17／150
国枝史郎「俠剣風来坊」	佐々木格	8・9・23～9・1・29／112
藤井真澄「元寇」	志村立美	10・8・13～11・1・9／140
長谷川伸「大衆小説 髭切り弥太郎」	なし	12・1・1～12・1・3／2
田中貢太郎「暁星双紙」	河野通勢	12・3・12～12・7・21／113
長谷川伸「国定忠次」	岩田専太郎	12・7・22～13・4・17／251
土師清二「魯西亜船」	坪内節太郎	14・4・11～14・8・17／110
川口松太郎「老春」	伊勢良夫	16・2・14～16・9・15／210
山中峯太郎「歌はぬ勝利」	高木清	16・9・16～17・2・10／146?
牧洋「永遠の女」	岩本正二	17・10・28～17・12・7／41

編小説が「京城日報」に載るようになる〔注12〕。

では、なぜ一九四二(昭17)年になって朝鮮出身作家の作品が「京城日報」に掲載されるようになったのだろうか。その当時の朝鮮文壇の有様を、「京城日報」に掲載された朝鮮文人協会に関する記事を辿りながら探ってみよう。

第三節 朝鮮文人協会の改革と「大衆小説」

一九三九(昭14)年一〇月二九日に京城で発足した朝鮮文人協会は、李光洙を会長に兪鎮午、金文輯などの朝鮮文人たちと、当時の京城帝大教授辛島驍や緑旗聯盟主幹の津田剛のような内地側のメンバーが組み合わさった団体で、「文章報国」による「内鮮一体」を唱えた。

このような朝鮮文人協会は、一九四二(昭17)年になると、協会の改革に乗り出す。「京城日報」の一九四二年八月二三日の「朝鮮文人協会の胎動」という見出しの記事では、朝鮮文人協会の中堅作家たちが中心になって機構改革を行おうとしている動きが報道されている。その改革の内容としては「諺文雑誌に国語創作欄設定拡充」、「国語文学奨励のため文学賞設定」や「国民文学運動に熱意のある新人養成」など、主に国語(日本語)による国民文学運動に関する項目であった。

このような文人協会の改革の動きは、その一ヶ月後の九月九日の「京城日報」の紙面にさらなる展開を見せている。

朝鮮文人協会では戦時下における実践体制を整へて、真に日本的なる文学運動に雄飛すべく機構を改め併せてその実践要綱を検討中であったが、従来の常務、企画、文学三部制を改め、常務、文学の二本建てとし、総務部には総務と常務を置いて計画指導と実務に便にし文学部を評論、小説、詩の三〇に分けて、それぞれの部門において活発なる活動をする事になった、そしてその実践要項として既に決定されたものは次の四大目〇を中心とする諸計画である

その具体的な内容としては「一、文壇の国語化促進」、「二、文人の日本的鍛錬」、「三、作品の国策協力」、「四、現地への作家動員」となっている。その中でも「一、文壇の国語化促進」の内容を見ると、前掲の「朝鮮文人協会の胎動」で確認できたように、「文学賞の設定」、「雑誌国語欄の拡充」、「国語創作の奨励」といった国民文学運動の実践的な項目を挙げている。更に協会内の小説戯曲部会は、次のような具体案を提示している。

作品の国語化促進に乗出した朝鮮文人協会では、寄々各部会を開いて具体策を練つてゐるが、小説戯曲部会できりあげた方策としては次のやうな各項目が挙げられ、その深刺たる意欲のほどが窺はれる即ち諺文作品にして優秀なるものに対してはこれを国語訳とすることに努め、李無影、蔡萬植両氏を

委員に挙げ、国語への愛情を説く感想文を募ると共に、作品の国語化に関する論文をも促進し、これに関する内地文人の意見を徴し、新聞雑誌社側に呼びかけて会員の所見を掲載するやう幹旋することも含まれてゐるまた国語で書かれた優秀作品を表彰する一方、若い会員を養成し、評論部会と連絡をとつて激励に当り、殊に朝鮮では遅々として発達しなかつた大衆文学に対してはその地盤を開拓して研究会などを開き児童文学の分野についても同様の方策をとると共に、日本古典研究の結果をも発表するやうに増進するはずである（『作品の国語化を文人協会小説部会の申合せ』（『京城日報』一九四二年一月一七日））

作品の国語化運動に拍車をかけていた朝鮮文人協会のそれぞれの部会が、その具体的な活動を見せていることがわかる。その中でも小説戯曲会は諺文作品の国語訳や、国語感想文募集、国語作品の表彰などの内容の項目を提示している。このような案件はこれまでの朝鮮文人協会が進めてきた国民文学運動の重要な内容と一致するものであるが、これにさらなる項目が追加される。それは「朝鮮では遅々として発達しなかつた大衆文学に対してはその地盤を開拓して研究会などを開く」ということで、これまでの朝鮮文壇には「大衆文学」という分野がなかつたため、それを新しく開拓しようという内容である。このような「大衆文学」に関する議題をも含めた文人協会の改革に対して、朝鮮文人協会の改革

で総務の一人として選ばれた辛島驍は次のように述べている。

朝鮮文人協会は最近機構を改革したが、之が新聞紙上に伝えられるや一部文人の間に多少の動揺があつたやうに聞き及んだ。甚だ遺憾にたえない。想ふにそのやうな動揺は、改革の実情がよく解らない単に刺激的な風聞に不安を感じたといふ程度ではあるまいか。（中略）この機構の改革、ひいてはこのやうな実践体制を産み出したものは、実に常務諸君の熱意に端を発したもので、この点は旧幹事の深く感銘にたえない次第であり、またその三君に今後絶大の希望をかけ、労苦を願ふ所以である。（『国民文学』第二巻第九号、一九四二年一月）

辛島は、新たに任命された三人の常務、田中英光、金村龍濟、牧洋に今後の協会の担い手としての役割と期待感を表しているが、その中でも「京城日報」に朝鮮人作家として初めて長編小説を寄せている牧洋（李石薫）に注目してみよう。

第四節 「国民文学」の実践としての「大衆文学」

前節で概観した朝鮮文人協会による改革の真つ只中の一九四二（昭一七）年一〇月二四日付の「京城日報」には、次のような広告文が掲載される。

国語新聞たる本紙が、半島作家に連載小説の門戸を開くことは、けだし新しい試みであるには相違ありませんが、その作者に牧氏を得たことは、たしかに人を得たものと存じます。

本来半島文壇には、大衆小説の分野がなく、近頃になつて文人協会などでも、この方面の建設に乗出さうとするの機運にある時、「永遠の女」が、その礎石の役割を勤めれば意義は一入深いと信じます。

創刊以来、内地の作家たちの専有物であつた「京城日報」の長編連載小説の作家に李石薫が選ばれたのである。その際、彼に要求されたのはこれまでの「半島文壇」にはなかつた「大衆小説」の礎石としての役割であつた。このような京城日報社の「大衆小説」に対する認識と朝鮮文人協会の改革の際のそれとは軌を一にしていると思われる。

京城日報社側からの期待を受けて書かれた「永遠の女」は、東京から京城に來た牧山小百合の恋愛話を中心に描きながら、志願兵や国語教育のような時局的な問題を全面に押し出した作品である。後に李石薫は「永遠の女」執筆時を振り返つて次のように述べている。

私は、四十回の中篇といふことにし、京日側の条件として、先づ、登場人物を内鮮両方にし、どちらも一方だけを悪玉にしないこと、といつて、時代性を無視してはならないと同時に



図 17 「永遠の女」の第 1 回

に、たちあがる半島の姿を何等かの形で現はすこと、それからいはずの大衆小説の形式をとること等々が要求された。(『大東亜』一九四三年三月)

「永遠の女」という作品について京城日報社から、登場人物を内鮮両方に平等に扱うことや、時代性を取り入れること、最後には大衆小説の形式をとることなどを要求されたと言っている。では、この時の大衆小説はどのようなものであつたのだろうか。「京城日報」の紙面には「永遠の女」の連載以後、大衆小説に関する記事がほとんど見受けられない。しかし、翌年の一九四三(昭18)年六月の『国民文学』に掲載された「戦争と文学」という座談会で大衆小説についての次のような言及が見られる。

杉本 戦地ではどういふものがよまれますか。

愈 さう。それはききたいところですね。

上田 何と言つても多いのは大衆文学、軽いものが一般的であるやうですね。(中略)大衆雑誌をよむのはまアひまつぶしで、よんで別に感動することもなし、いゝと思ふ人もない。

軍報道班員として南方に行ってきた上田広を迎えて開かれた座談会で、杉本長夫と兪鎮午の質問に対して上田は大衆文学とは「軽いもの」であり、大衆雑誌とは「ひまつぶし」に読むもので、何の「感動することもない」と述べている。上田の大衆小説に対するこのような発言はおそらく「内地」の多くの読者が共有していた認識だったと思われる。そこに前掲の菊池寛の「甘いもの」という発言も加えることができるだろう。

ところが、同じ『国民文学』の一九四三(昭18)年五月号には当時の京城日報社の文芸部長の寺田瑛の次のような文章が見られる。

(前略)そのことは、君として純文学への道を進ましめるには役立つことが多かったと思ふが、それだけに、いはゆる新聞小説への行き方については、多少の危惧がないことはなかつたのを白状せざるにゐられない。何故かといへば、新聞小説を読む階層の人たちには、真の文学的な味とか価値とかを判別するより前に、先づその物語の規模とテムポが要求されることを知つてゐるからである。(中略)それでもなほ、多種多様な、場合によつては程度の低い大衆をも、全然念頭に置かなかつた譯であるまいことはあの「青瓦の家」が読者の帰趨動向に敏感であるべき筈の新聞人をして、予定の回数まで君に執筆をつゞけさせたことでもわかる。即ち、それだけに新聞小説としても、殊に、半島人作家が初めて書いた国語小説と

しても、一応の成功であつたといふことは出来ると思ふ。(「朝鮮芸術賞の李無影君」)

ここで寺田は李無影が一九四二(昭17)年に「釜山日報」に連載した「青瓦の家」で朝鮮芸術賞の文学部門を受賞したことを祝しながら、純文学者を自認していた李無影が新聞小説を書くことに對してうまく書けるか恐れていたと述懐している。また、新聞小説の読者には「文学的な味とか価値」よりも「物語の規模とテムポ」が優先されると強調し、新聞に掲載される「大衆小説」は、「読者の帰趨動向に敏感である」と述べている。

では、当時の朝鮮文壇にはこのような大衆小説が存在しなかったのだろうか。前掲のカン・オクヒも指摘しているように三〇年代後半の朝鮮文壇にも「大衆の慰安や大衆の娯樂的な欲求」を満たすための大衆文学が流行っていた。しかし、菊池寛との座談会で崔載瑞が歴史小説の場合は日本の大衆小説とは違ふと発言する際の大衆小説は恐らく国語(日本語)で書かれた作品のことであろう。座談会で崔載瑞は歴史小説は全部諺文で書かれてると強調しているように、諺文で書かれた「軽いもの」や「甘いもの」はあつても、国語で書かれた大衆小説はないと認識しているわけである。この座談会の冒頭で崔載瑞は朝鮮文壇の現状を踏まえつつ、「国民文学」について次のように説明する。

昨年頃から完全な国民文学の体制を整へたのであります。(中

略)要するに半島の文学者も内地の文学者達と共同の理想と目標の下に、同じ国語を使ってこの時代を生き抜いて行かう、さう云ふ文学が国民文学だ、と云ふ風に私達は端的に考へて居るのであります。(二頁)

つまり、一九四二年の朝鮮文人協会の機構改革は崔載瑞が述べているように「国民文学」の体制を整えるための動きであった。その際の「国民文学」は内地の文学者たちの同じ理想と目標を目指しながら、「国語」＝日本語で書かざるを得なかつたのである。このような「国民文学」と「大衆小説」について次の加藤武雄の発言は示唆するところが大きい。加藤は「朝鮮の文学について」(『国民文学』一九四五年三月)の中で「ひたすらに芸術的完成を追及する芸術至上主義的心境からは、此の際深く脱去すべきであらう」と主張しながら、次のように述べている。

(前略)国民文学は、大衆を閉却しては成り立たない。内地の文壇には、純文学、大衆文学の目がある。純文学が孤高独善の文学ならば意味がないと同じく大衆文学が媚俗低級の文学ならば唾棄すべきであるがさうでない、正しい大衆の文学は、むしろ国民文学の根軸である。この意味における真の大衆文学は、朝鮮に於ても、もつと盛んにならねばならぬ。(中略)大衆の血液に潜在する日本精神、それをゆり動かして目覚ましめる文学、さういふ意味の文学は朝鮮に於て特に必要だと

思ふが、此の点また用意も足らぬやうに見える。(中略)いや、大衆文学といふやうな言葉は、純文学といふ言葉と共に駆逐したい。大衆文学も無い、純文学もない。我等の題目は、国民文学の一語につきる。そして、国民文学の樹立は大衆を閉却してはなし得ない——これが私の云ひ度いところなのである。(中略)(十九年三月十九日)

加藤は大衆文学が「国民文学の根軸」であるとしながら、このよ
うな大衆文学が朝鮮においても更に「盛んにならねばならぬ」と主張している。つまり、大衆の中に潜んでいる「日本精神」を「目覚ましめる文学」が朝鮮には足りないとし、最後には「国民文学の樹立」における「大衆」の重要性を強調しながら文章は締めくくられる。ここからも一九四二(昭17)年から外地の朝鮮で主張された「大衆文学」は国民文学運動の一つの実践であつたことがわかる。

これまで見てきたように、一九四二(昭17)年から外地の朝鮮文壇では「国語」による創作が強く要求されるなど、国語文学運動が展開された。その際朝鮮文人協会も組織の改革を行い、朝鮮にはない「大衆文学」の開拓に取り組む。時を同じくして、日本語新聞の「京城日報」も初めて朝鮮出身作家に長編小説を書かせるなど、「大衆小説」というキャッチフレーズで大きく宣伝した。しかし、このような「国民文学の樹立」のための一つの実践としての「京城日報」における「大衆文学」は結局不評に終わる。戦前

から内地の有名作家たちの大衆小説を掲載していた「京城日報」は、戦時中になると「大衆文学」の大衆性を用いてプロパガンダ的な「国民文学」を唱えるなどその御用紙としての性格をくつきりと見せたのである。

注

〔1〕尾崎秀樹『大衆文学』（紀伊國屋書店、一九九四年一月二五日、復刻版）と尾崎秀樹『大衆文学の歴史 上 戦前篇』（講談社、一九八九年三月一〇日）を主に参考にした。

〔2〕鈴木貞美は『日本の「文学」を考える』（角川選書、一九九四年一月一五日）で、時代小説について次のように述べている。「白井喬二らの時代小説は、民衆芸術運動や「民衆芸術論」の展開の上に、「プロレタリア文学」と並ぶ新興文芸の一翼として意識されていたのがわかる。民衆芸術運動が子供や女性の文化を芸術的に洗練したのに対して、「大衆文芸」のうちの時代小説は、大衆の娯楽たる講談を言語芸術として読物化した。そして、その理念は、新しく勃興する大衆のための芸術であり、既存の文壇小説の変革をもなっていた。その意味で、「大衆文芸」は、明治期「政治小説」——社会主義的「自然主義」——「民衆芸術」という幹から生まれたものであり、「プロレタリア文学」といわば双生児ふたごの関係にあった。」

〔3〕大衆文学と通俗文学について尾崎秀樹は『大衆文学論』（頸草書房、一九六五年六月）で次のように説明している。「大衆文学は庶民的伝

統に根ざすものだけに、封建的なロマンへの回帰を一面で伴いながらも、おくれた読者層にひろく愛読され、時代をこえた英雄像を読者のイメージにうえつける。それに反して通俗文学は伝統の浅さから、社会風俗の推移につれて色あせる度合が強く、時代をこえて読者の文学的感動をさそう力とはならなかった。」

〔4〕この時期の大衆文学についていくつかその用例を挙げると、十返一は「文芸時評」(『三田文学』一九三六年二月)の中で大衆文学の定義を「文化ではなく、芸術ではなく、娯楽である」とし、「最近、純文学作家が新聞小説に進出したことについて、作家側では武田麟太郎氏はじめ「純文学の社会的勝利」と観てゐる」と述べながら、大衆文学の行き詰まりに就いて指摘している。また、高冲陽造も「大衆小説の傾向」(『時事新報』一九三六年九月二〇日、二二日、二三日)で「大衆小説の世界は、架空の、幻想の世界」で、「大衆小説が純文学とは別に娯楽読物と云はれてゐるのは、何んの不思議もない」と述べながら、大衆小説の内容の向上、つまり芸術性を持つことを提案している。

〔5〕敗戦の直後に書かれた次の野田宇太郎の評論からも戦時中の大衆小説の一断面を垣間見ることが出来る。「文化を高く潔きを以てよしとする。戦時中は表面健康な文学が要求され、それに迎合した多くの作品がみられたが、事実は虚偽と安易のデカダンの失墜であった。つひに、落語や浪曲と肩を並べさへした。むしろ大衆小説なるものが大道を文学然と闊歩した。活動写真の新撰組のやうにである。低く低く文学は社会の露路裏をさまよった。このやうなことは

悪夢となつてほしい。戦争に対する作家の無節操も不勉強も大衆小説の横行によく表れてゐる。かうした類の大衆作家こそは全く国民としてゆるしがたい戦争犯罪者と云つてもよいであらう。無智な大衆の歓心をかひ、無能な官僚を利用した。日本の精神文化を崩し、国民を魯鈍にし、聯合國をして日本人は嘘吐きといはしめるやうな地盤を作ることのみを行つた。大衆文学とは真実の文学にあらざる文学といふことであるからだ。この際は私は大衆作家の猛反省を要求すると共に、大衆的営利目的の雑誌社並に新聞社へも文学といふおごそかな精神文化に対して認識の目を開き責任をやらふことを要求したい。大衆小説が世を過つた罪は大きい。」（『芸苑』一九四五年九月）

〔6〕リ・ジョンオク『1930年代韓国大衆小説の理解』（国学資料院、二〇〇〇年二月二〇日、ソウル）

〔7〕趙鎮基『韓日プロ文学論の比較研究』（プルン思想、二〇〇〇年一月二〇日、ソウル）

〔8〕カン・オクヒは『韓国近代大衆小説研究』（キプンセム、二〇〇〇年五月四日、ソウル）の中で全集ブームの原因として、「出版の弾圧に対する方便として文芸物に注目」し、また「出版社が近代的な企業としての面貌を整えた」ことを挙げている（三二七頁）。当時刊行された全集は朝鮮初めての全集である『現代朝鮮長編小説全集』（一九三六年）を始め、『現代朝鮮文学全集』『現代女流文学選集』（一九三八年三月〜九月）、『新選文学全集』（一九三八年一月〜一九三九年一月）、『湖巖全集』（一九三九年一月〜二月）、『現代朝鮮文人

全集』（一九三八年一月〜一九四〇年）、『第一期現代傑作長編小説全集』（一九三八年一月〜一九三九年七月）、『第二期現代傑作長編小説全集』（一九四一年一月）、『朝鮮歴史小説全集』（一九三九年九月）、『朝鮮作家名作全集』（一九三九年一月〜一九四〇年）、『全作長編小説叢書』『世界傑作探偵小説全集』（一九四一年）などがある。

〔9〕新居格（一八八八年三月九日〜一九五一年一月一日）徳島県生まれで、東大を卒業した後「読売新聞」、「東京朝日新聞」などで記者を経て文筆活動に入った。主に評論家として活躍し、アナキストであった。パール・バックの「大地」の訳者としても知られる。賀川豊彦はいとこに当たる。

〔10〕武田麟太郎「大衆文学」と文学の大衆性」（『京城日報』一九三二年三月一日）、三田村鳶魚「或る日の心境を語る（九）「大衆」と「師」」（『京城日報』一九三二年三月十五日）、木戸左右太「大衆作家評判記」（『京城日報』一九三二年一月六日、七日、九日）、木戸左右太「続大衆作家評判記」（『京城日報』一九三二年一月〇月二八日、二九日、三〇日）、大下宇陀児「書齋での話 大衆作家秋夜譚」（『京城日報』一九三二年一月三日〜同年一月一日、二日）、木戸左右太「続々大衆作家評判記」（『京城日報』一九三二年一月一日、二日、一日、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、九日、十日、十一日、十二日、十三日、十四日、十五日、十六日、十七日）

〔11〕拙稿「『京城日報』における日本語文学関連目録―小説と講談を中心に」（花書院『紋説』Ⅲ06、二〇一一年四月十五日）を参照されたい。

〔12〕『京城日報』と同じく朝鮮総督府の御用紙と言われていたハングル

語新聞の「毎日申報」にも数多くの長編小説が掲載される。昭和三年に京城日報社から分離し、「毎日新報」と改題してから、懸賞小説を募集するなど更に商業的な経営に取り組む。一九四〇年代に入ると、時局に便乗するような長編小説も多数掲載される。

終章

本論文は植民地時代に「外地」の朝鮮で発行された「京城日報」における文芸活動について考察したものである。一九〇六（明39）年に朝鮮で発行されていた日本語新聞「京城日報」の文芸活動がこれまで「日本文学史」から除外されてきたことに疑問を持ち、どのような文芸活動が実際行われてきたのかを実証的に検討したものである。

漸く日本では一九九〇年代から「外地」日本文学」という分野が構築され、旧植民地地域における日本語文学に関する研究が盛んに行われてきた。一方、韓国でも二〇〇〇年代からこれまでに「親日文学」としてレットテルが張られ、あまり注目されてこなかった日本語文学を「二重言語文学」という観点から見直す研究が活発に行われた。しかし、このように日本語文学に関する研究が盛んに行われているにも関わらず、未だに日本語新聞のような「研究の空白」は存在している。特に「外地」で発行されていた日本語新聞における文芸活動はその資料の散逸による混乱もあって、あまりこれまで注目されてこなかった。しかし、近年「京城日報」の復刻版が出版されるなどその研究の基盤が整えられてきた。本論文では特に文芸活動に注目し、基礎的な作業として文芸記事をデータベース化し、それを基に論を展開した。

第一部ではこのような「京城日報」における文芸欄と連載小説・

講談に注目し、それがどのように展開されていたのかを論じながら、その意味を検証したものである。文芸欄が本格的に「京城日報」の紙面に設けられるのは一九二二（大10）年ごろのことである。

それまでに俳句などを中心に文芸募集などが行われていたが、「文芸欄刷新」と共に「京日文芸」というセクションができあがるのがこの時期である。その際、一九二七（昭2）年に学芸部が設置されるまで文芸を担当していた社会部の新しい部長として寺田寿夫が見えるなど編集人による文芸欄の編成の傾向が変わっていく。

このように初期の「京城日報」は俳句や講談などの大衆性を重視しながら展開されてきたが、一九三〇年代になってからは朝鮮出身の作家たちにもその執筆の場を提供するなど、外地メディアの独特な発展の様子を垣間見せているのである。

「京城日報」に掲載された連載小説や講談などは約二四七編に到り、ほとんどの作品は日本人作者によるものである。その作品の書誌情報を調べてみると、数多くの作品が作家の全集や研究書などから漏れていることがわかる。そこには大きく二種類があり、これまで作品の存在自体が知られてこなかった作品群と、作品の存在は知られていても「京城日報」に関する書誌情報がない作品群である。つまり、恐らく創刊から大正の後期あたりまでには、「京城日報」にのみ掲載される作品が多いが、昭和に入るとれて徐々に台湾や満洲などの「外地」の新聞と、「内地」の地方新聞に同時に掲載される作品が増えていく様子が窺えるのである。

このような文芸欄と連載小説・講談の考察を背景にして、第二

部では具体的に文学者や作品がどのように「外地」に移動し、消費または需要されていくのかを時系列に探ってみた。第三章では、上司小剣が関東大震災直後に「京城日報」に書いた「災後の恋」という長編小説に注目し、震災前後に内地で発表した長編四部作の「東京」との関連性を視野に入れながら、外地の新聞に作品を寄せる際の作者の戦略について考えてみた。

震災後に多様なメディアに「東京は美しくなる」という感想を述べ、他の文学者たちから批判を浴びた小剣は、更に震災前から東京の「大破壊」を構想していたとも述べている。しかし、震災の直後に「東京」第三部を「朝日新聞」に寄せるが、連載が終わるまで「大破壊」の場面は見受けられなかった。このような震災の場面が登場するのは一九二八（昭三）年に「東京」第一部から三部までをまとめた『現代全集』版「東京」であった。『現代全集』版「東京」執筆の際、新たに百枚くらい加筆されたところに震災の場面が描かれていたのである。これまでの先行研究ではこの加筆された箇所は『現代全集』版「東京」の刊行の直前に書かれたと指摘されたが、実際には一九二二（大十）年に外地の「京城日報」に掲載されていた「災後の恋」に既に震災の場面が描かれていたのである。しかし、こうした震災の場面の描写が作品に挿入される際、少なくとも描写の差異もまた見受けられた。『現代全集』版「東京」では「焼けてゐる東京」や「美しかった東京」が主に描かれている反面、「災後の恋」では二人の主人公の両親の安否を心配するなど家族愛の物語として脚色されていたのである。つ

まり、『現代全集』版「東京」では、主に「闘争から建設への東京」が描かれているが、「災後の恋」は男女の「優しい恋」話として外地の読者に需要・消費されていたのである。その際、小剣の震災後の「不思議な」発言は外地のメディアであるからこそそれを可能にしたのである。

第四章では、「京城日報」に自分の作品を寄せるため、友人の芥川龍之介に「提灯文」を書かせた宮崎光男という人物に焦点をあてた。朝鮮でも生活した経験のある宮崎は「途上」という作品を「京城日報」に寄せる際、当時文壇の大家の芥川に紹介文を依頼したのである。このような宮崎と芥川との交流は一九一五（大4）年ごろから始まり、芥川が死ぬ直前までつづいたと思われる。その親交の様子は宮崎からの一方的な記述ではあるが、芥川は宮崎を「世の中に出してくれた恩人」と言ったほど親密な関係を続けていたようである。しかし、戦後このような二人の交流は芥川の全集や研究書のどこからも見受けられない。それはおそらく戦中に戦争協力的な記事を書いて戦後は公職追放になったことが大きかったと思われる。公職追放が解除されてすぐ『文芸春秋』に書いた「芥川龍之介と菊池寛」という文章には、戦前からの二人との交流が綴られている。それにも関わらず、戦後に宮崎と二人の文壇の大家との交流はほとんど注目されず、特に芥川研究においても宮崎光男という存在は忘れられた人物であった。しかし、戦前に外地の朝鮮で発行されていた新聞に宮崎のため書いた「提灯文」はこのような二人の交流を裏付けてくれると同時に、忘却

されてきた外地の文芸活動の一面を喚起させてくれる。

第五章では文学者たちの外地における講演会に注目した。菊池寛を先頭に、直木三十五、横光利一、佐々木茂索、池谷信三郎の五人は、一九三〇（昭五）年に南満洲鉄道の招待で満洲に向かう途中、朝鮮により講演会を行うなど一泊二日の短い滞在をしている。五人の文学者たちは講演会で朝鮮との因縁などを中心に述べている。しかし、菊池寛の「文芸の鑑賞と創作」というタイトルの講演には、文芸を通して「人間が自然を見る眼を養ふ」ことを主張している。また、公演中には京城に来る前に問題になった菊池寛の税金問題などに対する愚痴をこぼす内容なども含まれている。

このような菊池寛たちが京城を去った後、「京城日報」の紙面には直木三十五の作品を皮切りに、菊池寛と横光利一の長編小説が掲載されるなど、内地の作家たちと外地のメディアとの相互方向的な商業性を如実に見せていた。また、朝鮮と満洲への旅からも内地と外地の文学者たちの上下関係も垣間見ることができた。

第六章では、「京城日報」における検閲の問題について考察をおこなった。一九三八（昭十三年）一月に「京城日報」に三回に渡って掲載された「律義者」は最新版の『定本佐藤春夫全集』などにも収録されていない作品で、水沢不二夫の「佐藤春夫「律義者」、江戸川乱歩「芋虫」の検閲」（『日本近代文学』第八三集、二〇一〇年一月）から、一九三七（昭十二）年一月二〇日の同盟通信社『同盟特信』が初出であったことがわかった。また、翌年の一九三八（昭十三年）一月に内務省から発禁処分を受ける前に、水沢は実質的な

初出として「高知新聞」をあげている。掲載時は「京城日報」と同じく一九三八（昭十三年）一月七日であった。その際、同じ作品が外地の新聞に掲載されることと内地の新聞に掲載されることの違いや意味、外地での文学と検閲の問題について考えてみた。

その考察の結果、中央文壇の作家が複数の新聞に同時に同じ作品を寄せていた中で、特に検閲が厳しいだろうと考えられがちな外地のメディアに内地で検閲を受けた作品がほぼ完全な原稿で掲載されたことは、単純に内地と外地という枠組みには収まらない検閲のシステムをくつきりと見せてくれた。それは検閲を受けた差押部数が内地と外地の偏差ではなく、地方ごとに異なっていたことから裏付けることができたのである。

最後の第七章では、朝鮮出身としては初めて「京城日報」の長編小説の連載欄に作品を寄せる李石薫の「永遠の女」に光を当てた。その際、京城日报社から求められたのは、朝鮮文壇にはない「大衆小説」という形式で書くことであった。つまり、登場人物は内鮮両方を平等に扱うことや、時代性を取り込んだ「大衆小説」を要求されたのである。一方、時期を同じくして、一九四二（昭十七）年から外地の朝鮮では「国語」の日本語に寄る国民文学運動が展開されていた。一九三九（昭十四）年京城で発足した朝鮮文人協会は、一九四二（昭十七）年になると、協会の改革に乗り出す。そこには「朝鮮では遅々として発達しなかつた大衆文学に対してはその地盤を開拓して研究会などを開く項目などが見られる。このような動きのなかで、京城日报社から執筆の依頼を受けたわけであるが、

結果としてその作品は不評に終わった。このような戦時中の「京城日報」における「国語」による「大衆文学」は、その大衆性を用いたプロパガンダ的な「国民文学」への移行から御用紙としての「京城日報」の性格を赤裸々に見せつけたのである。

本論文の結論は以上のとおりである。論者が本論文で試みたのは、外地の朝鮮で発行されていた「京城日報」という新聞における文芸活動を明らかにすることであった。しかし、四〇年間という長い期間に渡って発行された新聞を本論文ではまとめきれないところも確かにあると思われる。このような点はこれからもさらなる事例を論じつつ検討していきたい。

参考文献

- 芦谷信和、上田博、木村一信編『作家のアジア体験』（世界思想社、一九九二年七月二〇日）
- 市川祥子「上毛新聞」文芸関連記事リスト（1）大正10年（1921）8月～大正12年（1923）3月」（「群馬県立女子大学紀要」26、二〇〇五年二月）
- 「上毛新聞」文芸関連記事リスト（2）大正12年（1923）4月～大正13年（1924）3月」（「群馬県立女子大学紀要」27、二〇〇六年二月）
- 「上毛新聞」文芸関連記事リスト（3）大正13年（1924）4月～大正15年（1926）3月」（「群馬県立女子大学紀要」28、二〇〇七年二月）
- 「上毛新聞」文芸関連記事リスト（4）大正15年（1926）4月～昭和2年（1927）3月」（「群馬県立女子大学紀要」29、二〇〇八年二月）
- 「上毛新聞」文芸関連記事リスト（5）昭和2年（1927）4月～昭和3年（1928）3月」（「群馬県立女子大学紀要」30、二〇〇九年二月）
- 「上毛新聞」文芸関連記事リスト（6）昭和3年（1928）4月～昭和4年（1929）3月」（「群馬県立女子大学紀要」31、二〇一〇年二月）
- 「上毛新聞」文芸関連記事リスト（7）昭和4年（1929）4月～昭和5年（1930）3月」（「群馬県立女子大学紀要」32、二〇一一年二月）
- 「上毛新聞」文芸関連記事リスト（8）昭和5年（1930）4月～昭和6年（1931）3月」（「群馬県立女子大学紀要」33、二〇一一年二月）
- 『井伏鱒二全集第五卷』（筑摩書房、一九九七年三月二五日）
- 『井伏鱒二全集第六卷』（筑摩書房、一九九七年六月二〇日）
- 李鍊^{イム}「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」（『メディア史研究 第21号』ゆまに書房、二〇〇六年二月）
- 『尾崎士郎全集 第十二卷』（講談社、一九六六年一月二五日）
- 尾崎秀樹『大衆文学』（紀伊國屋書店、一九九四年一月二五日、復刻版）
- 尾崎秀樹『大衆文学の歴史 上 戦前篇』（講談社、一九八九年三月一日）
- 『跨境 日本語文学研究』（二〇一四年六月三〇日）
- 『片岡鉄兵 書誌と作品』（東王書林、二〇〇〇年十一月一日）
- 『片岡鉄兵全集 第九卷』（日本図書センター、一九九五年二月二五日、復刻版発行）
- 神谷忠孝、木村一信編『〈外地〉日本語文学論』（世界思想社、二〇〇七年）
- 川村湊『異郷の昭和文学』（岩波書店、一九九〇年一〇月一九日）
- 川村湊『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、一九九四年二月一五日）
- 『川口松太郎全集 第十六卷』（講談社、一九六九年四月二二日）

カン・オクヒは『韓国近代大衆小説研究』（キプンセム、二〇〇〇年五月四日、ソウル）

『韓半島・満州日本語文獻（1868—1945）目録集』（全一三巻、図書出版ムン、二〇一一年二月）

『韓半島・満州日本語文獻（1868—1945）目次集』（全二七巻、図書出版ムン、二〇一一年）

『菊池寛全集』（文藝春秋、一九九四年一〇月一五日）

『岸田國士全集28』（岩波書店、一九九二年六月一七日）

北原糸子『関東大震災の社会史』（朝日新聞出版、二〇一一年八月二五日）

『鏡花全集 別巻』（岩波書店、一九七六年三月二六日）

『近代文学研究叢書』（全七六巻と別巻、昭和女子大学近代文学研究室、一九五六〜二〇〇一年）

『久米正雄全集』復刻版（本の友社、一九九三年七月）

黒川創編『〈外地〉の日本語文学選』（全三巻、新宿書房、一九九六年一月〜三月）

『〈外地〉日本語文学への射程』（双文社出版、二〇一四年三月二八日）

蒲池勢至「『新鸞』—吉川英治の新鸞像」（『国文学解釈と鑑賞』所収、二〇〇一年一〇月一日）

『軍事偵察 明石將軍』（春陽堂書店、一九三三年九月一〇日初版）

『佐藤惣之助全集』（日本図書センター、二〇〇六年一月二五日、底本は一九四三年四月桜井書店）

柴崎力栄「徳富蘇峰と京城日報」（『日本歴史 第78号』吉川弘文館、一九八三年一〇月）

「昭和戦前新聞文芸記事に関する総合的調査及び研究」（二〇〇七年三月）

『昭和文学年表第一巻』（明治書院、一九九五年三月二〇日）

「新半島文学への要望」（『国民文学』一九四三年三月号）

『新聞総覧』（大空社、一九九一年〜一九九四年）

高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波新書、二〇〇二年六月二〇日）

高木健夫編『新聞小説史年表』（国書刊行会、一九八七年五月三〇日）

垂水千恵『台湾の日本語文学』（五柳書院、一九九五年一月二四日）

趙鎮基^{チヨクケン}『韓日プロ文学論の比較研究』（ブルン思想、二〇〇〇年一〇月二〇日、ソウル）

鄭晉錫^{チヨンジンソク}『言論朝鮮総督府』（コミュニケーションブックス、二〇〇五年五月六日、ソウル）

鄭炳浩^{チヨンビョウホ}「韓半島の植民地（日本語文学）の研究と課題」（『日本学報』第85輯、二〇一〇年十一月）

『帝国日本の移動と東アジア植民地文学』1・2（図書出版ムン、二〇一一年十一月一八日）

『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人たち』（図書出版ムン、二〇一〇年一〇月三日）

『定本花袋全集 別巻』（臨川書店、一九九五年九月三〇日）

『定本佐藤春夫全集 別巻1』（臨川書店、二〇〇一年八月一〇日）

『定本横光利一全集 第十六巻』（河出書房新社、一九八七年二月二〇日）

- 『徳田秋聲全集 別巻』（八木書店、二〇〇六年七月二〇日）
- 『直木三十五全集別巻』（示人社、一九九一年七月六日）
- 『林芙美子全集』（文泉堂出版、一九七七年）
- 『久生十蘭全集Ⅶ』（三一書房、一九七〇年五月三十一日初刊）
- 『広津和郎全集』（中央公論社、一九八八昭六三〜一九八九年）
- 復刻版『京城日報』全一九一卷（韓国図書センター、二〇〇三〜二〇〇七年）
- 許錫^{ホン}「明治時代の韓国移住日本文学における内地物語と国民的アイデンティティ形成過程に関する研究―朝鮮新聞の連載小説「誰の物か」を中心に―」
- ホン・ソソヨン「日本語新聞『朝鮮時報』と『釜山日報』の文芸欄研究―1914〜1916―」（『日文学報』第57輯2巻、二〇〇三年一〇月）
- 宮内俊介『田山花袋書誌』（共信社、一九八九元年三月二五日）
- 『室生犀星文学年譜』（明治書院、一九八二年一〇月二五日）
- 『モダン日本』朝鮮版（モダン日本社、一九三九年一月一日）
- 『モダン日本』朝鮮版（モダン日本社、一九四〇年八月一日）
- 森英一「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（明治・大正篇）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編29、一九八一年一月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇1）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編33、一九八四年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇2）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編33、一九八四年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇3）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編33、一九八四年二月）

- 教育学部紀要』人文科学・社会科学編37、一九八八年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇4）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編37、一九八八年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇5）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編57、二〇〇二年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇6）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編53、二〇〇四年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇7）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編54、二〇〇五年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇8）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編55、二〇〇六年二月）
- 「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇9、完）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編56、二〇〇七年二月）
- 「『秋田魁新報』文芸関係記事年表稿（大正篇・上）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編30、一九八一年九月）
- 「『秋田魁新報』文芸関係記事年表稿（大正篇・下）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編30、一九八一年九月）
- 「『秋田魁新報』文芸関係記事年表稿（昭和篇1）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編46、一九九七年二月）
- 「『秋田魁新報』文芸関係記事年表稿（昭和篇2）」（『金沢大学教育学部紀要』人文科学・社会科学編47、一九九八年二月）
- 「『北陸毎日新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇1）」（『金沢大学教育学部紀要』教育科学編41、一九九二年二月）

- 「『北陸毎日新聞』文芸関係記事年表稿…昭和篇2」（「金沢大
 学教育学部紀要」人文科学・社会科学編5、一九九五年二月）
- 「『北陸毎日新聞』文芸関係記事年表稿…昭和篇3」（「金沢大
 学教育学部紀要」人文科学・社会科学編6、一九九五年二月）
- 「『北陸毎日新聞』文芸関係記事年表稿…昭和篇4」（「金沢大
 学教育学部紀要」人文科学・社会科学編6、一九九六年二月）
- 森山茂徳「現地新聞と総督政治―『京城日報』について―」（『近代日
 本と植民地7、文化のなかの植民地』、岩波書店、一九九三年一月
 八日）
- 『吉川英治全集四十八』（講談社、一九六八年八月二〇日）
- 吉村昭『関東大震災』（文芸春秋、一九七三年八月）
- リ・ジョンオク『1930年代韓国大衆小説の理解』（国学資料院、二〇〇〇
 年一月二〇日、ソウル）
- 李相哲^{リソウテツ}『朝鮮における日本人経営新聞の歴史』（角川学芸出版、二〇〇
 九年二月二八日）

初出一覧

(博士論文としてまとめるにあたり、それぞれに大幅な修正を施している)

第1章 「京城日報」における文芸欄の形成——その成立と役割を中心に

書き下ろし

第2章 「京城日報」における連載小説と講談

「京城日報」における日本語文学関連目録

〔敍説Ⅲ〕96号、花書院、二〇一一年四月

「京城だより③『林芙美子全集』未収録資料紹介」

〔九大日文〕16号、九州大学日本語学会、二〇一二年三月

「京城だより④『定本久生十蘭全集』未収録資料紹介——「酒の害」について、「激流」を中心に——

〔九大日文〕20号、九州大学日本語学会、二〇一二年一月

第3章 脚色・挿入される関東大震災——上司小剣「災後の恋」論

「脚色・挿入される関東大震災——上司小剣「災後の恋」論——

〔近代文学論集〕第39号、日本近代文学会九州支部、二〇一四年二月

第4章 「京城日報」における芥川龍之介の「提灯文」をめぐる——

宮崎光男との親交を中心に

「京城だより②『芥川龍之介全集』未収録資料紹介——宮崎光男との親交をめぐる——

〔九大日文〕17号、九州大学日本語学会、二〇一二年三月

第5章 菊池寛たちの昭和五年の朝鮮訪問をめぐる——講演会で

愚痴をこぼす文学者

書き下ろし

第6章 「京城日報」における検閲の問題——佐藤春夫の「律儀者」

を中心に

「京城だより①佐藤春夫全集未収録資料」

〔九大日文〕15号、九州大学日本語学会、二〇一〇年一月

第7章 「京城日報」における大衆小説の成立と変遷——朝鮮文人協会

の改革と『国民文学』をめぐる

1930年代初めの「京城日報」における「大衆小説」——李石薫(牧洋)を視座に——

〔記憶と表象から見る東アジアの20世紀〕、景仁文化社、二〇一三年五月、ソウル